
あるループの話。

わわわわ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あるループの話。

【コード】

N1012S

【作者名】

わわわわ

【あらすじ】

ノリで書いたネタですので、寛大な心でご覧下さい。

第一話 一回目？

「う、ここは？」

眩しい光に照らされ僕は目を覚ました。白い空間、目を細め眺めたところ、そういった表現が似合う部屋だった。ようやく眼が慣れてきた頃、自身が寝ていたベッドやその環境から、ここが病院だと僕は悟った。

「アリー、目を覚ましたのか！！」

乱暴に開かれたドアの方に眼を向ければ、一人の老人が驚愕を顔に浮かべ、僕の方へと眼を向けていた。杖を手に持ち白いローブを着たその姿は、魔法使いのコスプレか何かなのだろうか、冷静な僕の頭は直ぐに答えを見出していた。

アリー、それが僕の名前なのだろうか。この病室には自身しかおらず、僕の方へ向き、そう名を呼んだのだ。しかし、コスプレをするようなお爺さんだ。悪戯の可能性もある。だから、次の僕の言葉はその意味では妥当だったのではなからうか。

「アリー？誰ですか、それは」

思っていたよりも凄く幼い、そして女の子っぽい声に僕は驚きつつもそう口に出していた。再度老人は驚愕、しかし先ほどの驚愕は喜びを含んでいたが今回は悲しみ、それも唇を震わせ驚いている。

老人が数瞬狼狽しながらも即、僕の下へと駆け寄り、両手を肩に掛けた。そして、何度も信じられない様に、“覚えていないのか？”

と問いかけ、僕はそれに同じ答えを返した。何度も身体を揺らされ、問いかけられるうちに、僕は僕の名前を覚えていない事に気が付いた。

老人の繰り返し返される意味のない問いに、僕は目覚める直前まで見ていた夢に思いを馳せていた。

*

眼を覚ませ

頭に響くその声に眼を覚ました僕は、目の前に何かがあるのがわかりつつもその姿かたちを眼にする事が出来なかった。存在していると自身がわかつている事は不思議であったが、その存在は犯しがたい神聖な何かだという事だけは感じていた。

眼が覚めたか

神なのだろうか、ふと僕の頭を過ぎった。だとすれば、僕は死んだのだろう。死後の世界とは何とも不思議なものだ。光溢れ、眼を開けているのに、前が見えているはずなのに、すぐ前にいる存在の姿すらも確認できない。

お前を転生させることになった

は？なにを言っているんだ。そう僕は口に出そうとしたが声が全く出ない。声が出ないとは死後の世界も不便なものだ。いや、声以外にもっと便利なものがあるのかもしれない。どこか目の前の存在から逃避するようなことへと考えを移そうとしていた。

不運だな

不運、自身のことをそう称され、僕はどこか納得していた。なるほど神が言うのなら僕は正しかったのだらう。しかし、もう一度するほどの勇気を持てるか自信がない。

いや、罪深いというべきか

その声が頭に響いたところで急速に目覚めへと向かっている事を悟った。だからこそ、これは夢なのだと考えたのだった。

*

あの後が大変だったらしい。僕は老人の問いかけに答えず、夢を思いついて出たが、最後まで思い出したところで頭痛に襲われた。苦悶する僕の姿にその老人は狼狽し医者の下へと助けを求めに走り、戻ってきたときには僕は気絶していたようだ。その後、一悶着ありつつも、落ち着きを取り戻し、再度僕が目覚めるまではとそれまで同様に足しげく病室に通っていたのだという。

事件があつてから七日間、そして僕が一度目覚めてから二日間の時を経て僕は眼を覚ました。今度は夜なのだらう、部屋は暗く落ち着きそれまでの事を考える時間が取れた。有体を言ってしまうはこの二日間はアリーというこの身体の持ち主の記憶を映画のように見ていた。尤もそれは随分と早送りでほとんどの事は理解できなかった。登場人物は主に五人、同年代の少年少女、少し年上の少女。そして先日会った御老体と住んでいたであろう村の老人だった。会話まではわからなかったが、その五人は頻繁に出ておりかなり近い間柄である事が窺われた。

そう頭の中を整理しつつ、自身を確認してみれば少女の身体。いや、幼女というべき年の頃だろう。夢の中に出てきた“神”が関係してくるのだろうか。アリーはどこに行ったのか、何故こんな事になったのだろうか。疑問は尽きない。

古典的な確認方法ではあったが、頬を抓っても痛みがあり現実として受け入れるべきなのだろうか、と思い描くも僕が産まれてから今に至る、二十幾年の人生経験においてそれを許容することはできなかった。つまり、現実逃避することとし、その日の夜は眠ることにしたのだった。きつと、目覚めればこんなところからはおさらばできると。

残念ながらその希望が叶う事はなかった。物音に眼を覚まし身体を起こしてみれば、再度御老体が、そしてその他にも一人の少女を連れていた。アリーの記憶にいた少し年上の少女だった。

「ア、アリー。今度こそ目覚めたんじゃないな」

恐る恐るといった感じで御老体は先日と較べものに為らないほどゆつくりと近づいてきた。そして、僕の両手を手に取ると、“よかった。よかった”と涙ながらに喜びを口にしました。アリーと御老体との親しさかつ心配の度合いがよくわかり、今の状況を鑑みれば胸がチクリと痛みを覚える。

「え、え」と

僕は戸惑いつつ、御老体から目線を外し、少女へと眼を移した。それでも少女は眼に涙を浮かべ突っ立っていたが、僕と眼が合うと同時に喜びを精一杯表すかのように駆け寄り抱きついてきた。

数分間、正面では目の前で御老体が俯き、抱きついてきた少女が僕の胸に顔を押し付け、嗚咽を漏らす。かなり奇異なその状況に混乱を来すも、その状況に水を差すのもどうかと感じ、ただそのままにしていた。わかったことは先日と何ら変わらない状況だったということだった。

二人の漏らす言葉から、どうやらこの身体の持ち主であるアリーは何らかの事件に巻き込まれ、死ぬところだったらしい。その事だけは二人が落ち着きを取り戻し、距離を取るまでに理解することができた。

さて問題はその後、僕はどうするべきか、だ。思いついた選択肢は三つ。一つ目はアリーとして振る舞う。これはあり得ない。ぼろを出すのは自明であり、目の前の関係が深い二人の名前すらわからないのだ、できるわけがない。

二つ目は記憶喪失を装う、だ。これは現実的だと思えた。神云々や転生、いやむしろ憑依などという話をするより目の前の二人も受け入れやすいものだと思える。死ぬところだったような体験をしたのだろうから、多少の性格変化は大目に見てくれるだろう。尤もアリーの性格など断片的にしかわからないので如何ともしがたい。

そして、三つ目は僕の身に何が起きたのかを全て説明することだった。これは一つ目と二つ目に較べて後ろめたさがなくなる利点があるが、果たしてその後どうなるか予想もつかない。現代の科学でも解明不能な事であることは確実であるし精神科医に連れて行かれ、その後どうなるのか……。

三つ目と言いたいところだったが、二つ目で様子を見ることにした。目の前の二人の涙を流し喜ぶ姿を見ていれば、とてもそのことを口

にできるものではない。しかし、三つ目の話を信じさせるのはそう難しいこととは思えない、幼女が知りえない話を延々とすれば良いのだ。

悲しむ二人の姿をこれ以上見たくないから記憶喪失を装う。できることなら本人を演じてあげたいが、知らないものを演じる事は出来ない。そのように考えること自体、僕らしくなく、アリーに影響を受けているのかもしれない。尤も、目の前でこんなに泣かれるなどという体験やこんなにも大事に思われている事を実感した事など僕はなかったのだから影響を受けていないのかもしれない。

「アリー、すまない。ワシが不甲斐ないばかりに」

不甲斐ない、どういうことなのだろうか。死に掛けたことにこの御老体は関係しているのだろうか。そう疑問を持つも悔恨を表情に打ち出す御老体に掛ける言葉を見つける事は出来ない。

「アリーちゃん、よかったわ。目覚めて。そうだわ。ネギたちにも知らせて来ない」と

そう口にし、涙の痕も拭かず走って外へと駆け出して行った。少女がいない方が話し易かった僕はこの時とばかりに口を開いた。

「申し訳ございません、お爺さん。僕はお二人の事を思い出せないのです。記憶喪失なのかもしれません」

そう口にした僕に対し御老体は愕然と、そして納まりつつあった涙を再度流し、嗚咽を漏らすのであった。

*

再度、少女・ネカネがやってくるのにそう多くの時間はかからなかった。しかし、その時間は僕とお爺様にとっては大事な時間であった。

「アリー、眼を覚ましたのね!!」

ドタドタと走ってくる足音が聞こえて来、やや緊張した僕に対し、走ってきた勢いそのままに同年代の少女・アーニヤは抱きついてきた。純真無垢な笑顔、僕にはそれはかなり眩しいものだった。

その後から少々遅れ気味にネカネとともに、走って入ってきたのは僕の双子の兄・ネギだった。

「あ、アーニヤ。僕だって!!」

そういつてネギもアーニヤに負けないようにとばかりに僕の下へと抱きつきにくる。

「……………痛い」

僕は少々無機質な声でそう口にした。抑揚のないその声に陰りのある表情を見せるお爺様は小さく頷いた。僕は少しでも表情を緩め、二人を抱きしめ返した。

「ネギ、ほら離しなさいよ。アリーが痛がっているじゃない!!」
「違うよ。アーニヤの方だろ!!」

そこから続く二人の責任のなすりつけ合いの少々微笑ましい光景に
思わず僕は苦笑いを返す。最後にはネカネが二人を落ち着かせ、僕
から二人を引き離す。

「三人ともそろそろ帰る時間じゃろう？ワシは暫らく用があるから
残る」

「えーボクだつて残るよ。まだアリーとお話ししてないし」

「私だつて」

「ネカネ、すまんが、頼めるかのう」

「はあ、あたしだつて……」

ネカネはそこまで口にしつつも、自分がお姉ちゃん役だという自覚
なのだろう“わかりました”と口にし、巧く二人をのせ三人で家へ
と帰って行った。二言三言挨拶を交わし、また明日という約束をす
ることでお別れとなった。

*

「さて、アリーや」

見送りだといって病院の外まで家に帰るか確認しに行っていたお爺
様が、再度部屋を訪れるのにそう時間は必要なかった。未だ目覚め
て一時間程度、嵐のように過ぎ去った時間だった。外は夕方から日
が沈み夜に差し掛かるうとしていることを示すように暗くなりつつ
あった。

「何か思い出せたかのう？」

「申し訳ございません。何も思い出せませんでした」

「……………そうか」

記憶喪失であることを話した僕はネカネを悲しませないために演技をする提案をお爺様へと行った。ネカネとアーニヤ、それにネギを悲しませないためのだろう、その提案に乗ったお爺様は三人の名前、そして、僕は口数が少なく表情もあまり変えない子供だったことを教わった。ある程度イメージが固まった僕はお爺様の演技指導を受け先ほどの三人を乗り切った。

「アリー、全く記憶がないのか？」

「いえ……………お爺様とネギ兄さま、ネカネお姉ちゃん、アーニヤ。あともう一人キセルを銜えた口の悪そうなお爺さんの顔だけは覚えていました」

「……………そうか」

俯き、眼を瞑り、眉を顰めお爺様は苦渋の表情を浮かべていた。やはり、僕の記憶がないのが辛いのだろう。

「申し訳ありません。僕が」

「いや、アリー違うんじゃない」

僕の発言を遮りお爺様は言葉を続けた。

「そやつはおそらくスタンじゃろうて。だが奴は少々遠いところに行っておってな」

「遠いところ、ですか」

遠いところ、その言葉を口にした時お爺様は辛そうな表情を浮かべた。死んだ、という事なのかもしれない。しかし、そこまで聞くべきことではないだろうと僕は口を噤んだ。

*

数日後、漸く退院した。その間にお爺様から様々な情報を仕入れ、会話に 尤もあまり喋らないアリーは会話というよりネギとアーニヤの掛けあいを困ったように見ているだけのことが多かったように であり困らなくなっていた。

お爺様の話の中で、最も驚いたのは村が襲撃されたという話だった。村が襲撃された、イギリスのウェールズで。今は一九九七年の正月過ぎ。去年の末の事だったらしいが、イギリスの治安とはそんなに悪かったのだろうか。

スタンさんは死んではいないという話だったのでおそらくどこかに入院しているのだろう、後でお見舞いに行きたい由を告げたところ、 “ダメじゃ” と一言で斬って捨てられた。また、それは他の村の人たちにしても同じだった。

確かにあまり人には会わない方が、ボロが出にくいのもかもしれないけれど、“優しい” アリーが会いに行かない選択肢はないのではないかと思っていた。しかし、さつさと次の話へと移したお爺様に対し強行に主張するほど、僕はアリーを知らない。

ここまでは退院前の驚いた話であったが、一番驚いた話は退院直後に気付いたことだった。村が襲撃に遭った為、今はネギ・ネカネ・アーニヤとともにお爺様の家に住まわせてもらっている。けれど、休みが過ぎればネカネとアーニヤは学校の寮へ、僕とネギも同じ学校の寮に今年の秋から通うらしい。

お爺様の家のリビングにてお爺様とネギと僕でその話をしていた時に、ネギが突然“そうだ”と口に出し何か思いついたのだから部屋へと走って行った。暫らく経つとネギは大きな杖を持ってきた。

杖？自身の身体の何倍かある大きさの杖を持ってきたネギに対し僕は困惑の表情を浮かべる。

「ほら、アリー。ボクがお父さんから貰ったんだ」

うん？お父さんから杖を貰うのが凄いのだろうか。自慢気な表情を浮かべるネギに対し僕は困惑を隠せなかった。むしろ杖なんていらないじゃないか、そんなに大きいのは邪魔なだけだろ、と。だから、困惑の表情を浮かべお爺様の方を見ると、焦った表情を浮かべている。

「そ、そうじゃな。行方不明だったお前たちの父・ナギが今回の事件の際に現れてお前たちを救ってくれたんじゃない。アリーは逢えなかったが、生きているとわかったんじゃないからいつかまた逢えるじゃない。こんな嬉しい事はないのう、アリー」

「……そうですね。とっても嬉しいです」

困惑の表情から一転、僕は喜びの笑顔を浮かべた。内心、初めて知る事実に関係を隠せなかったものの、お爺様の過剰ともいえる説明によって事なきを得た。しかし、僕の言葉に今度はネギの表情が沈んでいく。

「……ごめん、アリー。ボク、お兄ちゃんだから……だからこの杖はアリーが持ってた」

眉を顰めネギがそう口にする。おそらく、僕が困惑の表情を浮かべていた事から不満をもっていると思っただろう。自分だけが父に逢い、僕が逢えなかった上、モノまでもらったのだから、僕の事を想つての申し出だろう。

ネギは泣きそうな表情をしている。よつぽど杖が大切なのだろう。渡したくない、けれども僕の事を想えば、と苦渋とも言える決断だったのだろう。子供とは思えない妹想いのとても良い子だ。ただ、僕がその杖に何の価値を見いだせていない事を除けば美談と言つて良い。

どう応えるか迷った僕はお爺様の方を見る。あれからお爺様とはある取り決めをしていた。僕が困った時にお爺様がい、いいえを合図で送ってくるのだ。けれど、今回はその合図が無い。だから僕の自由にしろ、という事なのだろう。

「……………ネギ兄さま」

そう口に出し、精一杯手を伸ばし僕の方へと杖を差し出していたネギの手を両手で包む。“あつ”と残念そうなネギの音がするが、それをゆっくりネギの方へと押し戻す。

「えっ？」

「僕は次に父さまに会った時になにか強請りますわ。だから、それはネギ兄さまが持つていてください」

「……………うん!!」

元氣一杯、少し涙目であったネギは涙をふき、力強く頷いた。

「じゃあ、ボクが絶対お父さんをアリーに会わせてあげるからね！」

「！」
「うん」

僕は精一杯の笑顔で決意をするネギに対し答えを返した。
しかし、問題はここからだった。

「そつだ。ボク、この杖でも魔法が使えるようになったんだ!!」
「こら、ネギ。その杖は危ないから使っちゃいかんといったじゃろ」
え？魔法つてなに。……あ、そういえばお爺様も最初に会った時、杖を持っていたような。あれから特に見かけなかったから気にもしていなかったけど。いや、きつと聞き間違いだ。

僕はそう思いつつも、“ネギ” “魔法” “大きな杖” “父が行方不明” “村が襲われる” というキーワードを思い起こす。どこかで聞いたような話だ。そういえば、ネギの顔に見覚えが。……いや、ない。ないはずだ。

「ほら見てて“プラクテ ビギ・ナル 火よ 灯れ”」
「……ほう。確かに出来ておるのう。じゃがダメじゃと言っただろう」

目の前でネギによるものか、杖から火が出る。……いやきつと何かのトリックだ。そう現実逃避しつつあった僕の前で、今度はお爺様何かしたのだろう、独りで杖がネギの手を離れお爺様の下へと飛んで行った。

……あれ、ここ“ネギま”の世界じゃね？

*

ちよ、ちよ、ちよっと冷静になってみよう。頭に手を当てて僕は考えていた。ネギは杖の先端にライターのような発火装置を仕込んでおり、お爺様は杖に透明の糸を付け引つ張った。これで解決だな。

そういえば、村が襲撃された際も悪魔に襲われたとお爺様が言っていたような。でも、あれは恐ろしい悪魔のような人間という意味ではなかったのか……。お爺様に拳骨を落とされ涙目で説教を受けているネギを前に僕は現実逃避を行っていた。だから、僕は一縷の望みを掛けて敢えて質問をぶつけてみた。

「……………そういえばお爺様。僕たちが通う学校の名前はなんというのですか？」

「うん？言つとらんかったか。ワシが校長をしておるメルディアナ魔法学校じゃ」

……………胸にズンと来る大ダメージ。何を当たり前のことをとばかりに魔法学校と口に。ここ数日でお爺様の人柄を少しはわかったつもりだが、嘘を吐くような人間ではなかった。

僕の茫然とした表情にお爺様は気付いたようで、焦った様子でネギをどこかの部屋に連れて行き、“罰として暫らくここに閉じ込めておく”といい、僕の下へと戻ってきた。

「どうしたんじゃ？」

「お爺様、魔法って」

「魔法？……………話しておらんかったか？」

「はい」

「……………すまんのう。日常的な事は大体把握しておったから、てっき

り魔法も覚えておるものとばかり」

焦った表情から一転、すまなそうな表情を浮かべお爺様は説明を始めた。

第二話 一回目？

前回のあらすじ

『ネギの双子の妹になった主人公アリーが
爺の協力を得て本人に為りすませていたところ
—話約七千字使って漸くネギまの世界だと気付いた』

……あれから幾年か経ち、遂に卒業式が始まった。僕っ娘のアリ
ーは今日も元気です。

「ネギ・スプリングフィールド君！」

最初に呼ばれる首席のネギ、その隣に並ぶアーニヤも次席として少し悔しげな表情を浮かべていた。続いてアーニヤが呼ばれる。

「アンナ・ユーリエウナ・ココロウア君！」

僕はここまでに至るあれからの事を思い出していた。

お爺様と別れ、僕は部屋に籠った。そして、漫画の世界である事を受け入れつつ、今後の方針を固めようと考えたのだった。原作が始まるのが確かネギが十歳の頃だったはず。あと六、七年の期間がある。

そして、僕はネギと同じく英雄の娘なのだ。ただ、鏡で見ても双子とはいえネギには似ていない。……確か、母親が犯罪者だったっけ。

顔も覚えていないけど、その人に似ているのかも知れない。

さてと、それはともかく僕がどうすればいいかは自明のことだった。そう、ネギと一緒に行動しない、だ。ネギは主人公、危険が付きまとう職業だ。僕はそつと遠くからその活躍を仄聞する。そんな関係が僕にはベストのはずだ。まあ、英雄の娘といっても中身は僕。凡才も凡才、大した力添えもできないだろうから、足手まといに為らない様に気を付けないと。

まあ、でもネギは子供だし少しくらいは助けてあげるのが兄妹としての役割かもしれない。などと考えていたが、それが甘い考えを覆されるのが秋に始まった学校だった。

それまでも家でネギは暇さえあれば、魔法の練習をしていた。僕も魔法というものに夢膨らませ練習に勤しんだ。始めた時、練習量の差だろうと僕は思っていたし、それほどネギとの間に差があるとは思っていなかったのだ。

学校開始早々知らされるクラス分け、行き成りネギだけ特別クラスだった。暫らく経てば飛び級した事になり一つ上のアーニヤのクラスに編入される。前例は何人もいるが、ここ十年余り見なかった事らしい。この時からネギと僕は疎遠になりだした。たまに休みに会った時もネギはとりつかれたように勉強をしていたのだ。

そこへ行くと僕の成績は平々凡々といえるが、それでも上位成績を修めている。ネギとは一つ下の学年で、だが。座学はかなりいけるがどうしても僕の場合実技が足を引っ張るのだった。精神年齢がチート 子供でなく大人という意味で である僕からすれば座学がいけるのは当然だったのだが、結局のところ僕は凡才だということだろうとある意味でネギを羨望し、妬んでいたのだと思う。

文字通りレベルが違った僕らは、特に僕の場合は教師や生徒にネギと比較される事も多く、大人気ないとはわかりつつもやはり思ってしまった。あまり似ていない顔からも僕は捨て子かなにかではないか、と噂されていたらしい。僕の耳に入ったのは最近の事だったし、当時に耳に入る事があっても全力で賛同したと思う。

僕が三年になったころにはネギは更なる飛び級、アーニヤもそれに続いて飛び級をし、二人共に二年の差を開けられることとなった。けれど、その頃には開き直りを覚えていた僕はほどの勉強と物語を読む事に情熱を傾けており、然程気にする事も無かった。僕にとって両親とは資産を残してくれた良い人ということで、解決していたのだ。

僕は、二トになる。おそらく、恥らもなくそう口に出来る程度には開き直れていた。だから、最初に立てた目標、“ネギ頑張り・できたら手助けするよ”の手助けはする事はなかりうと思いついていたし、現に何ら手助けはできていないだろう。

努力する天才・ネギに対し、努力しない凡才である僕はそれを自覚しつつ日々を過ごしていた。だからこそ、三年に為る頃にはネギに対する妬みは失われていた。同時に羨望も失われ興味を失くしていたのだ。

まあ、つまり二人の卒業式をネカネとともに観覧席から眺め、純粋におめでとうと声を掛け、二人を其々の修行先に送り出したのだ。

*

五月中旬、日本は梅雨入りしているのだろうか、などと詮無いことに頭を感じつつ僕はカフェで独りコーヒを嗜んでいた。ネギの活躍はネカネを通じて仄聞しており、といつてもオブラートにかなり包まれた内容であったが、今後の活躍にも期待していた。

「アリーー!!」

少々遠くから僕を呼ぶ声がする。席に座ったまま振り向いてみれば同じクラスのリザだ。二歳年上で僕と異なるその魅惑のおっぱいは僕の眼を惹きつけてやまない。十二歳ながら成長著しいのだ。妬ましい、とだけ言葉を送っておくものの、その既に揺れるおっぱいを見ればつい許してしまえる僕は未熟だった。

「アリー。来週の課題終わった?」

「うん。終わったよ」

「ね、見せて。お願い」

両手を合わせ、お願いしてくる。リザは十二歳であるが別に留年したというわけではない。この学校の入学には年齢の幅があり、彼女の方が普通なのだ。僕とネギ、アーニヤの方が早すぎただけである。尤も彼女が課題をやっていないのは脳筋気味もとい栄養が全て胸へと向かっている為だろう。実技を重視する彼女には、座学はかなり苦手としている。僕も座学の方へと天秤がかなり傾いているので彼女のことを悪くは言えないが、尤も僕は最低限の実技課題をこなせるようにはできている。

リザは僕の視線に気付いたのだろう、両手で胸を隠すような仕草をする。露出度の高い服を着ているわけではなく、皆を制服として口癖を着ており全く露出はしていない。

「……はあ、相変わらずね。アリー」

「人が一朝一夕に変わるわけがないよ」

「御尤も」

リザが毎度僕に課題を頼るようにね、と言外に付け加えるも彼女は僕の言いたい事を解っているため口にはしない。

「じゃ、行こうか」

「ほんつとありがとね、アリー」

感謝されて悪い気はしない、それが毎度の薄っぺらいものだとしても。尤もお礼にとばかりにその齡の割に豊満な胸を揉むことができない僕としてはどうでもいいことだ。ホントどうでもいいことだった。

「アリーに、あれ？リザ先輩」

「私はどうですか!？」

「そんなことないですよ。こんな時間にリザ先輩が実技訓練をしていないなんて……あ、座学の課題ですね」

「……うっ」

「やっぱり」

僕とリザの後輩、セラ。僕と同じ齡だから気軽に名前を呼び合っている間柄だ。リザに較べれば慎ましめ、それでいて僕以上にポリュームのあるその胸は僕のターゲットの一人に名を連ねるのに充分だった。

「あ、そうでした。このバカ……もといリザ先輩をからかに来たのじゃなくって」

「ちよつと待て、セラ。今、私の事をバカって呼ばなかったか!？」

「アリー、校長先生が直ぐに部屋に來いですって」

「おい、私を無視するな!？」

「お爺様が? うゝんでも課題の件もあるし……。リザ。いつもの場所に置いてあるから、これ鍵」

「お、ありがとよ」

無視し続けていたセラに対しリザは頭をグリグリと痛めつけ、セラの悲鳴が周囲へと響き渡った。僕を始め彼女たちのじゃれ合いには慣れっこで周囲もいつものことか、と二人が耳目を集める事はなくなっている。

*

「お爺様参りました」

演技指導を自分へと行った半分程度の意味での共犯者であるお爺様の下へとやってきた。尤もその半年も経てば殆ど意味の為さないものとなった。学校の寮に入り、ネギ・アーニヤともクラスも学年も異なる。本来のアリーを知る人物が周囲からいなくなっていたのだ。

男子三日会わずれば……というが、言葉を交わす機会も少なくなり環境が変われば僕が変化したところで咎められることはない。一年の頃に較べれば大分と変化し演じる気も全くない事を自覚している。突然、昨日までと変わるのではなく長いスパンでの変化だった。

尤も最初の半年もネギは僕に興味をほとんど持たず、父探しの為に勉強にばかり勤しんでいたが……。

「ふむ、来たか。最近どうじゃ？」

「……はあ。変わりありませんわ、お爺様。しかし、そのような事で呼ばれては困ります。僕はここでは一生徒に過ぎないのでから」
「まあいいじゃろうて、老人の一つの楽しみじゃ」

たまにこうやって呼びだされる。最初の頃はその度に耳目を集めたものだが、孫ともいえる僕をかわいがるのは仕方なからうと、公私混同ともとれる校内での呼び出しを周囲も認めている。

しかし、今日は少し様子が違うような気がしていた。そして、普段にはあまり疲れた様子を見せないお爺様が、表情にありありと疲れを見せていることに気が付いた。

「お爺様、お疲れのようですが、大丈夫ですか？」

「……大丈夫じゃよ」

嘘を吐く時の癖である、一瞬の眼の泳ぎを僕は見逃さなかった。大丈夫でない？ネギ関係で何かあったのだろうか。いや、ただ仕事の心労が祟っただけかもしれない。

「お爺様、本当にお疲れの御様子。休まれた方が良いでしょうよ」

「……そうじゃな。一段落すればゆっくりと養生しようかのう」

「本当にお身体に気を付けてくださいね」

“それでは失礼します”そう口にし、僕は部屋を出ようとする。話も終わったし、あまり長居するより早めに仕事を終わらせ、休んだ方が良さだろうという判断からだだったが、同席していたお爺様の秘書・ドレッドさんに引きとめられる。

「待ちなさい。アリー」

「へ？なにか他にあるのですか？」

いつもであればこの程度で席を外すのだが、今回は何かあったらしい。珍しく用件ともいふべきものがあつたのかと僕の方は驚いていた。

「……ああ……私から話しましょう」

「いや、ドネット。ワシから話そう」

お爺様の様子を確認しつつドレッドさんは自分が話そうとするも、眉を顰めていたお爺様は決心がついたとばかりに強い口調でそう言い放つた。もしかして疲れていたのではなく、口が重かつたのだろうか。

何かネギにあつたのだとすれば僕だけ、というのはおかしい。それともアーニヤとネカネを呼びだす時間もないほど緊急の事があつたのだろうか。僕に告げることを躊躇し悩む事とは何なのか、とその深刻さに真剣さが否が応でも増す。

「……実はな、アリーよ」

ゆっくりと、しかし、確りした声で告げられる。もっと早く、一気に話してくれよと思うのは仕方ないと思う。

「……このままでは留年する」

「へ？僕が、ですか？」

「そっじゃ」

僕にとって全く深刻でない内容に驚きつつ、そんな告げるのに躊躇

するような内容ではないだろうと考える。別段留年したところで、僕にとっては全く問題ないのだ。寧ろ、目指せ二ート生活を掲げている僕としては半ば二ートに近い、ラクなこの生活を続けられるならそれはそれでありかもしれない、という結論に至った。

「わかりました。留年ですね」

僕の明るい、寧ろ嬉しいとばかりの声に二人は驚いている。でも、単位計算もしっかりやっていたし、どこでミスったんだろうか。それに良く考えればこの時期に告げられるというのもおかしい気が。

「いや、違うんじゃない。そこで補修を受けてもらう事になった」

「え？決定じゃないのですか？」

「ふむ。それでじゃ。実技の単位が足りなくてのう。詳しい事はジョーンズ先生に聞いてほしいんじゃないが、ジョーンズ先生とマンツーマンで合宿する事になったのじゃ」

「で、でも男の先生と二人きりというのは……。だったら同じ実技の先生のマリー先生とか」

「ふむ。予定が空いていなくてのう。そこでこのドレッド君に着いてもらうことになった」

「え？三人ってことですか？」

「そうじゃ」

「そういつことよ。アリー、行くわよ」

ドレッドさんは有無を言わず僕を引き連れ、部屋を出て行かされた。お爺様が疲れていたのはこのために、ドレッドさんの仕事を先に終わらせていたのだろうか。お爺様に迷惑を掛けてしまったな。

部屋に帰り荷物を纏めると、直ぐにと急かされ、合宿場所へと向かった。そこは地下の、僕も知らなかった奥の方に存在し立ち入り禁止と言われた部屋のさらに隠し扉の奥にあった階段を下った先にあった。

急なことであったため、手ごろな空き部屋がなく、ここという事になつたらしい。地下の地下ということでも明かりはドレッドさんが点けた魔法によるもののみであつた。予定では三日。長くなればさらに追加される可能性もあるらしい。こんな息詰まる部屋で筋肉ムキムキのジョーンズ先生とクールビューティードレッドさんと三人は厳しいものがある。せめて筋肉たるまは無しにしてほしかった。

既にその合宿も二日目、何がやりたいのかさっぱりわからない。やることと言えばただ精神の集中と自身の魔力を感じることに。確かに僕はその巨大な魔力に身体が合っていないのかコントロールは巧いってはいない。けれど、基礎中の基礎を態々こんな場所でする必要も無いし、このくらい寮でも一人でやっている。まあ一日一時間程度だけど……。

僕が魔力をコントロールできていないのはそういつた事では無くて器である肉体が魔力の大きさに耐えられないんだって医者が言っていた。……もしや何か新しいコントロール手段が見つかり、これはその為に必要な事なのだろうか。って訳ないよね。だったら先に言うはずだし、補修だしね。うん、どうということなのか。

「む、ちよつと出て来る」

何かに気づいたようにジョーンズ先生が突然、外に出て行くことす

る。トイレか何かだろう。

「私も行くわ」

出て行こうとするジョーンズ先生に対しドレッドさんが声を掛ける。何か決意しているような表情をしている。もしか、二人は出来ていて……。年齢的にも釣り合いが取れるし確か、二人とも独身。何の問題も無いな。けれど僕は言うべき事がある。

「……えつと。僕も一緒にい」

「ダメよ!!」

間髪いれずドレッドさんから制止が掛る。いや邪魔すべきでないのは解るんだけど、こんな部屋に一人で居たくないというか……。睨みつけられた僕はドレッドさんの指示に従い部屋に残ることとなっていた。

五分ほど一人で過ごしていただろうか、突然明かりが消えた。“ひやい!”と少し悲鳴を上げてしまったのは仕方ないだろう。点けたのはドレッドさんだから消したのもドレッドさんのはず、なにかの嫌がらせだろうか。そう怯えながらも僕は“光よ”と明かりを点ける。

トントン、扉を叩く音がした。何だろう、ドレッドさんたちだったら勝手に開けると思うんだけど……。先ほど明かりが急に消えたことで怖がっていた僕は少々怯えつつも声を掛けた。

「どうぞ、開いていますよ」

ギギギ、扉は音を立て開かれる。そこには男が一人立っていた。小太りで雨でも降っていたのだろう濡れた真っ赤なスーツを着た。そ

して、最も目立つのは右腕が存在していないことだった。そんな目立つ人間、僕が記憶していないはずがない学校外の方だろうか。

「よう、嬢ちゃんがアリー・スプリングフィールドかい？」

「……あ、はい」

漸く何かがおかしい事に気付いた。特に男が可笑しい。僕の方へ一歩一歩近づいてくる度に僕は壁へと下がる。距離を取ろうとするも入口は一つ、距離を詰められてしまう。

「嬢ちゃん」

横に回りこもうとした時、僕は見てしまった。男の背中が白かったのだ。白いスーツを着ていたのだ。そして、良く見れば男の首筋には紅い線があった。驚愕の表情を浮かべる僕に気付き男は言った。

「気付いちまったか。まあ俺は任務に“忠実”な男だからよ！」

そういつて少し残っていた距離を詰められ、グチヨリと嫌な音がする。音源を見れば僕のお腹に男の腕が刺さっている。

「ア、ア、ア」

声に為らない声とも言つべきものしか発せられず、ただ僕はその腕を見つめていた。どこかで体験したその感覚。

「じゃあな、嬢ちゃん」

そう口にした男により腕が引き抜かれる。その感覚を最後に僕の意識は途絶えた。

*

眼を覚ますと僕は白い部屋で寝ていた。どこか既視感を思いつつ、
ボーツと天井を見つめていた。外の騒がしい声に起き上がるうとし
たその時、気付いてしまった。僕の身体が縮んでいることに……。

第三話 五回目？

前回までのあらすじ

『ループだと疑念を抱いた二回目、断定した三回目、繰り返される悪魔の襲来。子供を繰り返すという変な人生経験だけを積み、ある意味全く成長していないアリーは決断を下す』

というわけで既に五度目のアリー。簡単にこれまでの試行錯誤を纏めてみる。

一回目、何が何やらわからないまま殺されたけど、以降の繰り返すから推測するに僕の命が狙われている事を知ったお爺様が、安全な場所へと匿うも見つかって殺された、といったところ。もちろん一緒にいたジョーンズ&ドレッドも戦ってやられたんだと思う。

二回目、前回の状況から僕はお爺様に対し疑心暗鬼に陥っていた。殺すために閉じ込めていたのではないかと。でも、死にたくないからと、日付が近づいたところで旅行に行くと行き先も告げず、旅へ。五月末に“やっと見つけた”って言って例の男がやって来て殺された。ちなみに、この時その男は自分ことを悪魔だと名乗ってきた。

三回目、別に悪魔の言葉を信じたわけではないけど、犯人が悪魔だったのなら村の襲撃と同様、お爺様は関係ないのではないか。むしろ、守ってくれようとしていたのではないかと思ひ積極的に調査に乗り出す。幼女のフリは辛いものがあったけど情報収集のためにお爺様になついたように見せかけ、色んなところに侵入。幼女が理解できまいと話している内容・書類などから情報をゲット。その結果、

どうやら村の襲撃は元老院が関係してそう、ということが判明。信憑性はどうかわからないけど。

それで運命の五月に出来る限り、お爺様他強そうな教師陣の傍にいるようにしていたら、今度はお爺様と二人きりのところに登場。サクツとお爺様が殺され、僕もやられる。

四回目、前回“お爺様、弱っ！！”と思ったかは置いておくとして、今度は総動員だと教員を巧く先導して戦力に為りそうなのを招集する。けれどもやってきた悪魔に全員やられて終わり。

さて、今回は五回目。どうやって助かるかを考えなくてはいけない。あの悪魔を倒せそうなので心当たりがあるのは“紅き翼”関連の人たちだけ。メルディアナの教師陣がサクツとやられるとなると殆どの魔法使いは当てに為らない。つまり、選択肢は居場所の解っている麻帆良のタカミチと京都の詠春となる。あと目撃情報のあるジャック・ラカンもいるけど、見つけられる方法があるか不明だ。

近衛詠春への伝手はないけど、麻帆良のタカミチ・T・高畑への伝手はある。あれは確か三回目の頃だっただろうか、お爺様に付き従って僕の前に現れたのだ。もっとも、挨拶した程度でネギの居場所を聞いてきただけだったけど……。

タカミチは重要人物だった気もするけど覚えてない。既に二十年以上も経っているんだから原作を忘れるのは仕方ないよ。それに一回目は関係ない話になる予定だったから、特に覚えておこうともしていなかったし……。

*

「ネギ・スプリングフィールド君！アンナ」

ふっふっふっ。ついに五回目にして自分の卒業式を迎える事ができた。飛び級二回はかなり厳しい戦いであったのだ。座学は余裕でネギは別格としても次席のアーニヤと競える程度の点数は取れるようになった。

問題は相変わらず実技。一般人並の肉体にネギの半分にも満たないものの、充分チートといえる魔力量。このアンバランスが僕の実技の最大の障害である。現状、出力量の調整が巧くいかず、出すか出さないかの二択しかできない。魔法を行う際にその量に合わせて魔法を調節するという本末転倒としかいえないあり得ない方法で魔法の発現を行っている。

“光よ”などの安全な魔法はそれでも大丈夫なのだけど、“火よ灯れ”とかだと炎が巻き上がり周囲を燃やす可能性もある。そのために、必要以上の魔力は別のところに逃がすという非常にもつたいない、効率がかなり悪い手法を確立した。

「アリー・スプリングフィールド君、以上の六名を今年の卒業生」

まあ、そんな魔法使いだから実技成績が悪く、末席での卒業となっただけですが、それは良い。

卒業すればどこかに向かわされる。お爺様のことだから村の襲撃を鑑みて、最低でも僕とネギは安全と思われる場所に向かわされるはずだ。麻帆良かアリアドネークラスと見て間違いないだろう。できればタカミチのいる麻帆良がベストだけど……。違っても次回チャ

レンジということで。

さて、修行先を見るとするか。

「……………え？」

「ちょっと、アリー。ネギは日本で教師をすることなんだけど、どうだった？」

麻帆良には行けるんだから、良しとすべきだな。うん。

「だから見せなさいよ」

そう言つてアーニヤは僕の証書を覗き見た。

「プツ、あんた。生徒つて、アハハハハ。ネギが……………教師なのに

……………アリーは生徒つて」

「アリー、それつてどこで？」

「日本だわ」

アーニヤがひたすら笑い声を上げている中、ネギの問いに僕は答えた。ネカネは僕とネギの修行先に驚き、お爺様へと抗議の声を上げた。

「校長、ネギが“先生”つてどういうことですか」

「そうよ、ネギつたらチビでボケで……………。それだつたらネギを生徒にアリーが教師にした方がいいわよ」

えっ？アーニヤなに言つてるの。

*

うん。何かがおかしい。原作ネギはこんなに頼りなかったんだろうか。飛行場でネカネ・アーニヤに見送られてからは手を繋ぎっぱなしで飛行機に乗り、日本に着いてホテルでは同じ部屋だったとはいえ、一緒に寝たいと言い出し布団に入ってくる。

あれか。初めての海外、それも知っている人も僕しかないということでも不安なのだろう。それにここから成長して立派になって行く、そんな話だったのだろう。なら、問題ない。まあ、立派に成長して活躍してくれ。僕はタカミチについて守ってもらうから、さ。

「学園生徒の皆さん、こちらは生活指導委員会です」

女子校エリアの大階段前での待ち合わせだけど、迎えの人が時間になっても来ないどころか、もうすぐ遅刻になりそう。そして、残り十分というアナウンスがあるとみんな走り出す。それどころかスケボーやローラースケートまで乗って急ぐというのは凄い光景だ。こんな人ゴミの中、とてもその力を発揮するようには思えないのだが……。

「アリー、そろそろ行った方がよくないかな？」

「大丈夫。待っているように言われたんだから、あっちの不時際よ。それにこんな人ゴミの中行きたくないし。収まったらゆっくり行きましょう」

「うん！そうだね」

そういつてネギは僕の手を握っていた手に力を入れる。痛いわけではないけど、繋ぎっぱなしというのは面倒だから離してほしいのだ

けど……。そうしていると、少し離れたところで立ち止まった二人組に眼が行く。

「はぁ……はぁ」

「アスナ大丈夫？」

「大丈夫……よ。ちょっと……息が……切れた……だけ……だから」

立ち止まるものはその二人組しかおらず、皆駆け足で登って行く中である。その二人組の姿に見覚えがあった僕は原作キャラだったかなあ、と考えた。しかし、名前も出て来ず、顔も思い出せたわけではないのはつきりとは断定できない。

「それにしてもどこにも居らへんなあ。待ち合わせの新任教師」

「……まだ……来てないんじゃない？……もう時間は……過ぎてるけど」

「うーん。あれやわ。うちが爺ちゃん連絡とってみるわ」

少し離れたところで交わされるその会話に僕たちの迎えの人か、と僕は彼女たちの下へと向かう。

「あのう、すみません」

「はい。あ、かわいい子やな。どうしたんや、初等部はここやないで」

「いえ、迎えの人でしょうか？」

「へっ？人違いやよ。ウチらは新任教師を迎えに来たんよ」

「よかったです。でしたらあっています。その新任教師の迎えを探していたんです」

「へ？」

一瞬、二人は唾然とした表情をするも直ぐにニコニコとした笑顔に変わる。

「ごめんな。やっぱり違うんよ、男の人で聞いてるし」
「ええ、そうです。このネギが……」

紹介しようと思い、横にいたはずのネギを押し出そうとするも、いない。あれ？と思いつつ背後を振り返れば後ろに。……少しビクビクして、どうしたんだよ。

「このネギが教師です」

僕が横に避け、ネギを彼女たちの前へと押し出す。

「ボ、ボクがこの度、この学校で英語教師になる事になりました、ネギ・スプリングフィールドです」

「あんたみたいな子供が教師なわけないでしょ……！」

先ほどまで話していた関西弁の娘ではない、ツインテールの女の子がネギの頭を掴み持ち上げながらそう口に出した。なるほど凄い力だ、片腕でそれもそこそこの体重のネギを……。

「……そういや、爺ちゃんが言ったの、そんな名前やった気がするわ」

*

「さて、ネギくん。君にはまずはそのこのかとアスナくんのおる二年A組を任せる事になる」

タカミチが現れ、先ほどの場を収め、連れだつて学園長室へとやってきた。その間に、関西弁の娘が近衛木乃香、ツインテールの娘が神楽坂明日菜だと自己紹介を互いに行った。

「ちよつと待つて下さい、学園長。こんな子供が教師なんてそれにウチのクラスを任せるなんて」

「大丈夫じゃよ。高畑先生も付いておる」

「……それなら」

あれ？アスナは渋々納得しているけど、こんな話だつて。ただの英語教師、それもA組だけを担当つて話になつてるけど……。担任とかじゃなかつたっけ？

「あと、すまんのじゃが、このかとアスナさんの部屋に一カ月ほどネギくんを住まわせてやつてくれんかのう。実は部屋がまだ用意できておらんのだ」

「ちよ……ちよつと待つて下さい、それは」

「ええよ」

アスナの反対に対し、このかは二つ返事で快諾した。二人が言い争いだしたところで学園長が仲裁。日本の生活が初めてなため出来れば暫らく誰かと一緒に住まわせたいが教職員は忙しく無理。だから、孫娘であるこのかとアスナに頼む、と言えばアスナも渋々ながら頷いた。そして、僕を部屋に残しタカミチとともにネギ・このか・アスナは部屋を後にした。ネギは最後まで不安そうに僕を見ていたけど、タカミチがいるのだから大丈夫だろう。

「さて、アリーくん。君の課題は生徒なわけなのじゃが、転入先はネギ先生と同様A組じゃ」

「……どうして僕が中学二年に入れられるのかわからないのです

が

「ふむ。尤もな疑問じゃな。ぶつちやけるとじゃな。アリーくんは魔力の制御が完璧とは言い難いじゃろ？だから、言い方は悪いのじやが見張りを付ける事になっておるんじや」

「はい」

「同室になるのはこちら側の人間でクラスも一緒の方がやりやすかのう、と思つての。その条件に合致しただけじゃ」

「……なるほど」

魔力の暴走というかそういう心配はないのだけど、完全に制御できていないのは事実。でも魔法を使いさえしなければ問題ない。護衛か、いやだったらネギにも付くはずだ。だとすれば言葉通りの意味か……。

「それと、過度にネギ先生に接触せんようにお問い合わせしておく」

「……どうしてですか？」

「実は、ネギ先生が君に依存しておるといふ話が来ておつてのう。

甘えん坊の兄は教師として自立心を養い、しっかり者の妹は生徒にして甘えを覚えさせる、といったところじゃな」

「はあ。でしたら別のクラスにした方が良いのでは？」

「行き成りだとアレじゃろ？だから、段々とそうしていくつもりじや。ネギ先生には主にA組を担当してもらつ事になるが、四月からは別クラスにも顔を出してもらつつもりなのじや」

「……わかりました」

僕としては僕のクラスを変えてもらえた方が、ここから始まる原作のネギの死亡フラグに巻き込まれなくて済むのでいいのだけど……。確かいきなり吸血鬼に襲われて、その後京都で何かまたやられてその後……え〜と、思い出せねエ。どうして僕はしっかり記憶しておかなかつたんだあ。

*

キヤー、キヤーと騒がしいクラス。その部屋の前へとやってきた。退室時にとてもいいおっ……………いいものをお持ちの源しずな先生がやってきて案内されてきたのだ。

「さ、このクラスよ」

「え〜と、騒がし過ぎやしませんか？」

「まあ、いつものことよ」

……………それはどうなんだろう。こういうときはネギが来たのだから今日が特別なよ、というフォローを戴きたかったのだけど。少し恨みがましい眼で、いいおっぱ……………もといしずな先生を見たが、にっこりと微笑み無視され、ドアを開けられた。

「はいはい、煩いですよ。みなさん」

入ると早々にそう言って騒がしい女子達をしずな先生は宥めた。そのまま、タカミチを見つけたしずな先生は“ちゃんと静かにさせてもらわないと困ります” “いやあすいません” などというやり取りを始めた。

しかし、僕の方はとうとうとしずな先生が注目を集めたため自動的に背後の僕も見つかり、誰だとはかりに周囲から見られる。思わず溜息を、としたいところであったがその前に一人僕へと向かってきた。

「アリー……！」

半泣きのネギが元へと突進してきたのだ。周囲の状況から察するにアスナ当たりになにか責められていたのだろう。教師としてネギはやっていけるのだろうか、果てしなく不安だった。僕は半泣きのネギを抱きしめあやし、落ち着かせようとした。

「貴女たち、まず席に座りなさい、説明できないでしょう」

しずな先生の声に生徒たちは僕とネギに好奇の目を向けつつも、仕方なくとばかりに席に着く。そして、全員が席に着いたところでしずな先生に招かれ、ネギと離れ教壇へと向かう。

「では、転校生を紹介するわ」

「アリー・スプリングフィールドです。よろしくお願いします」

僕の声で再度クラスは騒がしくなるも、しずな先生の一睨みで静かになる。一方、タカミチは“アハハハ”と乾いた笑いを浮かべながらしずな先生の活躍を見ているだけ。担任として大丈夫なのか。静かになったところで一人の生徒が拳手をする。

「はい」

「はい、朝倉さん」

どうやら質問は拳手制で落ち着いたらしく、僕とネギが並ばされた。

「同じ名字でしたけど、二人の関係は？」

「……双子の兄と妹です」

目線でネギに応えさせれば再度驚愕の声が……。もしかしてずっとこれが続くのだろうか、不安になる。

*

質問は三つで打ち切られ、休み時間ごとに入れ替わり立ち替わりのネギと僕に対する質問攻めが行われた。最初の授業はネギが担当することになる予定だった英語だが、最初ということでネギは見学という形での参加となった。その後の英語以外の授業にもネギは見学として残っていた。これはタカミチが“僕以外の授業も見学しておいた方がいいし、ネギ先生の担当はこのクラスだけだから仲良くなっておいた方がいい”ということからだった。

さて、放課後となり、ネギは職員室へと向かい、僕は外に連れ出される。

「私が君のルームメイトになる龍宮真名だ。よろしく頼む。あとこつちが桜咲刹那だ」

「よろしくお願ひします」

挨拶を交わし真名と刹那と下の名前で呼ぶことになり、そのまま校内を案内してくれることに。体育館や音楽室に屋上、図書室などにも案内してもらい既に夕方と為りつつあった。

「もう時間じゃないか、龍宮」

「そうだな。アリー、そろそろ一度教室に戻って荷物を取ってこよう。次は寮の方に案内するよ」

「うん、よろしく」

耳は悪くないため、彼女たちの小声での話まで聞こえてしまってい

たがそこは大人、聞こえなかつたふりをする。歓迎会の準備が終わったのだろう。教室であれだけ大きな声で話し合われればいくら僕といえど聞こえるというもの。

教室にやってくれば相変わらず騒がしい。授業中も静かだったのは短時間で有った事を鑑みれば彼女たちは黙つたら死ぬ、そんな生物なのかもしれない。いや、僕もあまり他人の事を言えたものではないが。

「来た、来た。遅いよ、二人とも。もつと早くアリーちゃんを連れて来てくれないと」

「違うです、ハルナ。二人は時間通りで寧ろアスナさんが早すぎたのです」

ハルナと夕映に歓迎され、僕は教室内を確認する。もう始めているらしく、タカミチ・しずな両先生も席についている。そして、ネギはというと。え〜と、アスナともう一人の……。

「委員長さんとアスナさんはいつもあんな感じなのです。それより聞きたい事があるので」

「えと、はい」

グイツと寄ってくるハルナと夕映の迫力に押され僕は一步後ろに下がる。そうしながら、真名と刹那へと救援を求めるも“やれやれ”と真名が刹那を引っ張り向こうの方に。早速見捨てられるというルームメイトの冷たさを僕は味わった。

「ネギ先生なんだけど、彼女いるの？」

「へ？」

いや、十歳に求める事じゃない気がする。待てよ、僕が知らないだけでこの世界では当たり前なのかもしれない。……ここに来てからメルディアナ魔法学校以外はあまり知らないし、あそこも特異な場所だし……。

「彼女、ですか。それはいないと思いますが……」

「何だっいたらいるの？」

うくん、アーニヤはネギに対してかなりの好意を持っていたけど、あれはどういったものか。

「仲の良い幼馴染兼喧嘩相手というか相方というか……」

「幼馴染！？それは手ごわいわね」

「でもハルナ。彼女ということでないのなら問題ないのではないですか？」

「わかってないわね、ゆえ。喧嘩相手ってことはかなり親密よ。あのネギくんが喧嘩する姿を想像できる？できないでしょ。つまり、それだけ親密なのよ」

「そ、そうですか」

少し夕映もハルナの迫力に引き気味となる。もちろん、僕は既に一歩も二歩も下がっている。

「そして幼馴染。うんうん創作意欲が湧いてくるわ、ってその前にもどかにライバルの話をしないとね」

「で、でも確定したわけではないですし」

「わかってないわね。あの引込み思案のどかなのよ。煽ってあげる材料があればいいのよ」

そういうと二人は僕のところから離れて行ってくれた。有り難い。

そう思っていたのも束の間、ネギの方を確認してみればネギがタカミチに明らかに不審な動作をしている。おそらく魔法だろう。いつものように、これは注意しなくてはと一歩踏み出そうとした時に僕を見てタカミチがそつと首を振る。……なるほど、こういうところが僕の過度な接触に当たるわけか。この場ではなく、別のところでタカミチからか他の誰かからか注意されるのだろう、僕はその事に關して沈黙を守る事にする。

「それでね、アリーちゃん。他にも聞きたい事があるのだけ
ど」

けど、その前にこのパパラッチもとい朝倉さんをどうにかしなくては
はいけない。

*

「うつつ、失敗しちゃった」

ネギはそう口にする。アリーとネギの関係は姉と弟のような関係だ
った。そのことをネギ自身も自覚していた。成績は座学・実技とも
にネギの方が上であったが、もう一人の“姉”ネカネ同様に頭が上
がらない存在なのだ。

メルディアナ魔法学校への入学当初からずっと同じクラスで、暖かく包んでくれる存在だった。ネカネには仕事があり、あまり会う時間が取れないこともあり近くの甘えられる存在としてアリーがいた。最初のうちは“兄”として良いのだろうか、と葛藤のあったネギも今ではそのような迷いも持っていない。

それは二十年以上も子供に混ざり生活してきたアリーからすれば、当たり前のことをしていただけであった。しかし、ネカネのような存在となっているアリーが近くに居続けたことはネギから過度な自立心を奪い、年齢以下の頼りなさを持つに至っていた。

メルディアナの校長はそのことを危ぶみ二人を別の修行地にするように考えたが、二人の安全を勘案し、教師と生徒という別の内容にすることにした。その事は麻帆良の学園長にも伝えられていた。しかし、麻帆良にも麻帆良側の事情があり、同じクラスに配属し、ネギの方を徐々に他のクラスにも担当させるといったこととなったのだ。

ネギが口にした“失敗”とは何だったかという点、今回の機会にアリーに頼らないようにしようとしていたのだ。一人前になるにあたり、一人で頑張らなくては、と校長が危惧していたのと同様の内容の悩みを持っていた。しかし、異国の地に来てみれば不安に思えて来、夜になれば一緒のベッドに、とこれが最後だと思いつながらお願いした。

しかし、駅についてみれば人・人・人と田舎に住んでいたネギからすれば不安の連続、アリーに手を繋いでもらい危機を乗り切った。そうして学園に着けば、今度はアスナに外で怒鳴られ、学園長室でも寮のことで怒鳴られ、教室では挨拶早々クラスのたくさんの女子

に迫られる。怖くなり教室でアリーに泣きついてしまったのだ。ネギの独り立ち計画初日は失敗だった。

そして、放課後、学園長室に呼び出され“あまりアリーを頼らないように”と学園長に注意された。それはネギ自身も思っており異存のないことだったため、“がんばります”と返していた。

「……………明日こそはがんばるぞ」

昨日同様の言葉をネギは口にする。改めて決意をし、顔を上げてみれば遠くで自分の受け持つA組の生徒が大量の本を持って大階段を下りている。一人である量は大変だろうと立ちあがり、駆けだそうとしたところで、その子が階段から落ちようとしていた。

「きゃあああー!!」

ネギは一瞬で今から走っては間に合わない事を悟り、杖を手にして魔法を唱える。辛うじて地面にぶつかる寸前でショックを失くす事に成功し、カモフラージュのため走り寄り、如何にも自分がキャッチしたという姿勢をネギは取った。

「アタタタ、大丈夫?え」と

名前を思い出そうとするも、クラスで紹介された人間の中にはいなかった。クラスではたくさんの人がネギへと質問に来てその度に名前を覚えていたが、引込み思案の彼女はネギの前には一度も現れなかったのだ。ネギもどちらかといえば授業に集中しており、質問に来た人間だけは優先的に覚えていたが、全員というのは後日を予定していた。

だから、目の前の自分がキヤツチした少女の名前を聞こうとした時、目の前に人がいる事に気付いた。顔を上げればそれはネギが密かに怖がっているアスナであり、その顔は今の魔法を目撃したという事をありありと語り、驚愕した顔をしていた。

「…………ちよつと、あんた」

「あ、えくと」

突然の事で焦り、ネギは誤魔化す言葉を紡げずにいた。しかし、ネギの返事を聞くまでも無く、助けた少女を置き去りにする形でアスナに人気のない場所へと連れ込まれていた。

「今の何よ！！まさか、超能力者とかなの！！」

「…………え？へ？…………う…………う…………うえくん！えくん！」

顔を近づけ怒鳴りつけるようなアスナに対し、焦りパニックになっていたネギは泣きだした。学園長に念を押され、頑張ろうとしていた矢先の魔法バレ。どうすればいいのか、よりも修行中止になるんだと悲しみが押し寄せてきていた。そして、目の前に怒鳴りつけて来る怖い存在がおり、ネギは泣くことしかできなかつた。

「ちよ、ちよつと。落ち着きなさいよ、ね」

アスナは行き成り泣きだされた事に驚き、ネギを落ち着かせようとする。そのとき、ガサガサ、と人が近づいてくるような音がする事にアスナは気付いた。この状況は自分が悪者になるのでは、と瞬時に導き出したアスナはネギを持ち一目散に走って逃げる。

「なんでこんなことになってるのよー」

その心算のプログラム。

第四話 五回目？

前回のあらすじ

『アリー五回目、ネギは甘えん坊のネギきゅん。その事に原作を忘れつつあるアリーは気付くはずもない。ネギはアスナに秘密にしてみらうことで失点を避けることにした』

右を見れば大きなおっぱい、左を見れば小ぶりなものも。天国・大浴場、正直ここで一日過ごしていれば他のクラスのおっぱいも見られると考えられ、想像は膨らむばかり、是非そうしたいものだ。

さて、その話はさておき、僕は臆病者。調査を欠かすわけにはいかない。ググったり、まほネットで検索を掛けたりした。クラスメイト全員を。さらにお爺様に対するストーカーもどきをしていた時に知った賞金首リストや暗殺者などの危険人物リストとかにも眼を通した。その結果、クラスメイトの委員長は財閥の長の一人娘、ハルナは同人界では有名人、超と葉加瀬は天才科学者、麻帆良四天王についてなどが出てきた。あとは、このかは父の戦友の一人娘、茶々丸はガイノイド、エヴァンジェリンは真祖の元賞金首、同部屋の真名が暗殺者。

後半については、真名と刹那に聞いたなら、いとも容易く諾の返事を貰えた。ビクビクしながら“真名って暗殺者なの？”と聞いた自分の緊張感を返してほしい。もちろん、前半についても確認の意味で訪ねることを忘れなかった。

僕にとってネギとは何か、非常に明快である。最初の頃は僕らしく

なく、おそらくアリーに引きずられ大切に想われていたからこそ、僕も大切に想い演技をし、ネギの面倒を見ようとしていたと思う。けれど、あまり接する機会もなかったため大きな意味を持たなかったはずだ。

しかし、既に五回目出会い別れることを繰り返していくうちにアリーに引きずられにくくなったのか、それとも同じネギだと認識しなくなったのかドライな関係になっている。ネギが僕をネカネに對するよう慕って来てくれているのも解っているが、尋ねられれば答え、頼られれば手助けする。僕の手の届く範囲でのことしか僕はしない。僕にとつてネギは一人ではなく、次のループへ行けばまた現れるキャラクターと化しつつあるのだ。未だ完全にその域には達していないものの近い感覚を得ているのは事実だった。

既に、歓迎会の際にアスナにネギが魔法バレしていることは気付いていたが、それは魔法関係者からすれば明らかなことであり、タカミチが黙っていた以上僕が注意すべき事ではない。いや、おそらく僕は学園長からの注意が無くともネギに必要以上に接するのを止めていたはずだ。たとえ慕ってくれているとしても、死亡フラグ満載の主人公に近づけるほど僕に余裕などないのだから。

さて、最近の中学生や高校生は下着姿に突然なる、そんな趣味を持っているらしく、愉快な日々を送らせてもらっている。休み時間でアスナがやつたり、屋上でドッジボールの相手があつたり、と。

僕の見るところではネギは成長していないようにみえる。アーニヤや僕、ネカネの立場にアスナ、このか、タカミチと人が代わつただけで変化しているように見えない。ただ、僕とつになく距離を取っている事だけは確実だった。それは僕にとつて死亡フラグから遠ざかる、そんな希望を持たせてくれる有り難い行動だった。

*

ネギは落ち込んでいた。麻帆良学園に来てから一カ月余りの時間を経過していた。その中で何度となく失敗をしていたのだ。まず、一番大きな失敗はアスナに魔法がバレたことだった。これは、のどかを助けるためには止むを得ない行為であったため、そのこと自体にネギは後悔していない。しかし、今になって思えば黙っていてもらうという選択肢は良くなかったのではないかとネギは考えていた。

ネギは子供であり、その時は怖がっていたアスナに見つかり、怒鳴りつけられるように尋ねられたため慄き、そして焦っていた。冷静な判断を取れなくなかったネギは泣きながら色々口走っていたらしく、気付いた時には別の場所でアスナに抱きしめられ、あやされていた。そして、ネギに対しアスナは沈黙を約束してくれたのだった。

同時にネギはアスナに対して新たな感情を持つようになっていた。修行を中断され、目指している“立派な魔法使い”になれなくなる、そんな恐怖からアスナに救われたのだ。そして、それはアスナに抱きしめられ、その顔を間近で見たことでどこか二人の“姉”ネカネとアリーを重ねたのだろう、慕う気持ちを持っていた。

それは吊り橋効果と呼ばれるものかもしれない、ネギはアスナに頼るようになって行った。良いところを見せようと、どこか魔法に懐疑的なアスナに対し歓迎会にて“読心術”を披露した。

しかし、ネギには葛藤があった。正直にこのことを話し、学園長に修行の中止を告げられる、それが正しい魔法使いのあり方ではないか、と。アスナにその事を相談しても、“私が気にしてないんだからいいのよ”とネギにとって良い回答をくれていた。けれど、その後ろめたさからアリーに助言を求めにくくなり、凶らずもアリーからの独り立ちが成功しつつあった。

昨日、期末試験を終え、学園長室に呼び出され、この一カ月余りの期間の事を尋ねられた。“麻帆良に来てどうじゃ?”、簡単でどうとでも取れる学園長からの問いに対し直ぐに葛藤を覚えた。アスナの事を話すかどうか。しかし、その葛藤とは裏腹に、いやだからこそ、ネギの口は良く回り、それに較べれば小さな失敗であるドッジボールでの件を口にし、その他は当たり障りのない事だけを話した。

話し終え、さらに“他にないかのう?”と尋ねられ、アスナの事を言おうとしたが、ネギの口はただ“ありません”とだけ答えていた。そして、退室を促されどこかホツとする自分がいる事にネギ自身嫌悪感を持っていた。

学園側のネギに対する評価はこの事で大幅に減点されることとなった。偶然の出来事であり、魔法の使用がなければネギには助ける事が出来なかったのだ。その事は監視役だった瀬流彦からの報告があった。尤も、瀬流彦自身はネギよりさらに遠方におり、ネギが魔法を使用したことでのどのかに状態に気付き、その距離からでは魔法を使ってもどかを救う事はできなかった。ただし、落下から、という意味で、その後に治癒魔法を使用するという方法はある。

学園はのどかに関しての魔法の使用は止むを得なく、全く問題ないと結論に至っていた。そして、その事を見られていたのも問題視されなかった。人命に拘ることで周囲まで気にしろという事はあまりに酷なのだ。むしろその後の対応が問題だった。そして、その後の様子からアスナは沈黙を守っておりマイナス評価ではなかった。

しかし、いくら待とうと報告が来る事はなかった。その為、最後のチャンスと学園長室に呼び出したのだ。報告しなかった、それも魔法バレという大事を、である。その事は大きなマイナスであったが、ネギのこれまでの行動を勘案すれば、四月から正式な教師という形で他のクラスにも顔を出すようになるということに変わりはない。た。

そこで問題になったのはネギにこのことを注意するかどうかだった。少なくとも報告義務がある事をネギは知っているはずであり、それは表情などからも窺えた。自ら申告すれば遅延という処理で減点を小さくでき、学園長はそうしてくれる事を願い、一カ月さらにネギからの報告を待つ事にしたのだ。ただし、ネギは魔法バレ 修行中止という認識であることを学園側は知らなかった。

数日後、四月から形式上正式な教師として、他のクラスの英語科目も任せられると知らされ、ややネギは陰鬱な思いを持った。嘘などお見通しで、ネギ自身罰せられることをどこかで望んでいたのかもしれない。

学園からの四月からの修行方針というものが僕にやってきた。要約すると魔力を扱えるように訓練を怠るなということだった。学園長は僕に“甘え”を覚えさせるなんて言っていたけど、そんなわけがない。卒業に関しては問題ない程度であったものの、芳しいとは決して言えない実技に関して補わせるのは当然の行為だ。

おそらく、学園側が僕に求める修行の成果は魔法を使わずに一般人の中で違和感なく生活できる事を示すこと。それプラスさらに隠匿し魔法の使用が出来るか、であろう。旧世界における魔法使いの育成は主に三段階。

メルディアナ魔法学校のような魔法関係者しかない学校での技術習得を十五歳までに終わらし、次に一、二年一般人と混ざり常識を学ばされ、その後麻帆良のような高等魔法学校とも言つべきところで学ばされる。

第二段階に関しては、僕のような“立派な魔法使い”を目指していないものにはあまり関係がなく、例えば僕の場合、その間を魔法世界で過ごすという選択肢もあり得たはずだ。その一例として僕はアリアドネーを考えていたわけだが。僕やネギの場合、安全という事を勘案し第二段階から麻帆良に居る訳だ。

僕に与えられた課題は半分第三段階のモノともいえるが、第二段階に関しては必要ないという判断なのだろう。これでも元は一般人、

平均的な魔法関係者より常識は持ち合わせているつもりだ。ネギの場合、常識の他に第一段階の補完ともいえる精神的なものを鍛えるというのが含まれているのだろう。

さて、そこで問題なのは折角の春休み。二週間ばかりしかなく、ネギと異なり唯の生徒でしかない僕には羽を伸ばすチャンスと出かけるばかりだった。そのため、用事があるという刹那は断られたが、昨日も真名と外出していた。暗殺者だという真名か神鳴流の使い手である刹那がいれば安全だろうと臆病な僕は考え、どちらかと居るようにしているくらいの警戒心は未だ四月にも拘らず一応持つてはいた。

にも拘らず、今日は朝から学園長に呼び出されお小言を食らったかと思えば一人先輩を紹介され訓練場へと連れて行かれた。四月に入つて直ぐ、後半分ほど春休みを残しているのに、だ。

「ですから、学園長も仰いました通り、貴女はネギ先生に較べ、魔力の制御が巧くいつていないのでしょう。でしたら教師であるネギ先生と異なり唯の生徒に過ぎない貴女は時間もあるのですから、この春休みを利用し訓練しようとするべきでしょう。にもかかわらず貴女はこの一週間余りただ遊び呆けていたなどと

正座して説教を食らうなんて少なくとも記憶にはない体験だ。アリアになつてからは正座をすることなどなかったし、その前もあつたかどうか危うい。高音・D・グッドマン、高二になつたばかりの彼女は中々見どころある少女である。もちろん身体的な意味で。メルディアナ魔法学校では卒業生が六人しかいなかったことからわかるように、絶対数として生徒が少ない。そして、脳筋の同級生や悪戯好きな後輩はいたが、うちのクラスの委員長・雪広あやかと被るような委員長体質と出会う事はなかった。

その委員長とて今はどちらかというとなぎに構うシヨタコンとしてのキャラ立ちで僕にかまってくる事はほとんどない。その意味で、巧く行けばマンツーマンでの訓練相手となりそんな高音は貴重な委員長要員。流石、物語の中心地。攻略キャラがあちこちにいる。

「 ちょっと、聞いていますの!？」

「 は、はい」

「 でしたら、わたくしが今言った事を繰り返して下さい」

「 え、……え」と

「 ……はあ。もう良いですわ。とりあえず、魔法を見せてください」

高音に呆れられ、魔法を見せるように言われた僕は立ちあがる。その時、正座していたため足が痺れ、立とうとして前に倒れこむ事は良くあること。そして、たまたま、倒れた先に高音の胸がありその感触を楽しむ事も止むを得ないことといえる。なかなか良い、久しぶりの感触だ。

この一カ月半余り、同室に住んでいる真名と刹那相手ではできなかった奇襲攻撃の成功だった。“常在戦場”といわんばかりに、部屋のシャワーに後から一緒に入ろうと扉を開けた瞬間に銃を突きつけられ、“間違えて”布団に入ろうとすると剣を向けられた。すぐに謝られ、別に僕を警戒しての事ではないとの由を告げられるも、暗殺者と剣士に再度トライするほど僕は命知らずではないのだ。

「 は、早く離れなさい!！」

押し倒される形となった顔を赤らめ高音はそう声を上げ、僕は漸く気付いたと謝罪し横へと身体を動かす。立ちあがろうとするも足が

痺れていたためだ。しかし、メルディアナ魔法学校に居なかった夕イプの上に、年齢も十五歳までと教師しかいなかったことから、高校生というのは初めてである。攻略法を考えなくてはいけない。

*

停電の夜を迎えるに当たり、エヴァは葛藤していた。如何にすべきか、と。一週間前に文字通り、悪魔の囁きを受けた彼女の葛藤は如何ほどのものか、計り知れない。

そもそも、真祖たるエヴァにとって“登校地獄の呪い”を掛け、自身をこの麻帆良に閉じ込めたネギとアリーの父・ナギは特別な存在だった。恋慕の情を抱いた相手だった。そして、それも“初恋”の相手だったのだ。

十歳で真祖となったエヴァはそれまで恋をした事がなかった。そして、それからの生活は泥を躓り、血反吐を吐き生きていた。いきなり最下層へと落とされたエヴァに恋をする余裕などなかったのだ。そして、多少なりとも力を付けてからは教会の魔女狩り始め、様々な魔法使いに理由も解らぬまま追われることとなった。

強大な力を身につけてからもそれは同じであり、エヴァの傍にはチ

ヤチャゼロしかいなかった。そんな中、初めて真なる意味で対等といえる相手となったのがナギであり、その仲間である紅き翼だった。そのナギに対し恋に落ちることは時間を要する必要はなかった。

そのナギに裏切られ、十五年もの間、麻帆良に閉じ込められていてもエヴァにとつて対等といえる相手は彼ら以外に現れる事はなかった。元同級生、今は担任であるタカミチもそれは同様で、どこかエヴァに対し畏怖の念をもっている。学園長とはある意味では対等と呼べるがあくまで取引相手に過ぎなかった。そして、他の魔法関係者は畏怖を通り過ぎ恐怖の眼や侮蔑の眼で自分を見ている事をエヴァは知っていた。

だからこそ、ナギ達と過ごした半年にも満たない期間が甘美な時間に思えてしまう。だからこそ、エヴァはここを抜けだす術を欲していた。だからこそ、たとえナギが既に死んでいると聞かされてもエヴァは低い生存の可能性に賭けたかったのだ。一度知ってしまったエヴァには、もう孤独に耐える自信はないのだ。

ナギの息子と娘が麻帆良に来る、その事を知りエヴァは一つの手段を思い出した。嘗て、呪いを掛けられ相手を殺すも解呪されず、様々な手段を試す中、その方法により解呪された事を。すなわち、ナギの子の血を吸うことだった。

しかし、現れてみれば二人とも未熟者。より濃い血を受け継いでいるであろうネギに至っては子供も子供。何度となく、泣く姿を目撃していた。こんな子供から血を吸えるか、と様子見という名の元、一カ月が過ぎさらに、とエヴァは決断を先送りになっていた。

そんな中、四月に入り、悪魔に出会った。小太りの白いスーツを着たその男の言葉はエヴァにとつて悪魔の囁きだった。取引相手とし

て信用していた学園長の裏切り、魔力を抑えているものがナギによるものでない事を聞かされたのだ。そして、その事の裏を取ることができた。

取引、すなわち契約を重んじる“誇りある悪”を自任するエヴァからすれば到底看過することのできない裏切りだった。そして、辛うじて学園に留まろうと迷いを持っていた心の天秤に、最後の重りを乗せることとなったのだ。

*

停電という事もあり月明かりが感じられる夜、僕は一人で部屋に居た。真名と刹那は警備へと向かった。停電の日だからといって侵入者や魔物が来ることはあまり今までも無かったらしいのだけど、今回はかなりの規模で事前に情報を入手出来ていたため、外縁部に増員されているらしい。

僕は未だ使えないと判断されており、その判断は実に正しい。彼女たちを見送り、停電の夜を優雅に過ごしていた。寮生活が長く、同部屋に大抵の場合、誰かがいたため一人で寝るのは久しぶりだといえた。

停電が始まり、一人やる事がない僕は早めに寝ようと、布団に入っていた。考える事は高音の事。あれから何度も会い、訓練を共にしていた。最初を除き彼女の従者の佐倉愛衣との三人でのことだが、僕の見るところ高音を攻略すればセツトで愛衣も付いてくる、お得な物件。ぜひともゲットしたいと妄想を膨らませていた。

その時、眼の端に影が映る。何だ、と身体を起こそうとした瞬間、口を手で覆われそのまま身体をベッドへと押し付けられる。まさか、と思いつつもまだ四月、悪魔が来るには早すぎると考える。

「よお、アリー・スプリングフィールド。初めまして、そしてさよならだな」

「……………」

あの悪魔だった。僕は声を発しようとするも言葉にならない。身体を動かし抵抗しようとするも金縛りを受けたかのように動けない。

「ここは結構警備が厳重だったからよお、苦労したぜ。バカどもを踊らせたお陰で、面倒な奴らに会わずに済んだがよ」

悪魔はその言葉を述べると、僕を抑えている腕とは逆の右腕を上げ、振り下ろした。

第五話 十回目

前回のあらすじ

『麻帆良に行ったけど、寧ろいつもより早く死んだ』

さて既にアリー十回目を迎えた僕は、今回今までは一味違っぜ。何といつても三歳の段階でチート魔法具通称“別荘”をゲットした。いくつか呼び名はあるけど、別荘がしっくりくる、ジャングルを模した中にある建屋を外観からも見る事が出来、僕は得意絶頂だったといつていい。

実は五、六回目は麻帆良にいったものの、結果は同様、何故か悪魔がやって来てどちらとも四月中旬には一人になったところを殺された。六回目には油断なく、一人になることはほとんどなかったつもりだったが、それでも四六時中一緒ということはなかった。その隙を縫って殺されたことを考えると麻帆良にはかなり前から潜んでいる事になる。

悪魔自身もしくはスパイが麻帆良にはいる。そして、もう一つの問題、何故僕が狙われるのかがよくわからない。僕より先にネギが死んだ事がない、ということは注目すべき事なのかもしれない。

で、僕なりに考えたのだけど、もしかして僕はネギ以上に狙われる理由が有るのだろうか、と。英雄・ナギにそっくりなネギと異なり僕は“災厄の魔女”アリカにそっくり。犯罪者が母親だという事は覚えていたけど、何となくまほネットで検索してみれば出てきたその顔。血縁じゃないとは到底思えなかった。

六回目はその事を検索済みだったため、悪魔にカマを掛けてみれば、

どうやら元老院が関係してくるらしい。冥土の土産に教えてくれたから、本当だとは思っただけ……。その事を知った僕は荒れた。国家機関、それも魔法世界の二大国のうちの片方に狙われるってどういう事なのよって。そういうわけで荒れて色々やらかしたけど、八回目の結果はメルディアナ魔法学校でいつも通り悪魔に殺された。

今回一味違う理由は前回の九回目にある。八歳の頃たまたま寄った一般人の雑貨屋で魔力の籠った中にミニチュアが詰められた瓶を発見し、安かったから購入した。珍しいものなのだろうと、家に持ち帰ればお爺様が驚きの声を上げて、これは別荘だと言い出し、使い方を教えてくれた。外の一時間を中では一日にしてチート魔法具過ぎる。

残念ながら前回はお爺様の管理の元、殆ど利用する事は出来なかったけど、その雑貨屋からいつ入荷したか聞いていた僕は今回、退院直後に走りゲットしたのだった。これで僕もチートの仲間入りだぜ、ヒヤッハー！！

さて、僕は今回初めて一人部屋というものをお爺様に強請り、寮で一人暮らす事になった。ほとんどの場合、二人もしくは三人部屋なのだがそこは校長の強権、僕の我儘を聞きあまりない一人部屋というものを提供してくれた。そこに別荘を設置、僕は学校もそこそこに只管籠る事にした。

僕は現在、特異な魔法使いだ。何だかんだいっても十回目、真面目に通っていない時を差し引いても二十年以上も通っている知識チート。問題は肉体的な問題で魔力を制御出来ていなかったため、危険な魔法の習得などは行ってこなかった。しかし、図書館の魔法書始め理論的ないわば座学の分野においてはチート甚だしい。

つまり、今回肉体を別荘の時間で成長させることで、成熟した身体を手に入れ、魔力制御も完璧という事になるのだ。チート魔力の活躍を漸く見せることが出来る、その日が僕にもやってきたのだ。

*

学校が終わればすぐ部屋に籠り、必要最低限しか学校に行かない僕は、その成績からネギ同様真面目に通えば二段階飛び級可能といわれるも、最初の飛び級はしたもののそれ以降の二度目の飛び級をすする事はなかった。

既に身体も出来上がり、けれども年齢詐称薬と幻術でほとんどの人間を騙し、僕は学生を続けていた。騙せなかったのは一人お爺様だけだ。一度そのことで、僕はお爺様の私室へと一人呼び出された。

「アリー、どうして幻術など使こうておるのじゃ？それに部屋を見させてもろうた。あれは別荘じゃな。何故そのようなものを……」

「…… “厄災の魔女” アリカ・アナルキア・エンテオフュシア」
お爺様の声を遮った僕のその言葉にお爺様の顔は歪む。アリカの顔はあまり広くは知られていない。しかし、調べれば見つける事は可能なのだ。

「彼女が僕の母親なのでしょう？」

「……………違う」

その言葉は力なく、誰が聞いても真実を述べているようには思えな

い、そんな弱々しい声だった。

「お爺様、彼女を快く思っていない人々は沢山います。それに父も英雄と呼ばれています。逆にいえばそれだけ多くの人を殺したという事なのでしょう。二年前の村でのこと、どちらかに対する恨みからのものではないのですか？」

「……………」
「村の人たちは巻き添えになったのではないのですか？」

「……………」

俯き一言も発しようとしなないお爺様を前に僕は言葉を続ける。

「僕は身を守る術を身につけねばなりません。僕の身体は残念ながら僕の巨大な魔力に耐えられないのです。先生は仰いました、最低でも二十を過ぎなければ制御できまい、と。だからこそ、急ぎ僕はその年齢に身体を引き上げねばならないのです」

「……………」しかし、アリー。ワシらが守ってみせる。じゃから……………」

「お爺様。村は守られませんでしたわ」

僕はお爺様の言葉を切って捨てた。辛うじて出された声を、だ。明確な決別、お爺様を信用していないと僕は言ったのだ。お爺様は辛い表情のまま沈黙し、僕は部屋を出た。その後、お爺様は二度とこの話題に触れる事はなく、僕との関係も冷え込む一方となった。

*

五月、運命のその日、僕は独り小屋に籠っていた。お爺様から声が掛り、刺客を差し向けられた可能性が高い事を知らされたのだ。校

かる。

僕は拳に全魔力を込め、動けない悪魔の胸へと突き刺す。グチャリと気持ちの悪い、かつては自分の腹を刺された時に聞いた音。

「グア……」

悪魔はその言葉を最期に砂へと還っていった。腕で肉を貫いた感触、その感触は僕には気持ち悪く、嗚咽をこぼした。けれども、いつまでもそうしているわけにはいかない。僕はお爺様の頭を拾おうと、小屋の奥へと進む。そして、お爺様の頭の前で立ち尽くしたものの、お爺様の死を僕は未だ実感していなかった。どこか人形めいたその頭を拾おうとしゃがんだその時、僕の頭の上を何かが横切った。

危険を感じた僕は、振り返る。そして、そこに居た先ほど殺したはずの悪魔を眼にし、僕は尻を着き、後ずさる。もう僕には魔力がほとんど残っていないのだ。

「良くもやってくれたな。流石に今のは堪えたぜえ」

「……………あ……」

舌なめずりをし、僕を見下すその男に対し、腰を抜かしたように僕の身体はいう事を聞かない。

「安心しな。ちゃんと依頼通り最後には殺してやつからよ」

悪魔はそう言うのと既に抵抗できない僕の目の前に立ち、腕を振り上げ、僕に向かって降ろした。僕はその瞬間眼を瞑り、殺されるのを待ったが、一向に衝撃が来ない。眼を開けて見れば目の前に転がさされている自分の右腕を見て、僕の肩から先がない事に気付く。

「あゝあゝ ああああああああああああああああああ……！！」

腕を肩から切り落とされた事に気付いた僕に激しい痛みが襲い、叫び声を上げた。

「いいね。やっぱこういう声を聞かないと」

加虐的な笑みを浮かべ、舌なめずりを行う悪魔に僕は声を上げつつも、助けが来ない事を知っていた。

「助けて……助けて」

左腕で悪魔に縋り僕は涙ながらに命乞いをする。いや、どちらかといえは痛みから逃れるために、一思いに殺されることを願っていたのかもしれない。けれど、僕が口に出したのはその言葉だった。

「は、笑わせんなよ。次は足がいいか、それとも左腕か？」

悪魔は僕を蹴り飛ばし、仰向けに倒れ動けない僕へとそう問いかけた。きた。

*

僕はお爺様の遺言状を受け取り、父の戦友ジャック・ラカンに初めて会った。ラカンはお爺様に呼ばれたらしく、来るのが遅くなった事を詫びてきた。僕は首を振り意味のない事だと口にした。

お爺様は僕を詰問した後、ラカンを搜索し最近漸く連絡を取る事が出来たらしい。今回の襲撃を知り、ラカンに連絡し助けに来てくれるように頼んだものの、魔法世界とこちらではゲートが毎日開いているわけではなく、連絡も遅れ駆けつけるのが遅くなったのだ。

ラカンが悪魔を倒し、僕を助けてくれた。その時僕は両腕が無く、気を失って、殺されかけていたそうだ。右腕だけは治癒魔法使用により治され、現在は治療できなかった左腕はない状態だ。お爺様の命がけの足止め。そのお陰で僕は間一髪命拾いしたのだ。

ネギには未だ知らせておらず、僕はネカネとアーニヤに二人でネギの元に行き、落ち着くまで様子を見て来てくれるように依頼した。僕は、という彼女たちを送り出してからお酒に逃げる日々を送っていた。護衛として残っているのだろうラカンにも呆れられる始末だった。

僕は人の死についてわかっていなかったのだ。今まで、何度かお爺様や教師陣が僕を守るように死ぬ事はあった。けれども、直後に僕も死に新たなループへと渡っていた。そのため、僕は彼らの死をゲームのキャラクターが死んだように、漫画のキャラが死んだように現実として受け入れていなかった。

けれども、今回は違った。ネカネが悲しみに耐えながらも涙を流し、アーニヤは泣き叫び棺から離れようとしなかった。お爺様は多くの人たちに慕われており、学校の教職員始め多くの関係者が涙していた。また、この一週間ほどの間にも数えきれない人間が、弔問に訪れてきた。彼らは口を揃えお爺様の素晴らしさ偉大さを述べ、そして各々の悲しさを語って行った。

お爺様が死んだのは僕の責任だ。僕は襲われるのをずっと以前から

知っていたのだ。お爺様の性格も熟知していたのだ。なら、いくら言おうと、頷こうと、僕と疎遠になっていようと一人でも悪魔に立ち向かう事はわかっていたはずなのだ。

力を付けたと僕は奢っていたのだ。魔力を漸く制御できまともに戦闘を行える。魔力さえ制御できれば負ける事はない。そう思っていたのだ。そうでなければ誰かに協力を求め、訓練し、共同で悪魔に当たるべきだったのだ。実戦を知らないにも拘らず、僕は自分が勝てるかもなどと思っていたのだ。

*

一カ月が経ち、僕は今日もまたお酒を買いに学校近くの酒屋に出かけた。最初の頃はラカンがついてきていたが、今では僕の傍に居る事はない。その帰り道、僕は買った酒を飲みながら一人夜道を歩いていた。

寮と酒屋の間の道、それも夜に人通りなどない。僕は気軽に飲みながら鼻歌を歌いながら歩いていた。その時、向こうから少年が歩いてきた。一際目立つ白髪の少年。顔は整っており美少年だった。

あまり男子を記憶していなかったものの、美少年であれば眼には付くはずであり、記憶にないという事は弔問客の一人だろうか、と僕は当たりをつけた。いや、良く考えればあの悪魔から逃れた事のない以上、今回が一番長生きしているのだ。編入生かもしれない。

僕は彼とすれ違い、その直後身体がふらつく事に気付く。酒が回ったのかな、と僕は壁に寄り掛かろうとするが、そのまま足の力が抜

第六話　??回目?

「さて、と」

いつもの白い病室、上質のベッドで眼が覚めた僕は今回の指針を決める。五十回も過ぎれば、既に遊びと化しているこの人生。たまには、毎度苦勞を掛けるネギを労わるのも悪くない、か。

「アリー、目覚めたのか!？」

「はい、お爺様。あれから村の皆はどうなったのですか？」

「……ネギたちは無事じゃ」

僕が起きてきた事での喜びも表情は一転、曇ってしまう。まあ、苦しい答えだけど、仕方ないよね。子供にネギとネカネ以外石にされたなんて言えないだろうし。一応、まだ事件が終わりこちらに移動してから一日と経っていないはず。だから、石化解除の希望も残されてはいるものの、どうなるかわからないのだ。

*

退院二日後、一人僕はお金を握りしめ、お爺様の家から電車を乗り継ぎ雑貨屋に向かう。初めて見つけた時は驚愕したものだが、それからは何度となく利用させてもらっている裏路地のあまり人が、特に魔法使いが利用しない雑貨屋だ。

お爺様のお金の置き場所を熟知している僕は今朝そこから大量にお金をパクリ、ここに来ている。入荷されるのが、一月前で店頭に並

ぶのが今日だったはず。急いで行かなくては何かの間違いで誰かに見つかってしまったは大変なのだ。現に何度かこの数日間で購入されたこともあるし、五年後まで残っていたこともある。ループも僕次第で変わる部分もあればそれ以外の運で変わるものもたくさんあるのだ。

雑貨屋に入ってみればそこはいつもの汚い空間だ。外の路地も汚かったが、ここは店内なのだから、もっと清潔感を保つべきなのだ、だから客が来ない。そのお陰で、僕はこれを見つけない事が出来たのだから感謝すべき事であるが。

その中で一際目立つ、まだ他の商品と異なり埃を被っていない大きな瓶。透明なその中には精巧なミニチュアのような家が入っている。そう、エヴァンジェリンの別荘と同様のものだ。僕はそれをジツと見つめ、ほしそうな顔をする。

「……お嬢ちゃん、これがほしいのかい？でもこれはとっても高いんだよ」

「お幾らなんですか？」

この時、僕から声を掛けるときに比べ、店主から声を掛けさせた方がだいぶ安くつく。それでも大金には違いないのだが……。これはどこかの魔法使いが造り、それが流れたものなのだろう。いつの間にか、“別荘”だという事を知らない一般人の手に渡り、こうして一般人向けのただの精巧なミニチュアの飾りとして売られているのだ。

*

次にすべき事は電話だ。家に帰り僕は独り電話を掛けまくる。食料や調味料など大量にこのお爺様の家へと配送を頼むのだ。お爺様たちとネギ・ネカネ・アーニヤがいなくなる三日後の昼を指定して。

そして、皆がいない家で荷物を受け取り、お金を払う。そして、総ての荷物を“別荘”へと詰める。ここまでの作業には一つも魔力を使用する必要はない。荷物の方へ“別荘”を近づけ、言葉を発するだけでよい。毎回リセットされるため身体的欠陥は残ったままであるし、魔力を制御できないのだ。

次に行動を行うのは更に一週間後。それを逃すとお爺様のお金を使った事がバレ、面倒な事になるのだ。だから、それまで、“別荘”を隠し、殆どの時間を早朝から夜遅くまで外で過ごす。これはネカネたちが心配させないための配慮だ。

さて、一週間が経ち、早朝、それもかなり早い時間に外へ出る。これから行う事には時間を要し夜遅くなるため、搜索を出されることになる、今後の動きに関してネカネが怪しむのだ。そのため、ある程度僕が帰ってくるのが遅い事にこの数日で慣れてもらっている。用意しておいた箒に跨り僕は“別荘”を持ち、空を駆ける。魔力さえ込めれば良いように箒側に術式を書き込み、また同時に速度に耐えられるように防壁も展開させることはいくら魔力を込めても問題ないのだ。ただ、凄く速さが出ていることは周囲の景色でわかる。今回は魔力の出が良かったらしく数時間で目的地へと着いた。

ウェールズから海を渡りアイルランド、その中にある大きな森の中心地だ。その大樹は嘗て魔女狩りを逃れた魔法使いの家だったのだ。ヨーロッパにはこういった魔法使いの家が手つかずのまま残されて

いる。迫害から逃れるために嚴重に隠されていたため今の魔法使いでも見つけにくいのだ。魔女狩りは魔法使いによる魔法使い狩りでもあったため、対魔法使いの隠蔽工作も行われている。

ここはその一つであり、造った魔法使いは既に数百年前に世を儂んで内部で自殺している。白骨化した死体と日記があるのだ。僕から言えば死ぬる、終わりが来るというのは羨ましいことだが。

仕掛けを動かし中に入り、扉を開ける。ここに来る利点は主に三つ。まず、この場所は見つからないということだ。最低でも一年程度はここに籠るため、見つからないことが大事なのである。そして、次に魔法人形の存在だ。彼の魔法使いはどうやらそちらの研究が盛んだったようで、今では眼にかかれぬような高レベルの魔法人形が死蔵されている。そして、最後に僕が飛んで来られる距離だということだ。

今回は早く飛べたため、多少時間の余裕があるため、落ち着いて事を進める。まず、魔法人形を、特にその最高の出来である彼の魔法使いの名付けるところの分身人形を“別荘”へと入れる。そして、死蔵されていた魔法具も大量に入れ、僕も入る。

中ではエヴァンジェリンのと同様に外での一時間が中での二十四時間と為っている。さて、最初にすべき事は休むことだ。数時間飛ばせば体力の限界であったし、魔力も今回大量に使っている。だからこそ、休まなくては何もできないのだ。

次に魔力が回復したところで、分身人形を起動させる。僕の情報

血を注ぎ僕の分身と為る。陰陽術でも似たようなものがあるが、こちらはその上位のもの。しかし、魔法も陰陽術もこういったモノに関しては昔のモノの方が優れており、今魔法側で陰陽術の

ような簡易な人形は作られていない。

今回は幸運続きといえる。分身人形に込めた魔力を残しても未だ送り返す分の魔力は残っていたのだ。もう一回休むことも考えていたため有り難く、夕方にはこの僕の分身を家に返すことはできそうだ。外に出れば早速、箒に分身が乗り、僕が箒へと魔力を込める。一度目は少なすぎ、複数回込め続けることで、あちらに帰る分を込める事が出来たため、分身を見送る。後は彼女が巧くやつてくれるだろうと、僕は彼の魔法使いの品を全て別荘に入れ、籠り始める。

*

お爺様は優秀な魔法使いである。ただ、専門分野が戦闘ではなく強さという一点のみを上げれば弱い魔法使いといえる。けれども、例えばそう僕の分身人形を見破った事があるのはお爺様一人なのだ。もっともそれはメルディアナ魔法学校周辺での事。麻帆良やアリアドネーに行けば他にもいるかもしれない。

僕の人形はまず、お爺様と二人きりの時間を作ろうとする。そして、お爺様もそれに協力するはずだ。お爺様は一目で僕が人形に代わっていることに気付くだろうけれど、ネギたちに危害が及ばないようにと二人きりになるのだ。

そして、僕は“実は村での際、お母様の元部下に救われた。その時、お礼が言えなくてここ数日探していたが今日やっと見つけた。僕はその人の強さに魅せられた。だから、強くなるためにその人についていく”と嘘を吐く。

お爺様は真偽定かでないその言葉に迷う。まず實力は僕の人形を見れば一目瞭然であるが、事実だったとしてもその品性は戴けず、子供である僕を言いくるめ返すなり少なくとも一度会いに来ると一言言わせるべきだと感じるはずだ。

つまり、誘拐だとし、大々的に搜索はする。一方で、その僕の人形はそのまま使用するのだ。大切なネギたちのために僕がいると嘘を吐くために。その人形に定期的に必要な魔力はお爺様が注ぐ。だから、僕はお爺様が僕を信じない方が悪いのだとばかりにあちらのことは気にせず修行に専念する。

*

そして、時を忘れ修行に打ち込んだ。つい楽しくなってレベルを上げ過ぎた感じだ。外の時間で三年余りが過ぎていた。師匠の一人といえるアルビレオ・イマ同様に少なくとも外見年齢は固定されている。彼の“災厄の魔女”母・アリカに瓜二つのままに。

僕はお爺様に会いに行く。ローブと幻術で顔を隠し。その為、今はメルディアナ魔法学校に来ていた。面会の約束が無くとも“アリー・スプリングフィールドについて話がある”と言えば直ぐに通すのは相変わらずの証拠だとにやけてしまう。

校長室に通されれば、そこにはお爺様とドネットの二人。いや、隣室に一人、か。ドネットは口が堅いを知っているが、隣室のものは解らない。

「ふむ、それでアリーに関しての話とはなんじゃな？」

「その前に隣室の者をお下げ願いたいのです」

「いや、先約があつてのう。それで無理を言つて待つてもらつているのじゃ。大丈夫じゃよ、高畑くんは聞き耳をたてたりせん」

今、最強と噂されるタカミチだということに僕に対してプレッシャーを掛けると言つたところか。そういうえば、その気配は彼の者だつた。懐かしいものだ。

「そうですか、彼の人なら問題ありませんよ。どうぞ、御一緒してください」

「そうかのう。高畑くん」

「……」

明らかに警戒しながら部屋へと入ってくる。気配を消す事に関してそれほど巧くないが、察知されるということは一定以上の実力者という風に見ているのだらう、緊張感がタカミチの顔に出ている。いや、警戒しているというポーズを見せるために態と、か。

「さて、名前も聞いておらんじゃが教えてもらわんな。それにそろそろ幻術を解いてもらえんかのう。話し合ひは顔を突き合わせての方が良いじやらう」

「そうですね。……お久しぶりです」

そういつた僕は幻術を解き、ゆっくりとフードを外す。

「ア……リカ……女王」

直ぐにタカミチとお爺様は驚愕の声をあげ、一步後れドネットはその名を聞き驚愕する。現物にあつた事のある二人と異なり、ドネット

トは会った事がないのだろう、気付くのが遅れたのだ。

「ふむ。久しぶりじゃな。主ら」

この姿で入るところという驚愕の顔が見れて楽しいのだ。色々と便利という事もあるのだが。もう少し楽しむために口調を真似るが合っているのかわからない。映像で少し見た事があるだけなのだから。

「お久しぶりです、女王陛下」

「ふむ、苦勞を掛けているようじゃな」

「もったいなきお言葉です」

タカミチは僕に膝を付き、礼を取る。タカミチにはバレなかったが。しかし、お爺様にはバレたようだ。その表情が物語っている。今後の参考のために、どの部分ではれたのか聞かなくてはいけない。

お爺様の前に立ち、僕はそれまでの尊大な態度を改めた。

「お爺様、どうしてお分かりになったのですか？今後の参考のためにお聴きしておきたいのですが」

「ふむ。幻術を使っていない事が解った時にはワシも本物じゃと思つたがの。顔も身体も微細な違いはあれど、時が経つておるのじゃ。あまり関係はない。問題はアリーの態度には尊大さがあつたが、アリ様のような気品さはなかったことじゃな」

「なるほど、気品ですか。残念ながら礼節は習っていませんので」「じゃろうな。しかし、良く帰ってきたの」

お爺様はそういって感極まったのか涙を流す。一方、タカミチとドネットは話についていけず、困惑の表情を浮かべていた。

「高畑さん、マクギネスさん。先ほどは申し訳ありませんでした。皆さんの驚く顔に楽しくなってしまうって、ついやってしまいました。僕はアリー・スプリングフィールドと申します」

「えっ？アリーくんには先日」

「いや、高畑くん。あれは人形なんじゃ」

そう言いながら立ち上がり僕の元へと駆け寄り僕を涙ながらに抱きしめた。

*

「少々歪な空間での修行だったため、今まで外に出なかつたのです。それと」

でつち上げた事情説明を僕は行った。師はウエスペルタイア王国に仕え、母のクーデターにも参加した王国有数の魔法使いコリン。しかし、オスティア崩壊時に行方不明となり死亡となっていた。本当は死の淵に立つも何とか生き残り、まともに動けるようになった頃には、母の処刑。希望を失った彼は放浪の旅に出る。そんな中、村の襲撃で僕を救い、その後、時間を延ばす空間 別荘 に入り修行を見てもらっていたが、最近病死した。

もちろん、この長いループの中でコリンにあった事はないが、彼が王国有数の魔法使いであった事は事実であり、オスティア崩壊時に死んだのだらう。何度か彼を事情説明に使っているが、今まで問題視された事はない。

そして、僕は将来の話をつたみかけるように行う。

「お爺様、それで元老院の事なのです」

「……元老院？」

「ええ。僕が狙われたのは“災厄の魔女”の娘だからでしょうか？そして、お兄様も。けれどもお兄様は、その成長において英雄・ナギの息子で有る事を証明していると聞いています」

「……そうじゃの」

苦渋と言わんばかりの顔でお爺様は頷く。

「しかし、僕はこの顔です。母の娘であることを証明しているのです。これは元老院の罪の証といえるでしょう。だから僕は命を狙われる」

「……」

「僕は、アリー・スプリングフィールドは今後もあの人形のままが良いのだと思います。そして、事故死を装い死んだ方がいいのだと思います」

「……どうしてじゃ？」

「お兄様の双子の妹が“災厄の魔女”に瓜二つに成長すれば、世間は自ずと事実へと至るのではないでしょうか？今は僕たち二人のことは知られていません。しかし、そう遠くない時期にお兄様も成長し活躍なさるでしょう。少なくとも元老院はそう予測します。だからこそ、僕を殺しに来ます。周囲を巻き込む前に死んだ方がよいと思うのです」

「……しかし、ネギたちは悲しむぞ」

「村の人たちが既に犠牲になっているのです。次は更に大きな被害を及ぼす可能性だってあります」

お爺様、そしてタカミチ・ドネットも悲しそうに僕を見る。

「僕が、アリーくんについてれば守れるのでないのですか？」

名案だと言わんばかりのタカミチの提案にドネットは嬉色を浮かべるも僕とお爺様は力なく首を振る。

「村一つ犠牲にする事を厭わん連中じゃ。どんな手段を使ったとて不思議はない」

「それに、高畑さんにはお兄様を守ってほしいのです。僕の方は少し心当たりがありますので」

“お爺様、後はお任せします”とばかりに僕はこの話を打ち切った。そして、次の明るい話題へと移す。

「お爺様、村の人たちに会わせていただけですか」

*

石像の安置された部屋。そこに入った僕と三人は其々の表情を浮かべる。悼むような表情を浮かべるお爺様、驚きと悔しさを滲ませるタカミチ、悲しげに俯くドネット。

僕は一つの石像に近づき、その欠片をとる。そして、魔法を掛け、解呪を行う。ループの中、何度となく行ってきたため、確認とお爺様たちにその力を見せるために行うのだ。その欠片はゆっくりと布切れへと戻る。

「お爺様、解呪は可能なようです」

僕はお爺様にその布切れを見せ、そう口にした。

「なんじゃと!?!」

「ただし、条件があるのです」

「なんじゃ、いうてみい!?!」

「僕レベルの魔力量では解呪速度が遅すぎ、完全に戻る前に死んでしまうということです。ですから、僕の倍程度の魔力を一度に用意しなくてはいけないということです」

「……アリーレベルでも相当なのじゃが、倍となるとネギクラスじゃな」

「そうですね。でしたらお兄様にこの魔法を覚えさせてください」

「……教えて行つてはくれんのか?」

「合わない方がよいでしょう。その前にお爺様をお願いします」

*

ここもまた懐かしい麻帆良学園。この学園長・近衛近右衛門氏への紹介状をお爺様に書いてもらった。他にもクルト・ゲードル氏へのものも、だ。タカミチが同行してきたのは意外ではあったが。

あの後、解呪法をお爺様に教え、いくつか条件を付けた。紹介状を貰うのもその一つ、そして僕の名前を解呪に關してださないので条件。あくまでお爺様が発見した事にしなくてはならない。

ネギが有能であつても元老院は許容できるが、アリーが有能であることは許容できないのか、刺客が送られることが早まる可能性があるのだ。それは避けねばならない。

「アリーくん。こちらが学園長だ」

「初めまして。この度はお時間を戴きありがとうございます」

「ふむ。聞いておる。あ奴から捜索の相談を持ちかけられた事もあるからのう。それはさておきワシに用とはなんじゃ？」

「“闇の福音” エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル嬢を戴きたいのです」

「ほう、しかし、エヴァは物ではないしのう」

「ええ。存じ上げております。その辺りの交渉は僕の方で行いますのでご安心を。ただ、事後報告よりも事前に言っておいた方が、角が立たないと思ひまして」

「まるで、連れて行くのが決まっているかのようじゃのう」

「ええ、当然ですわ」

僕は余裕の笑みを浮かべる。それに対し学園長はエヴァをここに呼ぶように指示を出した。居ないところで僕が直接エヴァに会い、僕に何かがあればお爺様に申し訳が立たないといったところだろう。後は、単純な興味もあるかもしれない。

*

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。かの“闇の福音”。僕を殺した数は二番目に多い。あの悪魔“ベリアル”に次いだ回数だ。尤も僕が彼女を殺した回数も同程度のものだったが。

「おい、来てやったぞ。じじい」

「初めまして、“闇の福音”。お呼びしたのは僕です」

僕は答えようとする学園長を制し返事をする。その腰まで伸ばした

金髪にその美しい肌。そして、その造形は僕の好みにピッタリである。高慢であるのは寧ろ魅力。そのようなエヴァを屈服させ従わせる事こそ楽しいものだ。

「ほう、私を知っていて会いたいとは如何なるようなのだ」

恐れ慄け、とばかりの高慢な態度。しかし、魔力を失い、ただの童女に過ぎない彼女は僕にとっては赤子のようなもの。普通であればその戦闘経験からタカミチにも勝つ事が可能だろうが。

「失礼しました。僕の名はアリー・スプリングフィールド。貴女をここに縛っている英雄ナギの娘ですわ」

「ふん。バカをいうな。ナギにお前のような齡の娘がいてたまるか」
「これは“闇の福音”とは思えないお言葉ですね。時間は戻すことはできなくとも引き延ばす事は出来ません。十年余、ここに閉じ込められ呆けたのですか？」

慇懃無礼。言葉は丁寧に使っているが、明らかにエヴァに対する上からの目線での発言。過去の遙か昔の苦渋を舐め、泥水を啜っていたころのエヴァならば耐えられるだろうが、絶対的強者に慣れ、未だそれを忘れられないエヴァからしてみれば看過できない言葉だ。

「貴様！！良い度胸だな」

「エヴァ、アリーくんの言っている事は本当だ。彼女はナギさんの娘だ。エヴァの別荘のようなところで長期間過ごしていたんだ」

「なん……だと」

驚愕し、エヴァは言葉を失う。ナギに子がいるという事はパートナーがいたということ、想い人であったのだから衝撃を受けるのは仕方ないだろう。そして、もう一つは血による解呪が思い浮かんだは

ずだ。

しかし、エヴァの血の解呪というのはあり得ないもの。何度か試した事はあるが成功した事は無い。本来もつと他の手段が存在する。それこそ、あのアルビレオ・イマ級であれば可能なのだ。けれど、エヴァはその手段を使えない。

そもそも、エヴァは魔法を体系的に学んだ事は一度も無い。武術の師は何人かいるだろうが、魔法の師はいないのだ。ほとんどの魔法は見様見真似。敵が使ってくる魔法を盗み取ったにすぎない。そして、その発展系が闇の魔法。吸血鬼である強みを前面に打ち出し、ただ魔力の塊を取りこむという乱暴な魔法だ。術式などといったものも殆どない簡単なものなのだ。

だからこそ、解呪の方法もわからない。血によるものも経験則から導き出されたものに過ぎない。もっとも、だからといって学園長たちにナギのあの無理矢理な登校地獄を解く事もできないのだが。

「フハハハハハ」

「

一通り考えが巡ったのだろう。笑い出した。心配気にエヴァを見るタカミチ、溜息を吐く学園長を置き、僕はゆっくりと目の前に置かれたコーヒーを飲む。やはり、僕は珈琲党。一度、その事をネギに咎められたが一方的にボコボコにし、解決させた。あの時は確かネギと敵対していた回だったから、お互いにそれを口実にしただけだった。

「貴様、血を寄越せ!」

興奮からだろうかエヴァは短絡思考に陥っている。タカミチ・学園

長の前でそのようなことを口にしても叶うはずも無いのに。意図的に笑い声を漏らす。

「フフフフ」

「貴様、何を笑っている」

「いえ。“闇の福音”、その姿ではそんなに凄んでも怖くも何ともありませんよ」

睨みつけられても全く怖くも無いのだ。魔力障壁を張れば僕に触れることすらできない今のエヴァの何を怖がれというのか。

「き、貴様あー!!」

「それに“血”だなんて。解呪でもするつもりなんでしょうけど、賭けてもいいですがそんなもので登校地獄は解けませんよ」

「バ、バカを言うな」

「呪いだろうとなんだろうと、魔法を解けるのは魔法。そうですね、彼の高名なアルビレオ・イマ氏などなら可能なのではないのでしょうか？」

「アルだと、バカをいうな。奴の居場所などわからんのだから意味がないだろうが」

いや、この部屋も覗かれています。おそらく学園長が連絡したのだろう。ここでエヴァが“助けて。アル”とでも叫べば、僕の師の一人である面白好きの彼の事だ、来ようとするに違いない。残念ながら今は図書館島から出られないため、エヴァを呼ぶ形になるだろうが。

「さて、そんな“闇の福音”と僕は交渉しに来たのです」

「……ほう、言ってみる」

かなり頭に血が上っている様子。短気なのは変わらない、か。

「登校地獄を解いて差し上げますので、僕と主従関係を結んでください」

「ふむ、主従関係か」

「ええ、勿論、僕が主で貴女が従ですが」

主従関係と聞き、自分を主と仰ぐのか、と少々怒りを納めかけたものの、再度の言葉に怒りを発し殴りかかってくる。しかし、魔力も魔法無効化能力もない彼女は敢え無く僕の魔法障壁を殴ることと為り、むしろ拳を痛める。

「くっ、断る。貴様のような奴に従うくらいなら自分でどうにかして見せる」

「へえ。それは良い心がけです。僕としては貴女と戦って僕が勝てば貴女を下僕へ、貴女が勝てば無料で解呪しようと思つのですが？」
「……………舐めるな。今の私でも貴様の実力を多少はわかる。魔力のない私では敵わんだろう」

乗って来ない、か。ここで乗ってくればラクではあったのだけど。

「それは、まるで魔力があれば勝てるように決まっているように聞こえますか？」

「当たり前だ」

「では、魔力をも」

「待て」

僕が言いきる前に学園長から制止が掛る。困惑しているタカミチに対し、何故僕の言葉を止めるのかというエヴァ、そして僕は学園長へと注目する。

「待つんじゃない、アリーくん。その事を何故知っておる？」
「さて、何のことでしょうか」

惚ける僕に対し学園長は睨みつける。自分に対する口止めだろうと察したエヴァが、僕の話の中で、そしてその後予想される言葉の中で何が拙かったのかと考えているが、答えが出るはずがない。彼女はどこか固定観念に縛られており、魔法に関してそこまで詳しくないのだ。

「……アリーくん。勝てるのか？」

「ええ、もちろん」

「即答かのう。中々の度胸じゃの。エヴァ、アリーくんを殺さないか？」

「……ふんつ。忌々しいが女だからな。殺しはせんよ」

「アリーくん、わかった。ただし、立ち合わせてほしい」

「わかりました」

意味がわからず、困惑しているエヴァとタカミチに対し、苦渋の表情を見せる学園長、そして余裕の表情の僕。ここで僕の口を封じたとしても、後で魔力が登校地獄と別の方法で抑えられていると僕がエヴァに告げた場合、エヴァからの学園側への不信感が膨らむ。そして、学園長にそれを防ぐ事は出来ない。

「では魔力の事だけは解いて差し上げましょう。それで勝負しませんか？」

「……魔力を、だと」

学園長と僕の顔を交互に見、僕が本気であり、そして学園長がそれを追認した事をエヴァは悟る。

「いいだろう。その代わり貴様が負けた場合に私の下僕になることを加える」

「……ええ、構いませんよ。負けなんてあり得ませんから」

互いに不敵な笑みを浮かべ僕とエヴァは見つめ合う。

「待ってくれ、エヴァ。いくらなんでもそれは……」

「煩い、タカミチ。この小娘も納得済みだ!!」

「わかっておる、エヴァ。タカミチくん、これは決定事項じゃ。場所はワシが用意する。エヴァ、明日の昼にここに集合ということだよいかのう？魔力もその時じゃな、アリーくん」

僕が学園長の問いに頷くのを見、エヴァも返事をする。

「いいだろう、首を洗って待っているよ。小娘」

「ええ、身体を洗って来てくださいね。“闇の福音”」

エヴァはそう言い捨て、一人学園長室から出て行った。

*

「さて、アリーくん。面倒なことをしてくれたのう」

「ですから最初に申しあげたでしょう。“闇の福音”を戴く、と」

エヴァが出て行き、三人に部屋に沈黙が流れ、数秒経ち最初に口を開いたのは学園長だった。

「それにしてもアリーくん、本当に大丈夫なのかい？」

「構わんよ。アリーくんが下僕になったところでワシらには大した問題ではない。そちらではなく」

「魔力を封じているのが登校地獄の呪いでなく、学園長によるものだと何故知ったか、ですか？」

「へっ？」

学園長の問いを僕は途中から口にし、それを聞いたタカミチは驚き間抜けな声を出す。

「誰に聞いたのかのう？」

「いくら滅茶苦茶な登校地獄といえど、その範囲は決まっています。魔力を封じるなどというものは術式に込められていない。そして、この学園に入る時に境界を通りましたから」

「そうか。……………安心せい、タカミチくん。エヴァの負けじゃ」

大きく溜息を吐き、学園長は諦めた様にそつ口にする。

「どうしてですか？」

「あの結界はナギがエヴァに呪いを掛けた時に同行していたアルが構築したものじゃ。ワシでも気付くかどうか微妙な、隠匿も含まれるかなり高度な結界じゃからのう。それに気付ける者が無謀なことをするとは思えん」

へえ、それは新事実だ。てっきり学園長が布いたものだと思っていたのだけど、僕もまだまだ知らない事が多いな。

「アルさんが、ですか？」

「ふむ、そうじゃ。……………それからアリーくん。エヴァを騙していたワシが言う事ではないのじゃが、どうかエヴァに酷いことせんといてやってほしい。あのような口のきき方しかできんが、本当は

「御安心ください。僕もそんな酷い扱いするつもりはありません。予定では五年程度傭兵もどきとして働いてもらえば契約を切る予定ですし、ただ……」

「ただ、なんじゃ？」

言い淀んだと思ったのだろう、僕に対し学園長は続きを訪ねて来る。尤も言い淀んだというのではなく、エヴァの身体を思い出し妄想していただけなのだ。

「ただ僕はレスビアンなので、そちらの保証はできかねます」

最終話 ？？回目？

“命乞いするなら今の内だぞ” “ハッハッハッハ、魔力が戻った”
など数々のお言葉を戴いた戦いも既に終わり、地に伏したエヴァに
対しその傍らに立つ僕。そして、口をポカンと開け啞然とした表情
でこちらを見る、少し離れた場所にいる学園長とタカミチ。

「ま……て……卑怯……だぞ」

「いえいえ、開始の合図も待ちましたし」

エヴァの質問にしっかりと答えながら、僕は彼女の右手を持ち上げ
契約書に拇印を押させる。その後にいそいそと彼女を中心に本契約
の陣を作成。そして、痺れて動けない彼女の唇を奪う。ここまでの
時間が決着後、約三秒。痺れて動けない可哀想な僕のエヴァをお姫
様抱っこし、エヴァの家改め僕の家に向かおうとするが、引きとめ
られた。

「……なにをしたんじゃ？」

「え？僕のモノになる契約書に判を、あとついでに本契約も」

「いや、そっちではなくてじゃな」

「ああ。合図とともに魔力抑制を再起動させて、無詠唱で雷の矢を
放って痺れさせただけです」

魔力が使えることがよほどうれしかったのか、エヴァは空を飛んだ
状態で始まった対決。いきなり魔力を使えなくなったことで落下し
たエヴァに対し着地の瞬間に雷の矢を当て痺れさせて終了。即、契
約を行った訳だ。二人にそう告げ、納得してもらったところで、あ
と数時間は動けないエヴァを抱え僕は出発する。

「きさ……ま、ぜつ……た……い……に」
「そうだね。第二ラウンドはベッドで。そこでエヴァが勝ったら、
また勝負してあげるから」

*

「お席、御一緒させていただいてよろしいかしら？」

「おお、いいぜ。あんたらみたいな美女なら大歓迎……」

エヴァとチャチャゼロを連れ僕は魔法世界へと渡った。この時点では茶々丸は出来ておらず、また超もない。そのため、茶々丸が存在しない可能性も出て来るのだ。その辺は超と葉加瀬に後で無理矢理造らせれば良く、問題はない。

僕は魔法世界に渡り、やってきたのは自由交易都市“グラニクス”、会いにきた相手はこの都市の食事が痛くお気に入りのお店のようである。期入り浸っていたはずなのだ。しかし、その飯屋に向かう最中のカフェでその姿を見つける。新聞を広げ顔は見えないものの、その筋肉を見れば一目瞭然だった。

僕の声に新聞から眼を離し、僕とエヴァを視姦するかのようになら上へ視線を動かしていく。僕はローブをすっぽりと被っているため、あまりその視線にさらされる事はない。一方、隣で僕と腕を組んでいるエヴァは彼女自身の好みである露出の多い服を着ている。言葉を詰まらせたのはエヴァだと認識したからだった。

「げつ……エヴァンジェリン。どうしてこんなところに居るんだ！
？」

「久しぶりだな、ジャック」

親しげな言葉とは裏腹にラカンに対しエヴァは青筋を立て、怒りを露わにしている。エヴァからすれば騙したナギの片割れ・仲間なのだろう。アルと異なり目の前に居り暇そうにしているのだから助けにナギの代わりに助けに来いといったところ、か。まあ、エヴァとラカンの関係に僕は興味がないので良く知らないし。

「エヴァ」

僕はエヴァを窘め、席に座るように促す。エヴァは舌打ちをしながらもそれに従い、その事をラカンは面白そうに見ていた。

「へえ、エヴァンジェリンを従わせるとは、アンタなにもんだ？声から察するに良い女なんだろうから俺にも顔を拝ましてほしいもんだが」

「申し訳ございませんが、ここでは問題がありますので」

「へえ」

気のない返事。

「仕事の依頼、いえ違いますね。役割を果たしてもらいに来たと言えはよろしいのでしょうか」

「役割、なんのことだ？」

「旧世界の二人、特にアルビレオ・イマが何をするためにあんなところに籠っているのか。そして、ナギ・スプリングフィールドは今何をしているのか。それを考えれば、貴方がここにるのがむしろ不自然ですが」

「チッ！」

「お、おい。どういうことだ。ナギは生きているのか？それにアル

の居場所を知っているのか？」

ラカンの舌打ちを僕の言葉に肯定したと取り、僕とラカンに対し困惑気味に疑問を口にする。しかし、僕とラカンは互いに見つめ合い、沈黙が流れる。数秒、エヴァが答えない事に怒りを表し口を出そうとするところでラカンが口を開く。

「ナギの子、しかも娘の方が。誰があんたをそんなにしたんだ？」

「はて、何のことが解りかねますね」

「……………答える気はなし、か。で。俺に何をしてほしいんだ？」

「一年、その間僕に従ってくればいいのです。鳴けと言えばワンと鳴き、お座りと言えば座る、そんな狗のように」

ラカンは面白そうに笑い、未だ答えを貰えず怒りを露わにしつつあるエヴァを見、僕の言葉に応えた。

「わかった。エヴァンジェリンのようにお前の狗になればいいのだな」

*

クルトがオスティア総督府から自宅へと戻ってみれば、執事に客が

いる事を告げられる。メガロポリスに居た頃ならばともかく、この時期、こんな辺境の地に態々アポもなく訪ねて来るものはいない、とクルトは思い、相手の名を訪ねる。

相手がジャック・ラカンと聞き更なる驚きをクルトは覚えた。紅き翼とは袂を別つて既に長く、その間誰一人として自分を訪ねて来るものはいなかったのだ。アルやタカミチ、詠春であれば何か頼みがあれば来る可能性があったが、それとて今までなかったのだ。政治的な事に全く関心がなく、今ではただ遊んで暮らしているとクルト自身が認識しているラカンが来た事は純粹な驚き以外の何物でもない。

クルト自身、紅き翼を嫌っていた訳ではない。恩もあり個人的友誼もいまだ持っているつもりだ。ただ、その行動をもっと違う方法に使うべきだったというだけなのだ。もし、ラカンの個人的な頼みだとしても否とは言わず受けるつもりだろうとクルトは自身を分析し、そう結論付ける。尤も政治家であるクルトとしては場合によっては断らなければいけない事もあるのだが。

「よお、久しぶりだな。クルト」

部屋に入ってみれば三人並んで座っていた。ラカンから声を掛けられるもクルトの耳には届かなかった。真ん中に座る女性、その姿を見たからだ。見間違う事なきアリカさま。今でも主と仰ぎ、彼女の行動こそが政治家としての正しい行動であったと尊敬の念を抱き続けている女性だ。行方を知る事はなかったが、ナギとともに行方不明、もしくは死んでいたと思っていたが、何故こんなところに来たのか、とクルトの頭を過ぎる。

しかし、クルトはその疑問を無視し、彼女の前へと進み、膝をつく。

そして、ゆっくりと見上げ、差し出された手を受け取るごと自らも手を出したところで違和感に気付く。何かがおかしい、と。その時、眼の端にラカンのニヤケ顔が見え、騙されたことを悟り、クルトは飛び下がった。

「あら、受けて下さらないの？」

残念そうに口を開くアリーに対しクルトは眉を顰める。声・姿形は一緒であるが、それは……、と憎々しげにクルトはラカンを睨みつけた。

「ラカンさん、これはどういうことですか!？」

「おいおい、そう怒鳴るなよ。俺じゃねえよ、これはよ」

ラカンの否定に訝しげな表情をう加畑クルトに対しアリーが声を掛けた。

「初めまして僕はアリー・スプリングフィールドと申します。貴方にはアリカさまの娘だと言えば解りやすいでしょうか？」

「……アリカ様は貴女のような齡の娘を持つような方ではない」

魔法使いなのだから外見年齢など何とでもなる。その事をクルトは知らない訳ではなかったものの口にせざるを得ない。アリーから身分証明だとし書を渡され、メルディアナ魔法学校校長のものであるとクルトは確認した。

ラカン・学校長のお墨付きを持ち、隣に控えさせているのが“闇の福音”であることに気付いたクルトは認める他ない、と結論を出す。

「さて、僕の身分に関しては置いておくとして。本日の訪問は実に

簡単な内容です。魔法世界を救うため、そして何より僕の私欲のために従いなさい。クルト・ゲーデル」

「……はあ」

溜息を付いたクルトはその後の説明で従わされることと為る。優秀な秘書官がいたことで、クルトは表向き病気療養と為るのは翌日からの事。

*

「ところでどうして私を戦力として欲したのですか？」

クルトの疑問に僕は苦笑を禁じ得ない。これは僕にとって遊びなのだから人選も遊びに決まっている。

「京都神鳴流の剣士」

僕はクルトを指さし、そう口にする。

「伝説の傭兵」

今度はラカンに指を指す。

「そして、勉強嫌いの最強の魔法使いに性格の悪い魔法使い」

エヴァを、そして最後に僕を指さす。

「残念ながら一人、老人口調の子供が足りないけど、本拠地に攻め込んだメンツでしょ？」

啞然とするクルトに呆れたように溜息を吐くエヴァ、そして爆笑するラカン、三者三様の反応だ。

「ハツハツハツ、そうだな。差し詰めガトウはタカミチってことか」
「そういえば、チャチャゼロが老人口調で喋れば完璧じゃないかしら」

僕は良い事を思いついた。これで完璧に突入班と同じ人選だ。

「チョット、待テヨ。オイ」

「ククク、そりゃ、傑作だ。嬢ちゃんにとっては、これは遊びってことなんだな」

「ええ、そうよ。それに青山詠春はその後、関西呪術協会の長になって政治の道を歩むことになるけど、クルトにはもっと大変な道を歩ませることになるから」

今回のテーマはネギの普通の幸福。それは村人の石化を自らの手で解き、エヴァに襲われることなく過ごす。修学旅行も後で手を打てば問題なく過ごす事が出来る。ヘルマンに会うことなく、超も騒動を起こさず、魔法世界も崩壊しない。そして何より父母に会うことのできる、そんな平凡とも言える幸せを享受させる事が今回のテーマ。まあ、だからといってエヴァに襲われることやらが不幸かと言

ええ、そうではない。結果、仲良くなりその後更なる幸福となる可能性もあるのだ。

しかし、今回のテーマは“普通の”幸福、である。真祖・リヨウメンスクナノカミ・ヘルマン・魔法世界の崩壊といったヤバい内容のものは御退場願うわけだ。他の事はタカミチ始め周囲の人たちに任せていれば大丈夫だろう。そんな幸せを無理矢理押し付ける、それが僕の今回の遊び。

「……………本当にこんなオスティアの近くに完全なる世界の拠点があるんですか？」

クルトの疑問は当然。しかし、残念ながらそれは事実。何度かここを訪れたが何れも彼らの拠点でなかった事はない。それほどここは重要な場所なのだ。尤もこの時間軸では他にも拠点を持っており、そちらに主力がいる可能性は高く、近い順番に潰していくだけのこと。

「えっ？」

エヴァの驚きの声。拠点に入った瞬間に仕掛けられた。アーティファクト“無限の抱擁”、フェイトの仮契約者・環のものだ。彼女がいるということは相手ともいえる層もいる可能性が高い。思わぬ収穫、思わず舌なめずりをしてしまう。

「ラカン、破って」

「おいおい、嬢ちゃん。遊びなんだろう、もっと楽しまなくていいのよ？」

指で輪を作り眼に当て遠くを見ながらラカンは答える。おそらく術

者を探しているのだろう。

「これは美少女がいる気配だわ。後で僕は彼女たちで遊ぶから安心して、さっさと捕獲してくれればいいわ」

「……アルとは違った意味で性格悪いな、嬢ちゃん」

呆れつつもラカン気合を入れ、バグキャラの面目躍如。彼くらいしかできないであろう内側からの力技で破壊を行う。空間にヒビが入り、砕ける。クルトが命じておいたように一瞬で距離を詰め彼女たちを気絶させる。

気絶したままの彼女たちと僕はさっさと契約の上書きと僕との奴隷契約を行い、彼女たちは僕の従者兼奴隷となる。

「……………」

次の瞬間、新たな気配を感じる。異変を感じ取ったのか従者からの連絡かフェイトが一人現れた。しかし、こちら側の面子に驚いたのか口も開かない。

「……………」

「こんにちは。フェイト・アーウェルンクス」

「……………」

「さて、僕はフェイトさんへどういった感情を持てばいいのでしょうか？父母の仇ですか、それとも祖父の。はたまたオステイア崩壊を引き起こした貴方方組織に対し最後の女王の娘として領民の仇を討つべきなのでしょうか？」

「アリー。アリー・スプリングフィールドか」

「ええ。お人形さん」

憎々しげに睨みつけて来るフェイトに対し、僕は気絶している環を

前へと立たせる。そして背後から抱き締め、フェイトに見せ付けるようにその首筋に舌を這わせ、左手は彼女の胸へと。そして右手はゆっくりと下へと這わせていく。

「止める!!」

「……おや、お人形さんの言葉とは思えません。それに僕が僕の従者兼奴隷になにをしようとする自由ではないですかね？さて、ラカン、クルト」

「へい、へいっと」

やる気なさげなラカンと異なりクルトは恨み骨髓といったところか。アリカが表に居られなくなった原因を作った組織の幹部が相手なのだから。

「彼女たちに指一本触れてみる、必ず殺してやる」

フェイトらしくない熱い言葉。中々面白いことを言ってくれる。フェイトはそう言い残し、自らの不利を悟り撤退した。

「……さっきアルと違った意味で性格が悪いつて言ったけど訂正するぜ。アル以上の最悪の性格だ」

「ありがとう、褒め言葉と受け取っておくわ」

*

あれからなんやかんやあって、どうにかなった。完全なる世界をぶっ壊し、魔法世界の崩壊を再構築することで防いだ。しかし、流石完全なる世界だった。魔法世界の崩壊が防がれた後、フェイト一人

しかいないにも拘らず元老院をぶっ壊しにいくとは悪の組織らしいことをしてくれる。お陰で、クルトと他数人しか元老院の生き残りが居らず、彼主導で混乱を免れた。その影響で英雄視されたクルトがアリカの名誉回復を行ったが、それはまた別の話。

残念ながら環と暦、後で捕獲したフェイトの従者たちはフェイトの働きに免じ返してあげた。フェイトも中々巧く元老院をぶっ壊……もとい、彼女たちはフェイトに奪い返され、何処かへと去って行った。僕たちに手を出さないことと元老院議員の殺害、その代わりに彼女たちの解放なんて取引はしていないはずである。

さて、僕のすべきことはいくつかある。まず、茶々丸の製造だ。超が来るかどうか、もう一カ月程度で解るが、どうなるかわからない。正直、何度もハッピーエンドっぽいことをしたけど今回のように超が来る、そして茶々丸製造前に解決したのは初めてだからだ。

さてと、次は後四年ほどの間にエヴァを調教し身も心も僕のものにしておかなくてはいけない。高飛車・高慢なエヴァを従わせ、そして、契約が切れた時に自らの意思で僕に従わせる、この遊びは楽しくて仕方ない。

最終話 ？？回目？（後書き）

『なんやかんや』は万能。そう聞いた事がある。

挿話 一二二回目？

前回のあらすじ

『魔法世界の崩壊を目撃し、死んだアリーはその原因をネギへと求めた。ネギの隣に立ち襲い来る敵に次々と殺され、そして殺すアリー』

アリーは一二二回目を迎えていた。前回は途中からエヴァの解呪に掛りきりと為った。そこでアリーが知ったのはエヴァの無学さだった。エヴァはその出生の関係上、魔法学校を出た事もなければ、魔法をまともに学んだ事はなかったのだ。ただ只管技術を盗み、そしてより強くなってきた。つまり、エヴァは魔法理論に触れた事がないのだ。

それはこの麻帆良に閉じ込められてからも同様であり、あくまで戦闘技術に関してみるべきものがあるだけなのだ。アリーがエヴァの戦闘スタイルを見て疑問に思い尋ねたため、その事が発覚した。最近 といっても数十年前 に発表され、今では誰もが知っている効率的な魔力の運用法も知らなければ、『呪い』の解呪方法に関するしても全く知らなかったのだ。

ここ数年エヴァなり調べたというが、アリーが聞いてみればそれは魔法学校の初歩レベルのもので全く話にならない知識だった。てつきり、ありとあらゆる方法を試した上で、それでも無理だったからネギや自身を狙うという、アリーからすれば奇想天外な、魔法理論を無視した方法に出たのだと思いついていたのだ。

それについて話を聞けば昔掛けられた呪いをそれで解いた事が有るとの弁。聞いた内容から察すれば、それは“偶然”に過ぎず、別のエヴァが見落としている要素が関連していたとしかアリーには思えなかった。

一通り傍に居たチャチャゼロとともにエヴァを嘲笑った後、エヴァから当然の疑問を尋ねられた。“お前なら解呪できるのか”、と。アリーは時間が有れば可能かもしれない、と答えた。そのため、前は途中でエヴァの解呪のための回と化した。

簡単な解呪法から始め、最後にはかなり高度なものまで、試すこととなった。一応、生徒として学園に通っていたアリーとエヴァはあまり時間を取れず、二カ月ほどそれに掛りきりと為り、漸く解く事が出来た。

気付けば麻帆良祭最終日の夜。何故か外では魔法がばれていた。よくわからないまま、多少事情を察したのだろうエヴァから超の仕業だと聞かせられる。しかし、既に超は学園におらず事情を聴く事は出来なかった。

見つけたネギに話を聞けば要領を得ず、タイムマシンで戻ってきたのに負けたなどという可笑しい発言をする始末でアリーは困惑するだけだった。それはネギの従者に聞いても同じでアリーとしては信じられないものの、信じるしかないと言ったところ。

しかし、翌日にはその件に関してエヴァも含め、詰問される事態と為り、超の事と同時期にエヴァの呪いを解いたため、超の関係者だと疑われオコジョにされようとなったところで逃亡を決意。エヴァたちとともに、逃亡に成功。以降、各地を漫遊しアリーは真祖になるうとしたところで、今回に移行した。

それは前々回にエヴァと親密になった際に持ちかけられた吸血鬼になった時と同様であり種族変更は次に移行する様になることをアリア自身気付いていた。けれども、人間としての寿命には限界があり、それを迎えていたアリアからすれば止むを得ないことだったのだ。

ちなみに前回も諸国漫遊中に魔法世界は崩壊することとなった。わかったことはその時期が前に見た時と大体同じ八月末から九月初め頃ということであった。

さて今回はどうするか、とアリアは悩むも、前回何もできなかった麻帆良祭のことを片付けるべきなのだろうと考え、ここ四回ほど結果的にサボることとなったネギに同行し魔法世界崩壊を解決することを目標に掲げた。

しかし、数日後、早くもその目標は潰えることとなった。二二回目にして初めて、いつもの雑貨屋に“別荘”がなかったのだ。愕然としつつ、話を聞けば旅行者に売れたとのこと。今日までの数日の事を思い出すも、特にいつもと変わりはなかったはず。何がいけなかったのか、と茫然としながら帰宅した。

起きた事は仕方ない、とアリアは前向きに考え目標を諦めた。いくら知識が有ろうとも自身のポンコツともいえる身体では何の役にも立たない事を知っていたのだ。そして、相打ちも含めれば十度ほど殺されている悪魔ベリアルからアリアは逃れる手段を持っていないかった。

そのため、さっさと次に移行しようと思いを過ぎるも賭けをするのも悪くない事にアリアは気付いた。部屋から年齢詐称薬を取り、一応アリアは置き手紙を残した。

*

アリーが辿り着いた先は麻帆良学園だった。元来、探知結界がある麻帆良に気付かれずに入る事は不可能と言われている。しかし、アリーはその抜け道を知っていた。数回前にヘルマンとベリアルに襲われた際に、エヴァを利用し聞きだしたのだ。

その抜け道を通り、向かった先はエヴァの家であった。別荘が手に入らないのであれば別のものを使用すれば良い、とエヴァの別荘を利用しに来たのだった。時間は昼、平日であり呪いの性質上、エヴァが学校に居るであろうことを予想していたアリーは形ばかりにチャームを鳴らすも無断で押し入った。

目敏く玄関に続くリビングにいるチャチャゼロを発見したアリーは、彼女を持ち自身が座ったソファの正面に座らせる。その動きに自身が何者かを知っていることを察したチャチャゼロはアリーへと声を掛けた。

「テメエ何者ダ？」

「その前に冷静に話し合いたいからエヴァに連絡するのを待つてほしいのだけど」

「……連絡シテネエヨ」

その言葉にアリーはチャチャゼロがエヴァとの念話をこの状態では行えないことを思い出した。前回途中から呪いから解放されていたため忘れていたのだ。そして、チャチャゼロからすればアリーが連絡したといっても怯えるような神経の細い相手には見えず、どちら

でも同じならと事実を述べたのだった。

「そうだったわね。すっかり忘れていたわ」

「“忘レテ” タツテドウイウコトダ？」

「後で説明してあげるわよ。さてと、書き置きでいいかしら」

勝手知ったる我が家とばかり、紙とペンを持ってきたアリーはそこにエヴァへの伝言を書き残した。そして、再度チャチャゼロを持ち、地下へと向かって行った。

*

エヴァが帰宅したのは既に夕方となっていた。煩い委員長に時間を割かされたのだ。既に九年も中学生を続けていれば嫌になるのは仕方ない、とエヴァは考えている。最初の三年はある程度クラスに馴染もうと努力をしたつもりだった。しかし、卒業を迎えてもナギが来る事はなく、そして呪いが解かれる事はなかった。

仲がよかったといえる同級生が自身の前から去っていくことに悲しみにうち震えた。そして、それは二度目の卒業を迎えても変わらなかった。ナギは来る事はなく、だ。そしてその頃にはナギが死んだという噂を知ることとなった。

エヴァには三つの考えが過ぎった。ナギは死んでおらず、自身のことを忘れ遊びまわっているのではないかという“裏切り”の話。そして、ナギは死に自身が解放される事はないのではないかという“悲しみ”の考え。最後は、ナギは生きているが今は来られず、いつか必ず迎えに来るのだという“希望”だった。

希望に縋りながらエヴァは生きていた。学園長に使役され、自由を失い外に出ることすら叶わないのだ。エヴァなりにナギに頼らず、呪いを解く方法を探すもそれに希望を見出す事は出来なかった。

家に入ったエヴァが最初におかしいと感じたのは、いつも声を掛けて来る従者のチャチャゼロの声がしなかったことだった。そして、目立つ場所に置いてあるメモを見て、エヴァは怒りに震えた。“別荘に一人で来てね、あとチャチャゼロ借りています”というメモだった。

チャチャゼロを返してほしければ誰にも言わず一人で来い、そう受け取ったのだ。魔法使いであることは確定であったが、おそらく内部犯だとエヴァは見た。外部であれば結界に反応があったはずなのだ。それがなかったからには答えは一つしかなかった。

内部犯であるのなら見張られているだろう。そして、下手な真似をする事は出来ない、とエヴァは要求に従う事にした。唯一、数百年の時を共に過ごし、苦楽を分かち合ったパートナーであったのだから。

*

入った直後に待ち伏せをされているのだろう、と予想していたものの、拍子抜けといったところで何もなかった。一时间出られない、ここに閉じ込めるのが目的なのではないか、とエヴァの頭に過ぎる、だからといっても打つ手はなく一日居なくてはならない。

考え過ぎなのかもしれないと思いつつ、あちこち探すも何もなく最後に訪れた砂浜で二人寝転んでいるのを見つけ殺意がさらに強まった。

「オ、御主人漸ク来タノカ」

遅かったな、などと振り返りながら軽い感じで口にするチャチャゼロの姿に安堵を覚えつつも繋がりが希薄になっていることに気付いた。そして、チャチャゼロが普通に動いていることにも驚いた。ただ単にどこかに閉じ込められていたため繋がりが感じられなかったのではなく、目の前まで来ても希薄ということは一体何をしたのかとチャチャゼロの隣で寝転んでいるアリーをエヴァは精一杯睨みつけた。

「あ、やっと来た」

「貴様、何者だ!？」

エヴァはアリーをみて驚く。結界が有るため外部からの侵入を逸早くエヴァ自身が探知するはずなのだ。しかし、目の前のアリーは巨大な魔力を含有しながらも、内部で見た事のない存在だった。少なくともこのレベルの魔力量であればエヴァは記憶しているはずであり、同時に腕はあまり良くないことを窺わせた。強さともいえる威圧感を感じない事、年齢詐称薬をただ飲んでいただけで偽装が巧く行っていない、この二点からだった。

「チャチャゼロ、僕の代わりに応えてあげて」

「オイオイ。イクラナンデモ、ソレハネエダロ!？」

ふざけているアリーにエヴァは更なる苛立ちを覚える。しかし、先ほどの二点で大した力を持っていてもチャチャゼロを操れば別だっ

た。チャチャゼロは既にエヴァの上位としてアリーを認識し、そこから従うようにプログラムされている可能性が高いと予想したのだ。だからこそ、たとえ別荘の中とはいえ少し力を使える程度の自身と全力を使えるチャチャゼロでは勝負にならないことを知っているエヴァは警戒をせざるを得ないのだった。

「はあ、チャチャゼロは役に立たないわね」

「戦闘特化ナンダカラ当たり前ダ」

大事なパートナーを貶され怒りを覚えるもエヴァは口を閉じる。今は自身が弱者である事を自覚しなければいけない、と。

「うーん、何から説明すればいいのか。……僕はアリー・スプリングフィールド。わかりやすく言えば、エヴァが片思いしているナギ・スプリングフィールドの娘ってところかな」

*

「……………ということなんだけど、わかってくれた？」

「……………到底信じられん」

「だろっね」

アリーの一部ループしていることも含めた説明にエヴァは納得できなかった。

「じゃあ、エヴァしか知らないことを話せばわかってくれるのかな？」

「……………考えてみてやる」

「そうだね。エヴァしか知らないことか。……父との出会いとかは？」

「チャチャゼロも知っているから聞いたのかもしれない」

「そっか。そういえばそうか。それは失敗したな。チャチャゼロを連れて来なければよかった。となるとここ五百年くらいは一緒にいたから殆どチャチャゼロの知っていることだし」

「そうだな」

「でもそれ以外だって、例えばチャチャゼロは襲った魔法使いの住処にあった人形に魔力込めたらできたってだけのエヴァ作ではない話だってチャチャゼロに話しているだろうし。意外にネコというかマグロに近いことやら、初だってこともチャチャゼロは知ってそうだし」

「チヨット待テ何ダソレ？」

「ちよつと待て」

アリーが悩みながら口にした事に対し、エヴァ・チャチャゼロの二人から異口同音に制止が掛った。時間が長くなったため、砂浜から場所を移し食事を摂りながらの話になっている。

「チャチャゼロのこと？あれでしょ。魔法使いに襲われて撃退してその住処から何かないと探していた時に事故でできたんでしょ？たしか殆どその魔法使いが作っていて、後は起動させるだけだったつて。だから、チャチャゼロは一人しかいないのよ」

「へエ、ソウダツタノカ」

「ちなみにそこからいくらか関係の本も盗って来たみたいだけど、読めなくて燃やしたとか」

「違う！！そっちじゃない」

エヴァは真っ赤になりながら、興味深々のチャチャゼロと話をするアリーを怒鳴り付けた。

「……そつちではなく後半の話だ」

「ああ、初つてこと？エヴァはやった事ないでしょ。仕方ないよ」

「な……なにをいって……」

「じゃあ、確認してみる？」

ニヤニヤと厭らしい笑みを浮かべたアリーは拒絶が返ってくることを知りながらそうエヴァへと問いかけた。

*

「うーん、信じてくれない、か」

「当り前だ!!」

エヴァしか知らないはずの事実を述べたところで、アリーの話をエヴァが信じる事はなかった。荒唐無稽な話よりも誰かから聞いたとか、偶然当てたなどの方が遥かにエヴァとしては信じる事が出来るからだ。

「じゃあ、父が生きているって話は？」

「……ナギが、だと。そのループとやらで会つたのか？」

驚いた表情を一瞬浮かべたものの、胡散臭そうにエヴァはアリーへと問いかけた。

「僕は会つた事は無いんだけど、ネギ兄様が先日会つたはずだよ。父の杖を貰つたつてはしゃいでいたから」

「……………信用できんな」

杖が目の前にあれば話は変わるかもしれないが、エヴァとしてはその話だけをもつてナギが生きていると考える事は出来なかった。希望は容易く打ち砕かれる事をこの六百年で嫌というほど身に染みっていたのだ。

「……じゃあ、後は……うん」

「ソロソロ、御主人ニ教エテヤレヨ」

不法侵入した上、チャチャゼロを人質に取った相手を信じるなど到底できるものではない、とエヴァは何が何でもアリーのいうことに従う気は無く、困っている彼女の姿にやや優越感に浸っていた。しかし、チャチャゼロの言葉にまだ何かある事を知る。

「でも、エヴァって無学じゃない？多分理解できないよ」

「マア、確カニソウダケドヨ。一応、言ッテミテクレヨ」

アリーとチャチャゼロにバカにされている事に内心苛立ちつつも、エヴァは続きを促した。アリーは促され仕方なくといった雰囲気を感じ出しながら口を開いた。

「エヴァって無学でしょ。僕もそれは前回知ったんだけど。エヴァレベルなら本来“登校地獄”って解くのはそんなに難しいことじゃないんだよ」

「は？」

「まあ、エヴァレベルっていうのは魔力量の問題なんだけど、あんまりこの学園には解呪とかマニアックなこと研究している人もいないみたいだし、知らないのは仕方ないんだけど」

ポカンと大きく口を開け啞然としたエヴァは数瞬の時間を要しアリ

ーの言葉の意味を理解した。そして、先ほどまで料理が乗っていたテーブルに手を叩きつけ、エヴァは強い口調でアリーへと言い放った。

「もつと詳しく話せ!!」

話したところで魔法理論の“ま”の字も知らないド素人のエヴァに理解できない高度な技術。前回も半ば暇つぶしに色々教えようと講義したがエヴァは何ら理解する事は無かった。意欲はあるのだが、エヴァはあまり賢くはないのだ。

「はあ、理解できないと思うよ」

溜息を吐きながら、アリーは出来る限り優しくエヴァに教えようと試みるのだった。

*

「ア、アリカ様!?!」

翌日に休日を控え、他の教師と呑みに行こうと考えていたタカミチは、突然エヴァに呼び出され別荘へと連れられてきた。昔はよくここで居合い拳の練習をしたな、と感慨に耽りつつ案内された先にいたアリーに驚きを隠せず思わずその名を呼んでしまった。すぐに魔法によるものだとわかったため、悪趣味だとエヴァを睨みつけたが、彼女はどこ吹く風とタカミチにアリーの話を聞くように促された。

「初めまして、高畑さん」

「ああ、初めまして。どちら様かな？出来ればその姿は止めてほしいのだけど」

その反応にアリーは内心こういう遊びも出来るのかと考えていたが、その事を知らないタカミチは促されるままに席につき、不本意ながらエヴァの横槍が入ることで依頼を受けざるを得なくなった。

依頼内容は“秘密裏にメルディアナ魔法学校校長に手紙を渡すこと”であった。その為、別荘を出たその足で空港に向かわざるを得なかった。エヴァに対する借りは大きく、それが持ち出されてしまった以上タカミチは黙って従った。そして、折角の休日も潰すこととなった。

タカミチのネームバリューは未だ大きくはなかったが、簡単に通され人払いの要求もすんなり通り校長と二人になれた事に驚きを隠せないでいた。そして、タカミチは手紙を手渡した。校長はそれを開き、顔色を変えた。最初は喜色に、そして徐々に暗く険しく変わっていった。内容も知らず、また結局アリーのことも聞けなかったタカミチは口を出不さずにはいらなかった。

「あおう、彼女は何者なのでしょうか？」

「……そうか聞いておらんのか。ナギの娘じゃよ」

「えっ？」

「あれは元気そうじゃったか？」

「……はい」

ナギとアリカに双子の子がいるという話自体はタカミチも知っていた。もつとも会った事はなかったし、何故あのようなところに居たのかもわからないのだ。だから、その疑問を口にした。

「どうして彼女は麻帆良に？」

「……先日のことなんじゃが、アリー達の住んでおった村が悪魔に襲われた。アリーとネギ、それにネカネ・アーニヤを残して全員石になっておった」

「悪魔が、ですか。しかし、どうやって彼女たちは助かったのですか？」

「……ふむ。ネギが言うにはナギが現れたらしい。ネギがその証拠にあのバカの杖を持っておったわ」

「……ナギさんが」

「それでワシの家に引き取ったんじゃが、アリーは二日前に置き手紙を残してワシの家から居なくなっただんじゃ。搜索しておったが見つからなんだ。まさか国外に出ておるとは」

「そ、それは」

「手紙によるとあのバカの指示らしい。……それで高畑くんに聞きたいんじゃが、このエヴァンジェリンは信用できる者なのか？」

「え？……はい。彼女は契約を重んじる人です」

「そうか。………はあ」

アリーの手紙、それにはナギからの指示で麻帆良学園に向かってエヴァを頼ったと書かれていた。元老院に狙われているのは英雄の子ネギではなく、魔女の娘アリーであると。“災厄の魔女”に瓜二つと為りつつあるアリーはネギ以上に狙われる可能性が高く、だからこそ警備体制が整い“闇の福音”エヴァの傍にいるよう指示された。

それは校長自身が持つ情報と矛盾は無く、元老院はネギよりもアリーに重きを置いているのは事実だと考えていた。しかし、あの村の襲撃で手駒が大幅に居なくなっただであらうことで動きにくくなったことを考慮すれば態々メルディアナ魔法学校まで襲いに来る事は無かるうと判断し、急ぎネギとアリーを学校に入れる気だった。しか

し、それよりも先にアリーが動いたのだ。

問題はこれがナギの指示かどうかだったが、間違いなくそれはないと校長は考えた。エヴァは麻帆良から動けず、目の前のタカミチが演技をしているとは思えない。友人である麻帆良の学園長であれば自分に一言あるだろうことから違うと校長は思っていた。では誰かと考えれば一人、齢のわからない性格の悪い魔法使いが思い出された。けれど、その魔法使いは行方不明であり校長はその居場所を知らない。

*

「で、学園長から“龍の涙”手に入れられた？」

「……………無理だった」

「だろうね」

アリーが別荘に籠りだしてから既に二年が過ぎようとしていた頃、何度となく繰り返されているエヴァとアリーのやり取りが今日も行われていた。

「アレなしでも出来ないのか？」

「だから無理だって。前はあっちの別荘に有ったのを使ったから探す事は無かったし」

「解呪は難しくないと言ったではないか」

「僕とアレがあれば解呪できるんだから難しくはないでしょ。それにアレだって入手難易度は低いんだし」

「……………手に入らないではないか」

「そりゃ、そっちの問題でしょ。ちゃんと手に入れて来てくれない

と」

龍の涙は魔法世界に多数存在する龍より採取できるアリーの考える解呪には欠かすことのできないもの一つだった。前は、雑貨屋で手に入る別荘に有ったためそれを使用した。しかし、今回はそれが無い事をアリーも忘れており、一年が過ぎた段階で思い出したのだった。そして、エヴァが簡単に安請け合ひし学園長に掛け合ったが、何度となく断られているのである。

「うーん、戦争で龍の個体数も減ったし、あんまり市場に出回るものでもないから伝手が必要だとは思っていたけど、学園長に断られるなんて」

「……嫌い」

「学園長はよっぽどエヴァを手放したくないんじゃないの？高畑さんにも断られたんでしょ」

「……だから、嫌いと言っておろう！！」

アリーの予想では学園長がエヴァを手放さない理由は一つだけだった。アリーの傍に置き護衛としての機能を求められているのだ。つまり、解呪できるのもアリーならば縛り付けているのもアリーだとアリーにとって学園に居る事が優先される今では、学園長との間で利害は一致しており、そのためエヴァに助言はしない。尤もエヴァが“龍の涙”を持ってきたからといって、エヴァを手放す気はアリーには毛頭なかった。

アリーが知らない学園長の事情としては、他にもエヴァを想つての事も存在していた。つまり、学園に縛っているからこそその元賞金首であり、そこから放たれれば賞金首に戻るのだ。そして、現在は魔法世界も含め平和であり、だからこそかつての大戦で儲けた傭兵たちはメシの種を常に探している。そこに高額な賞金首が現れるとど

うなるかは火を見るより明らかだった。

だからといってエヴァが簡単に狩られるとは学園長は考えていないが、対エヴァ用の装備も一時期考えだされ今は死蔵されているとも聞いていた。組織と個人の戦いでは個人であるエヴァに分が悪いことが自明で彼女のことを心配している面も学園長にはあった。

もちろん、関東魔法協会理事という身分上、エヴァに対する監視の意味もあり、解放に手を課すなど出来ないことだった。アリーを預かった身としてもエヴァの友人としても、そして組織人としてもエヴァの解呪に手を課す事は学園長としては出来ないことだったのだ。

「さて、エヴァ。僕はいつものところに行ってくるから」

「……また、図書館島か？」

「もちろん」

アリーは一年ほど前から図書館島通いを始めていた。既に最低限の魔力制御ができるようになってからのことだった。これまでのループに置いてアリーはメルディアナ魔法学校に有る書物、二つの別荘にあった書物は既に殆ど読みつくしていた。ただ、学園に幾度となく訪れることはあったものの、あまり時間を取ることができず図書館島には手を付けていなかった。だからこそ、今余裕が有る時間に通うのだった。

最初の頃のループは兎も角として、アリーの今の目的は明確だった。ループからの脱出である。言い方を変えれば死ぬことだ。既に数えるのも馬鹿らしくなるほどの時間を過ごしたアリーにとって終わることだけが救いだっただのだ。

実際、アリーは今まで調査を行ってきた。自身が何故このような目

「それがのう」

エヴァの剣幕に押されつつも、言い淀む学園長を眼にアリーは考えを巡らせる。何故この時期にエヴァが必要になるのか、についてだ。

「あと、三年間じゃ。その間しつかり働いてくれれば手に入れてやれる」

「……更に、三年だとふざけるな」

「じゃがのう、ワシには本国からも色々言われるからそっちも黙らさねばならんのじゃよ」

なるほど、とアリーは考えた。元老院等が解呪されればどういいうかなど考えてもいなかった、と。

「ネギ兄様がこちらに来られるということですね」

「……そうじゃ」

先ほどまで黙ってみていたアリーがエヴァを押しつけ学園長へと話す。

「解呪をネギ兄様に任せれば問題ないのですか？」

「どういうことだ!？」

「……………ネギくんが無い方が良いかも知れんがな」

驚きの表情を浮かべ口ごもりつつも、アリーの問いに学園長は肯定を返す。つまり、最低でもアリーが目立つ功績を上げる事は政治的に望ましくなく、それだけ消される可能性が高まるということ。なにも危険を望むわけではないアリーからすれば許容できる提案だった。学園長は自身を麻帆良に閉じ込め、隠れて静かに暮さそうとしていることをアリーは察した。

「エヴァ、学園長は後三年以内に修行に来るネギ兄様を守るために抑止力としても実動員としても働いてほしい、と。そして、ある程度まで育てば“誰か”により解呪されたことにして後を追わせない、ということですよ」

「……アリーの双子の兄、か」

付け加えれば、エヴァにとってはその“誰か”はナギのように名声のある人間である方が望ましい。それは解呪した人間がある意味でエヴァの保証人のようなものだからだとアリーは考えた。だからこそ、ナギの息子と知られていないネギでは不適ともいえる。そして、アリーにとってエヴァがネギに助力するのは好ましいことである。イベントをクリアするためにエヴァの力は必要なのだから。

挿話 一二二回目？（後書き）

書き方が違うのは二日くらい時間を開けてから書くことしたら忘れちゃったからです。

あと、アリーの口調が一定ではないのは成長とか老化とかそんな変化によるもの。別に筆者がテキストに書いていたからではないと信じたい。

挿話 一二二回目？

前回のあらすじ

『“別荘”を入手できなかったアリーは麻帆良のエヴァの元へ。特に伏線とかなない行きあたりばったりの話が始まります』

アリーには戦闘の才能はない。凡才である彼女の戦闘は常に理詰めで行われる。敵を知り己を弁えた上で、チェスのように相手の攻撃を読んだ上で何手も先を見通し、自身を動かす。しかし、それは同時に解呪されたエヴァのような圧倒的な存在には敵対することもできないような力しか持つていないことを意味していた。ただし、何度もループしている彼女は様々な敵と出会い、何人もの師に教えを請うたため、よほどの敵でなければ負ける事は無いと自負していた。つまり、戦わなければ良いと。

さて、アリーは今図書館島に入り浸っている。魔法使い、それもアリーレベルともなれば食べるという行為も必要とせず、ずっと籠っていることが出来る。そのため、長い時は数週間、彼女は家に帰る事は無い。けれども、そろそろ戻ろうかと上へと登ってきたとき、見慣れた人を見かけた。

ネギとアスナ、このか達だった。気付いたのはアリーが先だったため、向こうに気取られる前に隠れることに成功したものの、何故ここにいるのかとアリーは疑問に思ってしまう。それもそのはず、図書館島に“魔法の本”をテスト勉強のために取りに来る話など今までアリーは遭遇した事が無かったのだ。

それはアリーが麻帆良に来る際は常にネギとともに来ていたからだった。アリーは長年の経験から子供を短時間であしらう術をもっており、それは子供を満足させる方法だった。そして、ネギに対しても同様にあしらっていたため、アリーとしてはあしらっていたつもりであっても、ネギからすれば満足を得られる頼れる人となった。そのため、ネギは精神的に弱く、今まで担任という大任をアリーとともに居る時に任された事が無かったのだ。だからこそ、与えられる課題も異なっていた。

しかし、今回はアリーが傍に居なかったため、ネギが甘え頼る相手はたまにしか会えないネカネしかおらず、そのために精神的に成長することとなった。その事により、学園側はクラス担任を任せることと為り、課題もそれに伴う形で厳しいものへと変わっていた。

「あつれ？こんなこと今まであつたかな。……………というかもうネギ兄様が来てるんだ」

少々熱が入り二カ月近く図書館島に籠ってしまっていたアリーは失敗したと頭を押さえた。尤も彼女自身にとっては失敗といっても大きな事ではない。アスナに魔法バレさせない方法があるのかという事が最近のブームだったのだ。例えばのどかから本を取り上げたとしても、数日の差はあれどいつの間にかアスナには魔法バレするのだ。これがあの“修正力”なのかと思いつつも、それは歴史改変に関する用語だったかと頭の隅に追いやった。

基本的に面倒見の良いアスナはネギに付く事が多く、そして認識阻害に影響されない彼女に抜けているところがあるネギに隠せという方が無理なのかもしれない、とアリーは結論付けてはいたが、それでも気にはなっていたのだ。

「誰でござるか？」

アリーの背後に楓は音も無く現れ声を掛けてきた。尤もアリーの方は楓に反応しようとしたところ相手が誰かわかり、無駄に動くのを止めただけであつたが。

「まさか、僕に気付くとは思わなかつたよ」

「素晴らしい隠行でござる。現に拙者以外は気付かなかつたようでござる」

まだまだ、甘いか。忍者それも真名に並ぶ力の持ち主相手では気付かれるのはやむを得ないか、とアリーは考えを改める。

「僕はまあ、司書みたいなものかな。仕事じゃないけどね」

「幻の司書でござるか」

「うん。多分違うよ。僕もその人には会つた事が無いから」

「そうでござるか。それで拙者たちはどうなるのでござるか？」

「司書じゃないから僕は見なかつた事にするつもりだけど」

アリーの言葉に眼に見えて安心した素振りを見せる楓を前にアリーは眼の端に何かが映つた気がしそちらをみる。遅れて釣られた楓もそちらを見れば小さな何かがネギたちの近くで動いていた。

「あれは何でござるか？捕まえようとしたござるか……」

「監視、かな。警告を発しないのだからほつといてもいいのじゃないかな？」

「そうでござるか。では拙者はそろそろ追いつかねばならんで「じゃあね」

楓がネギたちの元へと向かつて行くのを見て、意図を読めないでい

た。何故図書館島にネギを侵入させる必要があるのか、学園長の意思が介在しているのだろうか、と。

*

四月半ば、アリーはあれ以来図書館島への出入りを控えていた。時間にルーズと為っていたアリーは一カ月程度であれば、熱中してしまえば忘れてしまうので、それでは困るのだ。ネギに何かあつてはイベントのクリアが難しくなるのではないかと考えていたのだ。

「ネギ兄様ってどう?」

「そうだな。十歳にしてはよくやっているんじゃないか」

「教師として、魔法使いとしてはどう?」

「教師としては何人にかはなつているようだし、マスコットしてはいいのではないか。魔法使いとしては落第だな」

「でしょうね」

いつも通りの評にアリーは少々予想を外した。いつもであれば担任で無かったのに、今回は担任であるためつきり何かネギの方に変化があると思っていたがそうではないのか、と。別の思惑によって担任になったのならどういふことが調べなくてはならないのだ。

「ところで、だ。アリー、私は修学旅行に行きたいのだが」

「うん、行ってらっしゃい」

「だから、呪いをどうにかしてもらいたい」

「前にも言ったでしょ。無理よ。どうしてもっていうなら“龍の涙”を手に入れて来て」

「あれから三年も経っているんだ。違う答えを返さんか!」

前の修学旅行の際にもエヴァは同じ事をいい、アリーは同様に返したのだった。といつても今とあの時は違う為、アリーは話を続ける。

「まあ、不可能ではないのだけど」

「何だと！！詳しく話せ！！」

エヴァは鬼気迫る勢いでアリーへと詰め寄った。それほどエヴァは外出したがっているのだ。

「“龍の涙”は簡単にいえば良質の触媒。小さな魔力で大きな事を為すためのものだよ。それは僕の魔力量では事を為せないし、エヴァの魔力は当事者だから意味が無いつてことで必要なんだけど、逆にいえば大きな魔力さえあれば触媒なんて必要ないんだ」

「……つまり、どういうことだ？」

「ネギ兄様の魔力だと僕と相性が良いから可能だと思う。あと近衛木乃香の魔力は圧倒的だから効率は悪いけどそっちも多分いけるよ」
「……………念の為に聞いておくが、その話を何故今までしなかった？」

怒りを孕んだ底冷えするようなエヴァの声にアリーはニヤニヤと笑う。

「不可能だったからね。近衛木乃香を気付かれず連れて来るのはいくらなんでもその状態のエヴァには無理でしょ？まあ、僕の技術的な問題も最近解決したからってのもあるけど」

「チツ、まあ信じてやる」

そう言い捨てエヴァは席を立つ。どちらの方法にしても隠れてやるのは不可能。結局のところ回答は学園長の許可が無ければなにも出

来ないという三年前と変わらぬものなのだ。だからこそ、エヴァは学園長の元へと向かうのだった。

*

「アリー、貴様。何だあれは!？」
「何のこと？」

怒り怒髪天を突くとばかりにエヴァはアリーへと怒鳴っていた。修学旅行から帰ってきたエヴァはすぐに茶々丸にアリーを呼びに行かせたものの戻ってきたのは二日後。熱中するアリーを無理矢理連れて来る事になったのだった。

「だからあの、フェイトというやつとリョウメンスクナノカミだ」
「言ったでしょ。危ないから気を付けてねって」

「もつとしつかり言え!!」
「覚えてないかもしれないけど言ったよ。修学旅行に行けるようになってから興奮して僕の言葉を殆ど聞いてなかったからでしょ」

「嘘を吐くな」
「マスター、申し訳ありませんが、確かにアリーさんは仰っておられました」

「……………」
「で、気が済んだ？」

茶々丸を信用しているエヴァはその言葉に口を噤むこととなった。確かに一五年ぶりの外ということで前日には楽しみで眠れなかったのだ。そして、その間の事はあまり記憶していない。

「そ、そういえばぼーやが訪ねてきたぞ」

気まずい空気の中、エヴァは話を変えることにした。

「うん？ネギ兄様が、何のために？」

「ふむ。弟子入りしたいとか。にべもなく断ってやったわ」

「へえ」

ネギがエヴァの弟子入りを志願する。それについても図書館島での事同様にアリーには初めての事であった。しかし、図書館島での事は数日の欠席が有ったため、アリーが気付かないはずがないもの、こちらはもしかしたら今までも有ったのかもしれないと頭の隅にアリーはメモを取った。

「ところで、どうして断ったの？」

「当たり前だ。もうすぐ、お役御免と為るのに面倒事を抱える気はない」

つまり、解呪の希望が見えなかった場合、ネギを弟子にする可能性があったのか、とアリーは考えた。

*

「初めまして、と言えば良いのかな。超鈴音」

「……………アリー・スプリングフィールド…カ」

五月のヘルマン他数体の悪魔は仕掛けたおいた罠により誰よりも早くその侵入をアリーが知ることとなった。そのため、エヴァを連れ

出しネギの安全のためという名目の元、茶々丸の手を使い電力によるエヴァの魔力抑制を解き、殲滅を行った。茶々丸のお膳立てとエヴァを見送った事くらいしかアリーがする事は無かったが。

さて、六月に学園中が麻帆良祭に向けた準備へと夢中になっている頃、アリーは一人密かに動き出していた。超の捕縛が目的だった。謀殺でもアリーとしては一向に問題なかったものの、情報を得るためにまずは捕縛し、次回以降の為に話を聞く必要が有ったのだ。

そして、麻帆良祭を一週間前に控えた今日、超が一人研究棟に泊まりこんでいる最中、魔法によって捕縛する事に成功した。対魔法抵抗をもっていない超には“眠りの霧”だけでも充分であった。そして、用意しておいた秘密の地下室へと超を運び、目覚めるまで待ったのだ。

「うーん、僕はあまり知られていないと思っていただけ……。そうか茶々丸か」

「さて、どう力。それで私に何のようネ？」

「いやあ、今度の麻帆良祭のイベントについて話を聞きたくて」

「お化け屋敷、ネ」

不敵に笑いながらクラスの出し物に付いて話し出す超に対し、ニコニコと笑顔でアリーは応対していた。見た目から顔・齢ともにとてもネギの双子の妹とは思えない姿をしている自身の名を即答したことでアリーは驚いたものの、直ぐに答えへと辿りついた。

「そつちの話じゃないのだけれど」

「何のことかわからないネ。それに教えてほしいのならそれなりの聞き方というものがあるのではない力？」

後ろ手に、そして両足を縛られ座らされた超は目線でそれらを外せと述べていた。もちろん、逃亡する可能性も考慮しているアリーが外すはずが無い。

「聞き方、というのはこういうことかな？」

背後から拳銃を取り出したアリーは、そのまま超の太腿へと照準を合わせた。治癒魔法を使えるアリーからすれば多少の怪我ならば治す事が出来、この程度問題ではないのだ。

「流石にそれは待つてほしいヨ。何が聞きたいかはつきり言ってほしいネ」

甘い学園にいる魔法使いとは違った対応に少々焦りの色を見せた超は、懇願の色を見せアリーに具体的な質問を要求した。

「そうだね。まず、一つ目はどこの誰、ということだね」

「……私は中国の四川の出身ネ」

パンツ、銃が撃たれる音とともに超の小さな悲鳴が響いた。撃った側のアリーは変わらず笑顔のままだった。

「もう一回、同じ質問」

「………火星出身ネ」

「では次の質問。麻帆良に来た目的は？」

超は内心驚いていた。火星などという与太とも思える話を通したからだ。呆れられた様子は無く、信じたかどうかはわからない。問題は知っていたかどうかだった。超自身が火星人であることを話したのは葉加瀬と真名のみであった。その二人のどちらかが裏切った可

可能性も勘案しつつも、他の可能性に心を馳せた。

何らかの魔法の行使によるもの、もしくは超同様の未来人。超から見て少なくとも心理学などの自身の表情や眼の動きなどの反応から答えを得たわけではない。そして、未来の技術でプロテクトされているため、魔法によって記憶を覗く行為はあり得ない。なによりそれが出来るのであれば問いを発する必要すらないのだ。ただのブラフか未来人か、その事に頭を割きつつも超はアリーの問いに答える。

「未来の悲劇を防ぐため、ネ」

「具体的には？」

その問いとともにアリーの背後にある扉が開かれる音がした。アリーは振り向く前にその事を察し、超を盾にしようと彼女の後ろに回ろうとする。しかし、それよりも先に銃声が響く。

「助かったネ。龍宮サン」

「仕事料は弾んでくれよ」

紐を解き、超を解放した二人の前に残っているのは頭部を撃ち抜かれた身代わり人形だった。アリーは遠くから自身を模した人形を動かしていたにすぎないのだ。もっともその出来は悪く、魔法使いではない超ならばともかくある程度の魔法使いであれば簡単に見破れる程度のもだった。

*

最近成功続きだったから高慢になっていたか、とアリーは自己反省

を行っていた。本来は記憶を覗いて終わるはずだったが、それをやる事が出来なかったため、あの方法となったのだ。記憶を覗くのは最も信頼でき簡単にできる情報源なのだ。特に魔法使いではない超には防ぐ手段がないはずだった。

真名による救出も考慮に入れていなかったわけではなかったが、直ぐに魔法で読み取れば終わるためキチンと対策を練っていなかったのが拙かった。唯一、念のためと魔法が聞かなかった時点で人形に代わった点はよかったといえた。前回、短時間にネギから聞き取った内容がどうやら嘘でないこと、そして超が何らかの目的のために魔法のことを世界にはらそうとしている事は確実となったのだった。

*

アリーはある種の明快な考えの元動いていた。彼女にとって自身がこのループから抜け出す以上に大事な事は無く、手段など選ぶ気などないのだ。他人を利用し捨てることに全く心が痛まなくなっただけだった。

麻帆良祭前日までに超が一人でいるところを発見することを終にアリーは出来なかった。だから、アリーは一つ方針を転換することにしたのだ。待ちに徹すると。麻帆良祭三日目に巨大な魔法陣を描き、強制認識魔法を発動する。で、あればそれさえ止める事が出来れば良いのだ。そして、アリーにはそれを可能とする手駒が存在していた。すなわち、エヴァである。

「さあ、行きなさい、エヴァ」

「断る」

アリーはかなり早い段階において、世界樹付近に最後の魔法陣が完成する事を予測していた。そして、それ以外の場所などどうでもいいと無視していたのだ。魔法理論上、巨大魔法陣の中心に最後の魔法陣を作る必要があり、地上か地下か空しかない。その中心は世界樹である以上、地上は無く、そして地下にはチャチャゼロを一応は配地しておいたため、発見されれば連絡が来るはずであった。だが、予想通り空へと飛空船が現れたのだ。

「どうしたの？」

「何故私が動かねばならん」

エヴァの様子がおかしいことにアリーは漸く気が付いた。

「……超、か」

「ふむ。ほれ」

取り出された品は“龍の涙”、超を侮っていた事を思い知る。契約においてアリーはエヴァの解呪をしなくてはならない。

「学園長との契約はどうするの？」

「そちらは契約時に穴をあけておいた」

ニヤリと笑うエヴァの前でアリーはただ溜息を漏らす。

「アリー、お前は私の下僕として養ってやるから安心しろ。クック
ツクツクツ」

目の前で行われる強制認識魔法の発動を確認し、アリーはくずおれるのだった。

挿話 一二二回目？（後書き）

四月一日なんで、許す方向でお願いします。

実は前作を終えてから五話の短編でエヴァが真祖になった頃の話を書こうとして、途中で行き詰っていたらこんなものを書いていました。謎です。

昔、似たようなループを書いたことがあるので、その焼き直しと言えばそれまでなのですが……。

ちなみにアリーは自殺したためにここに落とされ、七回目のループでも書きませんでしたけど自殺しています。

もつとも、これはアリー（偽）の話で、本物のアリー（真）は既に死んでいるというものです。

この話は自殺者であるアリーに対する罰として与えられたループとあったところです。賽ノ河原で石を積むけど、どこかでまた最初からやり直させられる、延々と続くそんな話でした。

こんな妄想を具現化したただけの話をお読みいただき、ありがとうございました。

外伝 長谷川千雨の× 回？

「僕と契約して魔法少女になってよ」

*

「うわっ！！」

悪夢から目を覚まし千雨は急に起き上った。悪夢、かつて経験したそれを夢で見るために千雨は恐怖に陥る。また、あの時に戻ったのではないのか、と。

「はあ……はあ……はあ」

起きたとはいえ、先ほどまでの夢を思い出し、落ち着こうと乱れた息を整えようとする。二年、いや一カ月にも渡ったその悪夢を千雨は忘れようと努力していたのだ。既にその頃から半年が経ち、頻繁に見ていたその夢の頻度はかなり下がっていたものの、今でもたまに見る。だから、見たこと自体はそれほど驚くことではないのだ。

漸く息を整えた千雨は周囲を警戒するようにゆっくりと見渡した。そして、誰も、同室のザジもない事を確認しホッと胸を撫で下ろす。別に悲鳴を上げたことが恥ずかしかったわけではない。ただ、あの頃に戻ったのではないのか、と怖くなるのだった。今でも慣れず、“普通”の生活に戻っているのか確認してしまう。いつもと変わらぬ寮の部屋。日付も四月八日の新学期開始に充分間に合う時間だと確認し再度胸を撫で下ろした。

しかし、最近はその“普通”の生活も危うくなってきていたことを思い出し、やや陰鬱な気持ちになってしまった。

「ちう様、どうされたんですか？」

「そうですね、ちう様。突然起きられて」

「……………うるせえ。また、あの頃の夢だよ」

千雨にとってあの頃の中でプラスと評価できるものの一つである電子精霊たちが心配して声を掛けて来ていた。特に話すことでもないため、話を切り上げた。千雨は寝汗をかいている事に気付き、朝風呂に入ろうと決めた。

*

新学期、授業開始時間になったところで千雨は内心頭を抱えた。もう一つの、今は過ぎ去ったあちらの悪夢と異なり現在進行形といえる悪夢、ネギが担任として教室にやってきたからだ。学園に所属していないモグリ魔法使いである千雨にとって学園側にそのことを知られることは好ましくない。千雨は出来る事ならこのまま平穩無事に中学生生活を終えたいのだ。裏でドンパチをやっている殺し殺される世界に顔を出す気など毛頭ないのだ。たとえ自身にその力があつたとしても、である。

その千雨にとってネギは悪夢といえた。魔法の秘匿を余り気にした様子を見せず、何度となく行使し千雨もそれを目撃していたのだ。アスナの服を脱がし、ドッジボールでは相手の服を消し飛ばし、期末テストでは生徒を含め行方不明に。春休みには空を飛んでいたのを見て眼を疑ったものだった。

何れも認識阻害の結界の下では問題ないのかもしれないが、自身にそれが効いておらず、また魔法使いである事が知られれば無理矢理所属させられ、働かされると千雨は聞いていた。完全に信じたわけではないが、平穩無事に過ごすために荒事をやっている彼ら学園の魔法使いに知られないことは重要だと考えていたのだ。

つまり、魔法を眼の前で次々使うネギは千雨にとって、学園に所属させるきっかけを作ろうとしているようにも見えた。それを是非とも拒否したい千雨にとって、そんなネギは悪夢以外の何物でもないのだ。

そんな魔法使いだらけの麻帆良学園から出る方法についても親に何回か申し入れた。中学二年の夏にその事を知り、普通の生活を夢見た千雨は親に転校を頼んだのだ。しかし、魔法の事を除き、その理由を説明するのは難しく、納得を得る事は出来なかった。唯一、高校選別に置いて、他所を候補に出す事には成功していた。

麻帆良中学はエスカレーター式で、さらに偏差値も高く環境も良いと評判の、いわば優良な学園なのだ。そこから出て行くというのはかなりの変わり者で、ほとんどいない。しかし、千雨は死に物狂いで麻帆良よりも上の高校に進学したい由を親に納得させる事に成功した。同学年七三七人中、四百番台、それも五百に限りなく近かった千雨には当時、夢物語に近いと親に思われていたからこそ了承を得られたことだったが、この半年余り勉強時間を大幅に増やしたため、クラスでは上位陣に入っていた。

この普通の生活からかけ離れた麻帆良から出るために、と努力を惜しまない千雨は今回の期末テストの結果で、それが現実を帯びつつある事を知っていた。しかしだからこそ、それを脅かす存在である

ネギに不安を覚えざるを得なかったのだ。

「……三年A組、ネギ先生ー！！」

ネギが正式な教員となり、担任として引き続きクラスを受け持つ事の何が良いのか、と千雨にはクラスメイト達が騒ぎ、喜ぶ姿を見ても一向に理解できなかった。バカどもが、という感想を持つ程度だったのだ。

そして、身体測定の準備が始まりさつさとそれを終わらそうとしていた千雨の耳に、吸血鬼に関するエヴァとアスナたちの話が聞こえてきた。“吸血鬼はイキのいい女が好き”エヴァの言葉は彼女自身が吸血鬼である事を知っている千雨からすれば、白々しいことこの上ない話ではあったが、同時にそれを警告と受け取り、気を付けようとして心に誓った。

*

翌日夜、千雨はパソコンに向かい、ホームページに春休みに撮り溜めしていた画像を数枚アップするとともに日記を付けていた。ネットアイドルをしている千雨は毎日の更新を欠かさない。尤も昨年の夏休み、一度も更新をする事が出来なかったため、大きくランキングが下がり落ち込んだものだった。しかし、その後電子精霊たちの助けもあり、工作上等で臨んだ結果、今では再度上位へと返り咲いていた。

「チツ、あのガキが。ふざけるなよ」

つつい、千雨は独り言を溢してしまふ。昨日は元気だったネギが今日は落ち込み、授業もまともに行っていなかったのだ。一応、プロなのだからしっかり授業はやれよ、と思いつつも千雨は教室で口に出す事はなかった。自身がそう感じる方が異端なのだろうと。そして、クラスメイト達はネギを元気づけようと何やらするそうだが、千雨はその参加を断った。付き合いが悪い事はこの半年で更に拍車がかかっており、誘った側も無理強いをしなかったのだ。

「また、なにかあったんですか。ちう様」

「わたくしどもでよければ話を聞かせて貰いますよ」

「……はあ」

そう“また”なのだ。千雨は溜息を吐く。ネギがクラスにやって来てからというものの、ストレスの溜まる日々が続いていた。それまでも、かなりおかしなクラスメイトたちではあったが、抑えるべき委員長であるあやかまでもそちら側、むしろ率先して騒ぐ側に回った事で更に力オスな状態を作り出していたのだ。

「実はなあ……」

そう口に出そうとした時、天井から白いものが降ってきた。それがなにかを一瞬判断できなかったものの、直ぐに着地から動き出したことで、その姿を確認できオコジヨだということがわかった。オコジヨといえば魔法関係にオコジヨ妖精というものがいることを聞き知っていた千雨は息を飲んだ。もしや、自身が魔法使いである事がバレたのではないのか、と。

しかし、そのオコジヨは特に喋る事もなく、千雨の見える中でベツドの下に潜り込もうとしていた。何をしようとしているのか判断できないものの、下手に刺激してはオコジヨ妖精だった場合にバレ

る可能性がある」と戸惑った。けれども、そこには下着とコスプレ衣装が隠されている事もあり、手を突っ込みそのオコジヨを捕まえた。いとも容易く捕まえられたことで、オコジヨ妖精ではないのか、と疑問を覚えた。自身が捕まえても下着を離さないその姿勢はどういうことなのかは、千雨の頭では想像できなかったが、さつさと外に逃がするのが一番である事に変わりはない。抵抗するオコジヨから自らの下着と他の水着を奪い、部屋のドアを開け外に放り投げようとした。

「あ、兄貴!!」

放り投げようとドアを開けてみれば、その前に偶々通りかかったのだろうネギとアスナがおりこちらを見た。千雨は流石に放り投げるのは、とそのまま降ろして逃がそうとした時、オコジヨからその声が聞こえた。オコジヨは千雨の手を振り払い、一直線にネギの元へと掛けて行った。

声に反応し身体を硬直させた千雨は、思考まで停止したものの、ここは何も聞こえなかったように振る舞おうとそのまま何も言わず何も見なかったようにドアを閉じようとした。が、残念ながらその動きをアスナによって止められることとなった。無理矢理にでもドアを閉めようとするが、力の強いアスナは外側のドアノブをもってそれを防ぐ。

「ちょっと待ちなさい、千雨ちゃん。今何か聞こえなかった？」

「い、いいや。何も聞こえなかったぜ」

アスナの問いに何も聞いていないと答えることで疑いをもたれることすら回避しようとした千雨だったが、早々にその目論見は露と消

えた。

「だ、誰!？」

「俺っちだぜ。ネギの兄貴。アルベール・カモミールさ!!」

「カ、カモくん」

その二人の、一人と一匹の会話を千雨はアスナと二人で聞かされることとなったのだ。

*

「ですから、黙っていて頂けないかと」

「ね、こいつもこう言っているし、千雨ちゃん。お願い」

「……はあ」

部屋に押し入れられ、ネギに事情を話され口止めを頼んできた。魔法使いだとバレなかったのは不幸中の幸いであったが、千雨は驚き開いた口が塞がらなかった。魔法がバレると修行を中止させられ本国に強制送還されるから黙っていてくれと。だったら、もっと秘匿に気を使い、杖をこれ見よがしに持ち歩き、時には空を飛んだり、服を吹き飛ばしたりするなど言いたかった。だったら、魔法を使わないように杖を持たずに魔力でも封印していれば良いじゃないか、と。が、そういった事を口に出せば問題が大きくなる事を知っている千雨の回答は決まっていた。

「ああ、わかった。黙っててやるからさっさと……」

「ありがとうございます」

さっさとここから出ていけ、そう口にする前にネギが言葉を被せてきた。そして、再度千雨が同様のことを述べようとした時今度はアスナが話した。

「わかったからさっさとここから……」

「そうだわ。エヴァンジェリンの事を話し合いましょう」

「エヴァンジェリンってなんスか？」

「ウチのクラスの子で、ネギと喧嘩してるっていつか」

「喧嘩っスか。俺が兄貴の代わりに」

「……それがエヴァンジェリンさんは吸血鬼の……真祖なんだ」

「……俺たちは故郷に帰らせて……」

「待ちなさい」

千雨の言葉を全く聞く気なく、二人と一匹は話を始めた。千雨の中でここ二カ月あまりのストレスと目の前で何の意味もない話し合いを持たれていることにイライラが積もって行った。

「……ここはパートナーを……」

「うるせえ、てめえら!!」

日頃の鬱憤と無視し続けられ、聞きたくもない話を聞かされた千雨はついに大声を出し、ネギたちを怒鳴り付けた。ここで止めておけばよかったものを千雨はいらぬ事まで口走ってしまった。

「そもそもだなあ。あのマクダウェルは元六百万ドルの賞金首なんだよ。てめえみたいになひよっこがパートナーを得たくらいでどうにかなるはずがねえだろうが!!」

「ちよ、ちよつと、それ本当なの?」

「……そういえば、俺っち聞いたことある気がするっス」

「だから、てめえらがいくら話し合ったところで無駄なんだよ」

「じゃあ、ネギに諦めろって言っているの!？」

「違えよ。大人を頼ればいいんだよ。最低でも私が知る限り、高畑と学園長はそっち側なんだから、そこに声をかければいいんだ!！」

「……え?高畑先生?」

「……でも」

タカミチの名を上げられ、アスナはそちらに気を取られ、心ここに非ずという感じになる。そこで、エヴァの話題になってから俯き落ち込んでいたネギが漸く口を開いた。

「でも、ボクは“立派な魔法使い”になりたいんです。それで父と妹を……痛ッ」

コツンと千雨はネギの頭を叩いた。

「良く聞け、ガキ。その“立派な魔法使い”という奴を私は大嫌いだけどな。何になるにしろ、出来ることと出来ない事が判断できないようじゃ、なんの役にも立たないんだよ。てめえのこれは出来ない事だ。だったら、誰かの力を借りろ。それが高畑や学園長だろうが」

「……ぐすっ……うわーん」

「あ、兄貴いー!！」

キツイ口調で言われた事がこたえたのか、ネギは涙ながらに部屋の扉を開け、一人走って出て行った。そして、直ぐにカモはそれを追っっていた。

「ちょっと、そんな言い方……ってそれよりも高畑先生が魔法使
いって本当なの!？」

「……正確には違うけど、関係者って意味ではそっち側だぜ。ま

ほネット上じゃ当代最強とも言われてるし」
「……そ、そんな」

*

「ちう様、よろしかったのですか？」

アスナを追いだし、一人きりになった千雨に対し電子精霊が話しかけてきた。

「うるっせ。よろしくないに決まってんだろ」

これで確実に学園側に魔法使いであるとバレることに千雨は頭を抱えた。面倒事が次々とやって来て外縁部でたまにやっている魔物か何かとの戦いに駆り出されるのだろうと予想していた。一時の感情に任せ、余計なことばかりを言ってしまったと千雨は後悔し布団に籠った。あんな偉そうなこといって明日、会わず顔がないとどうでもいい事も思いながら……。

外伝 長谷川千雨の×回？（後書き）

もう書く気はなかったのですが、書いてしまいました。

ちなみに、『魔法少女まどか マギカ』は関係してきません。

四月一日ではありませんが、寛大な心でご覧下さい。

千雨の部屋から逃げ帰り布団を被って、アスナやカモとも会話を交わさなかったネギは明け方、自身の心の整理を付けた。“頼る”ということを殆どしてこなかった。正確にはそのつもりだった。ネギにとって“頼られる”ことはあってもその反対はなかったのだ。勉強に関して困った事はなかったし、これまでも独力でやってきたつもりだったのだ。

だから、今回の修行に関しても一人で頑張るのが当然だと考えていた。けれど、それは思い上がりだと千雨によって気付かされ、そして決めた。もし修行中止になったとしても、自身に解決できない問題である以上、タカミチや学園長を頼ろう、と。

「アスナさん。朝一で学園長室に行きましょう」

「……ええ、そうね」

一晩丸々ベッドを占有され、話しかけても返事をせず、結局このかと一緒にベッドで眠ったアスナが起きてみればその一言だった。一瞬なんのことかわからなかったが、昨日の千雨の言っていた事かと思ひ当たりアスナは気の無い返事をした。アスナにとって大きかったのはそちらではなく憧れのタカミチが魔法使いであった事だった。尤もどこか“やっぱり”といったように納得していた。むしろ、何故そんなに当たり前に受け入れられたのかが不思議な程だった。

そういえば、何故千雨はあんなにも詳しくあったのだろうかと一晩経ち、漸く頭が回ってきたのかアスナは疑問に思えてきた。しかし、その疑問もすぐに忘れ去られることとなる。下着が無い事に気付き、襖を開けてみればそこには自身とこのかの下着に埋もれるカモの姿

があつたのだ。

「あ、姐さんおはようございます。いやー、これってぬくぬくっスね」

悪びれた様子も無いカモに対しアスナは先ほどまで何を考えていたかも忘れ、カモを捕まえにかかった。

*

朝、同室のザジは今日もいないと密かな感謝を返しつつ、三人部屋を一人で享受できる事が唯一この学園の良いところだと千雨は思っていた。しかし、目覚めて数秒経てば昨日のことを思い出し陰鬱な気持ちになった。今日にでも呼び出しを食らうのだろう、と。

休もうかなどと頭の中では考えつつも身体はいつも通り学校に行く準備を進めていた。そして、部屋を出る頃には、どちらにしろ変わらないのだからいつも通り行動しようと学校に行く事になっていた。しかし、その考えはあまりに浅はかだったと朝のホームルームを終えた時に思いかえした。

「あ、長谷川さん。放課後、少し相談があるので残っていてください」

昨日に続き、陰気な表情を浮かべたネギがホームルーム終わりに発した一言だった。おそらく、学園からの呼び出しだと考えるも、ネギが出て行った瞬間、事態は一変した。

「ちょっと千雨さん、どういうことですか？」

「へっ？」

「委員長であるわたくしを差し置いてネギ先生と」

「ちょっと千雨ちゃん、ネギさんと相談ってどういうこと!？」

「これは意外なところから伏兵の登場か!？」

「ちゅちゃん、インタビューいい？」

「……はあ」

“こいつらあのガキの事好き過ぎだろう”と内心の考えをよそに、千雨はただ、溜息を漏らした。

*

放課後まで騒がれ、いい加減無視して帰ってやるうかとも思っていた千雨であったが、学園の印象を悪くする事は自身にプラスとは思えず、待つことにしていた。そして、迎えに来たネギに連れられた部屋にはアスナが待っていた。アスナがいるという事は学園側の呼び出しではないのか、と頭に過ぎるも同時に“なら神楽坂の名前もあの時上げておけよ。そうすりゃ、あんな騒がれずに済んだのに”と不満の方が大きかった。

「で、何の用だよ？」

特に他に誰が来るわけでもなく、ネギ・アスナ・カモが互いに目配せし、誰が話すべきか迷っている様子だったため千雨から口火を切った。その声は明らかに不機嫌さを帯びたものだった。学園からの呼び出しかと緊張してきたにも拘らず、その様子が見られなかったからだ。

「……えつとね。実は朝一で学園長先生に会いに行こうとしたんだけど、そこにエヴァンジェリンが来たというか……」

「待ち伏せされてたんすよ、絶対。でないとおんなタイミング来るわけないっすよ」

「あー、そうかもね。それで、学園長先生と高畑先生に告げたら生徒をまた襲うって」

「長谷川さん。……ボクはどうしたらいいんでしょうか？」

昨日から何度溜息を吐いたことか、と何度目かの溜息を吐いた千雨は目の前の二人に呆れる。エヴァが待ち伏せしたところで全く問題は無いのだ。元賞金首であるエヴァがいることを学園長たちが知らないはずは無く、それに対し何らかの対策をしているはずなのだから。

「もう一回いうから良く聞けよ。さっさと学園長に会いに行け。そんなことは学園が考えることでためえらが考える必要はねえんだよ」

「……そういえば、確かにそうっすね」

「……でも」

愚図る二人を千雨は無理矢理押し切り、部屋から出し、学園長室へと向かわせた。エヴァに眼を付けられたくないから名前を出さなくてくれと一応の口止めをしながら。

*

翌日からエヴァが授業に出るようになっていた。こっそり絞られたのか朝からネギを尋常でないような眼で睨みつけており、クラスに

来る度にネギは怯えながら帰って行った。さらに次の日にはエヴァがネギを睨みつける事が減ったが、それでも恨んでいることは丸わかりだった。

「カモくん、エヴァンジェリンさん怖いよ」

「そうっすね。すっごい睨んできてますもんね」

「……どうにか、仲良くなれないかなあ」

「それはアレなんじゃないスか。パートナーがいないから兄貴が舐められているんじゃないスか？」

授業を終えネギとカモは昨日から話題が、エヴァが唯怖いという内容へと変化していた。学園長室に赴き、エヴァに襲われた件を話したところ、学園長はすんなり受け入れ対策を打つ約束をした。ネギは内心、修行中止にならないか、一喝されないかなどビクついていたが、呆気なく話を通ったので驚いた。あまりにも簡単に話が済んだため、タカミチに送られ家に帰る間も逆に不安に苛まれていた。隣でアスナがタカミチに対して様々な話をするのも耳に入らなかった。

翌日、サボっていた授業にエヴァが来た事で良かったと胸を撫で下ろしたものの、教室の中に入ってみると睨みつけられビクビク怯えながら授業を終えた。まさか、睨まれるのが怖いとは言えるはずも無く、暫らく経てば何とかなるだろうとネギは黙殺したものの、その日からカモとの話題はそれ一色だった。尤も翌日には多少睨みつけられる時間が減ったことではらく我慢すれば、それも無くなるだろうと希望を持たせていた。

「……うん、パートナーか」

「そうっす。え〜と、この中じゃあ」

カモはネギのパートナー選びの為にクラス名簿を取り出し、一人の顔写真を指差した。

「み、宮崎さん!？」

「俺っちのセンサーがピンピンに反応しているっス」

*

ネギとカモがパートナー探しに精を出し結局アスナに止められる、そんなことをしている頃、千雨はのんびりと部屋で過ごしていた訳ではない。いつになったら呼び出されるのかとヤキモキしていたのだ。一応ネギたちには口止めし、話してはいないとは言われたものの、学園側に漏らすのは当然であるし、漏らさなくても今回の件を調査すれば知られるだろうと。

千雨は学園側に良い印象など欠片も持っていなかった。認識阻害結界を張り、魔法使いの街を作りながら大半は何も知らない一般人を住まわせる。そして、その中で好き勝手振る舞っているのだ、好印象など持っていない。千雨の主張は簡単だ。そんな結界を張るなら住み分ける、一般人と暮らしたいなら結界など張るなというものだ。

それは千雨自身が認識阻害結界の影響を受けにくく、見たままの疑問を口にしていた幼少期にそのために嘘つき呼ばわりされ、孤立したと思っているからに他ならない。今でも友人と呼べるほどの親しい人間がいなのはそのためなのだ。だから、自身に友人がたくさんおり、認識阻害結界の影響を皆と同様に受けていれば、主張も変わっていたかもしれないことは千雨自身自覚を持っていた。

「それにしても全く呼び出されねえな」
「ちう様、学園側に知られていないのじゃないですか？」
「もしくは、ちう様って素人に毛の生えた程度じゃないですか。あんまり問題視されていないのかも」
「知られてねえことに越した事はないけどさ」

*

一五日の夜、停電の頃まで平穏な時が麻帆良に流れていた。しかし、停電が始まった途端それは打ち破られることとなった。エヴァの魔力の復活である。そのことをすぐに感じる事が出来たのは数人であった。人間は本来魔力量など計る事は出来ないのだ。だからこそ、ネギはクラスに何人かいる魔法関係者を見つけられないともいえる。ただ、余りにも巨大な魔力だからこそ感じられる者がネギの近くにはいた。

「あ、兄貴。何か異様な魔力が感じられねえか!？」
「え？」
「もしかして、エヴァンジェリンのやつなんじゃ……」
「でも彼女は学園長に注意されて更生したはずだよ」
「睨みつけていたのは諦めていない証拠だったのかも知んないっすよ。どこかに避難すべきっす」
「……狙われているのはボク、だよな？」
「呪いを解くには兄貴の血が必要なんスよね？」
「……ここは二手に別れよう。ボクは麻帆良大橋方向に逃げる。だから、カモくんは助けを呼んできて」
「わかつたっす」

ネギとカモはここで二手に別れた。この時点でネギはタカミチや学園長などの援軍を期待していたのに対し、カモはその二人の居場所など知る由もないため居場所のハッキリしているアスナや千雨を想定しており差異があった。特に千雨に言えば学園の魔法関係者を呼ぶ事が出来るだろうとカモは期待していたのだ。

*

ドンドンドン、扉を叩く音で半ば眠りつつあった千雨は無理矢理起こされた。PCが使いにくく照明がない停電時に態々起きている理由は千雨にはなく、停電前から眠る支度をしており、既に布団に入っていたのだ。いつも夜にしていた事は出来るだけ早めに済ませ、出来なかったものは翌朝早起きして済ませれば良いと考えていた。

「うつせえな」

未だ半分程度頭が眠っている千雨は、停電の準備をしていなかった誰かが蝋燭かなにかを借りに来たのだろうとドアへと向かった。パジャマ姿で眼鏡だけ掛けた千雨は目をこすりながら、ドアを開けた。

「なんだよ。蝋燭か？」

「何言ってるのよ。大変なの」

「はあ？」

焦った形相と声のアスナに千雨は驚きの声を返す。けれども、覚醒には程遠い頭は停電というキーワードから離れることはなく、蝋燭以外でなにかあったかな、あとはエレベータにでも馬鹿が閉じ込められたか、などと呑気に考えていた。

「いいから来て」
「ちよー！！」

反応が鈍い千雨に対しアスナはネギの為に急がなくては、と千雨の手を取り走り出した。馬鹿力と馬鹿みたいな脚力のアスナに引つ張られ千雨は抵抗する事も話を聞く事も出来ないまま走る事となった。

*

「はあ、はあ」

「千雨ちゃん、もう少しだから頑張つて」

「私は……てめえらみたい……体力バカ……じゃ……ねえんだよ」

魔法使いなのだから空を飛べばいいものの、残念ながら千雨の杖は部屋に置いてあり、今は簡易的な指輪しかつけておらず、簡易的なモノであるため飛行には向いていなかった。一応、魔力で体力の底上げを行っているものの、魔力量が多くない千雨は貧乏性であるため最低限で済ませている。

走っている最中、カモから説明されたものの、走ることでいっぱいといった千雨はほとんど話を聞いていなかった。そのため、カモは半ばで諦め橋に誘導する事を優先した。橋のたもとに着き、そこで対峙しているエヴァ・茶々丸とネギを眼にしたが、既にネギが追い詰められている事を知り千雨を置いてアスナとカモは先行して行った。

「はあ……はあ……どういうこと……だよ」

手を離された事で呼吸を整え状況把握を行おうと立ち止まり、エヴァたちの方を注視していた。橋にいたエヴァをみて千雨は少々腰が引けた。封印か何かが解けたのだろう、その存在感が大きく増していた。普段であれば感じられない圧倒的な威圧感を感じたのだ。千雨は一瞬独りで逃げ出すという選択肢を思い描いたものの、寝覚めが悪いと切り捨てた。

「ありえねえ」

漸く呼吸が落ち着きだし、自身がどう動くかに考えを巡らしながら観察していた時にそれは起こった。既にネギは追い詰められ、普段持っていた大きな杖も無くなっており、絶体絶命という場面だった。そこに千雨を置いて行った二人が向かって行き、怖いもの知らずだと称賛に値するような、エヴァへの蹴りアスナがかましたのだ。そして、茶々丸は眼つぶしを、エヴァは蹴り飛ばされることで大きな隙を作った。

本来であれば魔法障壁で防がれるべき唯の蹴りに過ぎない事は千雨でも把握でき、エヴァも困惑の色を隠せていないことから同じことを考えているだろうことは察せられた。つまり、魔力もなくエヴァの魔法障壁を破ったのだと。力技で破ったのだとすれば化け物といえるレベルの力が必要であり、そうでなく何らかの特殊能力が必要だった。

「く……どこだ」

「申し訳ありません。見失いました」

エヴァたちの会話が聞こえる程度まで近づき、様子を見る事にした。

援軍の二人により助けだされたネギはエヴァたちを挟んで逆側に居る事は千雨からは確認できていた。

「おい、そこに居るのはわかっている。出てこい」

格好良く、腕を組み偉そうに、エヴァはそう声を掛けた。早くもネギたちが見つかったのか、と千雨は少し顔を出し確認するもそれはネギたちがいるのとは反対にいる、自身に対する呼びかけだった。

「ぼーや、さつさと出てこいー!!」

余裕の笑みを浮かべ千雨のいる柱を見ているエヴァに対しどうすべきか迷った。しかし、現状なら打てる手は無く、エヴァたちの前に不本意ながら身を晒すしかない事を千雨は結論付けた。

「……はあ、こっちじゃなくて逆だぜ」

「長谷川、どうしてここに!?!」

ややエヴァの勘違いに呆れる様子を見せつつ、千雨は柱の影から姿を現した。そして、それを見たエヴァは驚きの声を上げたのだった。

「貴様、魔法使いだったのか!?!」

封印状態ではなく、ある程度本来の力を取り戻しているエヴァには魔力の流れを見ることができ、そこから千雨が魔法使いである事を知るのには容易だった。そして、その声を上げた直後、エヴァたちの背後に光があふれた。ネギとアスナが仮契約を行ったのだった。

外伝 長谷川千雨の× 回？

「貴様、魔法使いだったのか!!」

千雨の魔力の流れからその事を知る事だけはエヴァには容易だった。しかし、何故ここに居るのが問題だった。学園所属の魔法使い・関係者として千雨を見た事は無い。しかし、美空のように、最近関係者になったという割には魔力の流れがスマートすぎた。つまり、学園長の直系で、自身を見張るために存在していたのではないのかと思えたのだ。で、あれば拙いと言いようがなかった。学園長からの警告を無視してエヴァはこの場にいるのだ、報告されては叶わないと間髪いれず仕掛けようとした。

しかし、その攻撃を行う前に背後で仮契約が行われたのである。魔力の光が発生した。そして、攻撃を途中で止めたものの、千雨の反応があまりにも逃げ腰なのを見て、自身の考察に疑義を呈した。

「長谷川。貴様、何者だ!？」

「いや、何者っていわれても」

答えない千雨に対しエヴァは傷めつけければ吐くか、と短絡的な結論にたどり着くも背後からの声に取りやめにした。

「さあ、エヴァンジェリン。私が来たからにはこれ以上好き勝手にさせないわよ。千雨ちゃんと私たちで挟み打ちよ」

「長谷川の姉さん、援軍はいつ頃到着するんスか？」

「いや、何言ってるんだ？」

自信満々に腰に手を当て現れたアスナは勝利が目前とばかりに仁王

立ちしていた。アスナからすれば千雨は魔法使いなのだから強く、だからこそ安心していた。そして、仮契約を行ったのは、もしものためとある意味タカミチのいる魔法使いの側への一歩といったところだった。

アスナの隣に立つネギの肩にいるカモが千雨に援軍の到着を聞いたのは千雨の戦力とエヴァの戦力を正確とは言い難いものの大雑把には把握していたためだった。そのため、ネギ・アスナ・千雨の三人で戦ってもエヴァ達に対して勝ち目が薄い事を理解していたのだ。時間稼ぎだけとはいえ、少しでも可能性を上げるためにアスナの仮契約を強硬に行ったのもそのためでもあった。だからこそ、学園の魔法使いであるとカモが思っている千雨に援軍を要請したのだ。

そして、千雨の答えにアスナ・カモ、そしてネギは呆気にとられる。どういうことだ、と。

「援軍要請していないんスか？」

「いや、だからそんなこと言われてないし、援軍なんて呼び方すらねえぞ」

「へ？」

ここに来て、困惑したのは千雨とカモだった。二人は幅の振れはあれど、どちらも敵・味方の戦力を認識していたからだ。

「うん？貴様らは何を言い争っているのだ！！」

「マスター、おそらくですが事情を察しました」

「どづいことだ？」

「千雨さんは学園に所属していない魔法使いと思われます。そして、お強くないでしょう。そのオコジヨとアスナさんはそのところを誤解していたのではないかと」

口論になっているところに茶々丸の助け船が出された。ネギたちに沈黙が走る中、茶々丸の言葉に一人千雨は頷き肯定の意思を周囲に示していた。

「ちよつと、待ちなさいよ。千雨ちゃん。それじゃあ、これでどうすんのよ」

「しらねえよ。てめえらが勝手に私を連れてきたんだろう」

「ヤバいつスよ、兄貴」

「……大丈夫だよ。ボクが頑張つてエヴァンジェリンさんを倒せばいいんだ」

「ハツハツハ、良く言った、ぼーや。茶々丸、長谷川を」
「了解しました」

*

茶々丸に千雨を任せたエヴァは空を飛んだ。アスナが空を飛べないだろうことから、である。魔法障壁を何故か破ったアスナを警戒しないほどエヴァは愚かではない。

「リク・ラクラ・ラックライラック 魔法の射手 氷の十七矢!!」

「ラ ラス・テルマ・スキルマギステル 魔法の射手 連弾・雷の十七矢!!」

「ちよつと降りて来なさいよー!!」

空から橋にいるネギたちに対し一方的に攻撃を行うエヴァ。一方、ネギは既にいつもの大きな杖はエヴァに捨てられたため、携帯していた初心者用の小さな杖で攻撃を撃ち落とすのが精一杯だった。何

度かの打ち合い、中には数本打ち漏らしアスナの方へ向かって行ったがそれがネギの限界だった。尤も、元気そうな声をアスナがあげているのは聞こえていたため、目の前のエヴァへと集中していた。

「フッフッフ、時間も時間だしな。そろそろ決着と行こうか。ぼーや」

何度か打ち合い、完全とは言い難いものの拮抗していた戦いに対しエヴァは終わらせることを宣言した。

「リク・ラクラ・ラックライラック 来たれ氷精 闇の精!!」

「ラ ラス・テルマ・スキルマギステル 来たれ雷精 風の精!!」

「闇を従え 吹雪け 常夜の氷雪」

「雷を纏いて 吹きすさべ 南洋の嵐」

「闇の吹雪!!!!」

「雷の暴風!!!!」

同種の魔法の打ち合い。しかし、実力が圧倒的に上なエヴァに叶うはずもなく、ネギは打ち負け、橋へと打ちつけられ気を失う。

「はぁ……はぁ……ぼーやにしては中々やるな」

エヴァなりの最高峰の称賛であったが、聞くものはいなかった。そして、勝利だとばかりに余裕の笑みを浮かべ、周囲を見渡す。しかし、そこでエヴァは驚きの声を上げることとなった。

「なっ!!!!」

倒れたネギに駆け寄ったアスナは生きていることを確認し、ホッと息を吐く。が、即頭を切り替え、今どうすればよいのかを考えるも思いつかない。空を飛んでいるエヴァを倒す方法などアスナにはないのだ。

「おい、神楽坂。いくぞ」

「へ？」

エヴァの従者・茶々丸と戦っていたはずの千雨がそこにはいた。確かにネギとエヴァが打ち合っていた時間は数分程度あり、決着がついたのかもしれないが、茶々丸のもの言いから千雨の援軍を期待していなかったのだ。しかし、助けに来たのだから、魔法使いである千雨ならエヴァに勝てるのだろうと、アスナは考えた。そして、千雨の言葉に従い立ち上がった。

「え？」

またもや、アスナは驚きの声を上げた。ネギを脇に抱えた千雨は街の方へと走って行ったのだ。それも橋に来るまでの速さとは較べものにならないものだった。一瞬遅れたもののアスナは千雨を追って走り出した。

「ちょ、ちょっと待ちなさい」

千雨はここで大きなミスを犯した。詳しいエヴァの事情を把握していなかった千雨は逃げる方向を誤ったのだ。街とは逆の外に向かえば呪いの関係上、エヴァは出ることが叶わず、追手が来る事も無く余裕で逃げる事が出来たのだ。しかし、そのことを知らない千雨は

助けが期待できる街の方向に逃げるといふ選択に迷いはなかった。

茶々丸にとって千雨は天敵と言えたかもしれない。相性があまりにも悪かった。千雨はそのアーティファクト『力の王笏』により電子精霊が使えるのだ。ロボットに過ぎない茶々丸に触れることさえできればそこから電子精霊を侵入させることなど容易い。しかし、支配できると考えていた千雨に対し、茶々丸は抗い拮抗状態に持ち込むことに成功していた。尤も身動きは出来なくなった以上、茶々丸を最低でも無力化するつもりだった千雨からすれば最低限度の目標は達したことになる。

が、計算外だったのは自身と余りにレベル、というより規模の違う魔法の打ち合いをエヴァとネギが行っていたことだった。横槍を入れるつもりであったが、規模が余りにも違い過ぎ全力で撃つても意味を為すように思えなかったのだ。結局、千雨の横槍を入れる間もなくネギが撃ち負けてしまった。エヴァの消耗もかなりのものであったのは見て取れたものの、それでも自身との差は大きいと見た千雨はネギを持ち去ったのだった。

*

「おい、神楽坂。盾になれ」

「何言ってるのよ!？」

「さっきの戦闘でも流れ矢受けても平気だっただろう?何故だかしらねえけど、魔法が効かないんだよ」

「た、確かに何故か消えちゃったけど」

「私はガキを抱えてるんだ。後ろから守ってくれ」

「……うー。わかったわよ」

行きと異なり魔力の節約など考えず、只管魔力を走ることのみ費やした千雨達は既に街についていた。しかし、残念ながらこの辺りは居住区ではないため人がいない。閑散とする中、空から魔法の矢が飛んでくるのを避け続け、逃げ続けていた。

「チィ、しまった」

追い詰められ傍らの建物に入ってみれば出口がそこしかない。引き返す事も出来ず、チエックメイトかと千雨の頭によぎった。同時に、今まで数限りない魔法の矢を撃ち続けてきたエヴァの魔力も尽きているのではないかという疑問も思いつく。しかし、多分に希望的観測を含んだ上でそうであったとしても百戦錬磨のエヴァ相手に万全の状態であつても挑む気のない千雨には勝利するということをシミユレーション出来なかった。

「千雨ちゃん、どうすんのよ？」

「……時間稼ぎしかないな」

結論はここにきての更なる時間稼ぎだった。今の今まで、橋でも、ここまでの行程においても騒ぎに騒いだにも拘らず援軍が来ないのはどうしてか、と疑問を持たざるを得ず、何らかの方法でそれ自体を防いでいるのではないかという結論に千雨は至った。つまり、かなりの時間を稼がなくてはならないのではないかと。

「マクダウエル、聞きたい事がある」

「……何だ？」

「どうしてネギ先生を狙うんだ？」

物陰に隠れた千雨はそこから外に居るエヴァへと問いかけた。これ

は千雨からすれば訳もわからず連れて来られ状況に流されここに至ってしまったが、当然の疑問だった。魔力が回復しているのだから、先日聞かされた“呪い”からは逃れられたのだろう、と。

「ふん。聞いていないのか。バカげた呪いを解くためだ」

「……………それでネギ先生を使つてどうやって解呪するんだ？」

「ぼーやの父親に呪いを掛けられたのでな。その縁者の血があれば解呪可能なのだ」

「女・子供は殺さないって聞いているんだけど？」

「殺しはせん」

「……………ちよつと相談させてくれ」

呪いを解く方法など浅学な千雨が知るはずもなく、そこに疑問を挟むつもりはなかった。ここで問題なのはネギが死なないということだった。つまり、死なないなら、引き渡して良いんじゃないか、というのが千雨の結論だったのだ。

「おい、神楽坂。死なねえんだから引き渡さないか？」

「…ダメよ。可哀想じゃない。それに嘘かも知れないし」

「嘘つてのは考えにくいな。けど、可哀想って言われても。この追いつめられた状況でどうにかできるのか？」

「うつ。……………千雨ちゃんにか無いの？」

「空を飛んでるだろ？あれをやられると神楽坂は手を出せないし、私は撃ち落とすほどの強力な魔法は無い上その魔力も残つて無い。可能性があるとするれば、神楽坂を盾に戦うことになるけど攻撃手段が無いに等しいから時間稼ぎにしても大した時間にならない」

「……………でも」

時間を稼ぐといつても先ほどまで来なかったものが急に現れるとは考えにくく、千雨としてはネギを引き渡すことがベターであると結

論付けた。アスナを盾にするとしてもエヴァは百戦錬磨、直ぐに対抗策を練り、無効化すると千雨には思っていた。であれば、後数分でどの道ネギが捕まるのであれば、多少心象を良くしておいた方が良かるうということだったのだ。

「おい、マクダウエル。私たちの安全とネギ先生の生命の保証をす
るなら、今から引き渡すが、どうだ？」

「ちよっと、千雨ちゃん」

「……よかるう。それと後で茶々丸を元に戻せよ」

*

アスナを説得することは無理だと踏んだ千雨はエヴァが交渉を打ち切る前に話を終えた。アスナは最後まで抵抗したが、アスナ自身も疲労困憊であり追い詰められていたことは理解しており、千雨に賛同はできなかったものの、その考えを理解できたことだった。残念ながら当事者であるネギは気絶しており、何度起こそうとしても起きる事は無かった。そして、その使い魔たる力モは橋から逃げ出した時から既にその姿は無くアスナの知るところではなかった。

「ふむ。漸く呪いから解放されるのだ！！」

エヴァはそう言い、ネギの首にゆっくりとその歯を突き立てようと口を近づけて行った。アスナは悔しさからか目線を外し、千雨はエヴァに注目していた。しかし、エヴァがネギの首に歯を突き立てる事は無かった。

「お、漸く停電が終わったようだな」

千雨は周囲の電灯が点き始めたため、そう口にした。それにすぐに反応しエヴァは表情を変え急ぎ首に歯を突き立て吸血しようとガブツと噛みつくも、ただ歯型が刻まれたただけだった。既に満月を過ぎ、力を失っていたエヴァは停電に乘じ落としていた魔力抑制結界が復活したため、ただの人間に過ぎない。つまり、吸血すらも行えない身体なのだ。

「……………くそっ!!」

そういつた事情を全く知らないアスナと千雨はエヴァが悔しがる姿を見せる理由が判らず困惑していた。ただ、そう時間を掛けずにエヴァから威圧感が消えた事を察した千雨は呪いが作用したのだろうと、やや正解に近い答えを導き出していた。

外伝 長谷川千雨の× 回？

結果、千雨はその後、ネギを連れ帰るアスナと別れ、千雨は麻帆良大橋へと戻り茶々丸を元に戻した。ただ茶々丸の体内で戦っていた電子精霊たちを回収しただけに過ぎなかったが。エヴァとネギの打ち合いの途中でやられたのだろう倒れていたカモを回収し、千雨は途中まで道が一緒のエヴァたちに同行していた。

「それにしても長谷川が魔法使いだったとはな」

「私だつて好きでなつたんじゃねえよ」

事実魔法使いでありたいと思った事など千雨は一度も無いのだ。使えるから使っているものの、“普通”の生活をさせてくれるなら早々に忘れたいたいと考えている。尤も、電子精霊たちに関しては愛着が湧いているため、見捨てる気になれるかは疑問があったが。

「ほう、ではどうしてなつたのだ？」

愉悦を滲ませ、エヴァは千雨に問いかける。近代では減少傾向にあるものの、選択権が無いということのエヴァは何度となく見てきたかかというエヴァ自身も様々な選択肢を選ぶことのできなかった人間の一人だった。どうせ大した不幸話ではないだろうと千雨に話をふつたに過ぎない。

「……去年の夏休み初日に悪魔に捕まっただよ。あの女、会っていきなり“僕と契約して魔法少女になつてよ”なんて言いやがつて……」

約半年前、騒がしいクラスメイトに会わなくて済むと、浮かれてい

た千雨に訪れた突然の出来事だった。今ではそこでのことは、トラウマとなり、夢でたまに見ることもある。その度に魘されるのだ。

「ちよつとまで、“悪魔”だと？それに麻帆良内でか？あと長谷川の魔力コントロールは半年程度でどうにかなるものとは思えんが」

悪魔という言葉にエヴァは過剰に反応したが、それは仕方のないことだった。悪魔という生き物は現にこの世界におり、そして彼らは人間に使役される者もいるが弱い人間の魂を食らうものもいる。特に取引によつて様々なことを為すが、結果的に人間の魂を喰われることが多いのだ。だから、エヴァはその心配をしたのだった。

そして、もうひとつ麻帆良内でのことであるというのは問題だった。誘拐されたにも拘らず問題にならなかったのは、何らかの措置をしていたということ。かなりの手練ということだった。

「質問が多いな……。悪魔つてのは悪魔のような女だったって意味だ。でも血も涙も無い奴だったからな。それと麻帆良内でのことだよ。尤も攫われた先は時間が異なるのか大体二年くらい居た気がするけど、夏休みの終わりには帰つて来れたよ」

千雨は最後取引を持ちかけられた事を覚えている。興味が無いと一蹴したものの、変わらぬ笑みで“したくなつたらいつでも言つてね。したいといえよ”と述べていたことを印象深く覚えていた。エヴァとネギのような事に巻き込まれ続けるのなら、その取引に現実味が帯びて来るが、あり得ないだろうと内心再度一蹴していた。

「その女は麻帆良内部の人間か？」

「しらねえよ」

最初は戯れに聞いてきていたエヴァが徐々に真剣に質問してくるのを感じ千雨は少々驚いていた。答えようのないことであつたし、興味を持つとは思っていなかったのだ。内部の人間かどうかなど、麻帆良の魔法使いのことをほとんど知らない千雨には答えようのない話だつた。

「その女はどうして長谷川を攫つたんだ？それにその女について何か知らないか？」

「しらねえけど、愉快犯だと思つぜ。魔法使いつてのは暇人なんだから」

暇人としか言いようがなかった。千雨を攫い鍛える理由など思いもつかないのだ。それは言動からも窺い知ることが出来、そう千雨は信じていた。だからこそ、最初に出会つた魔法使いがそうだったからこそ、魔法使い全体に同様の印象を覚えていた。寿命や外見まである程度なら好きに出来るかと豪語していたのだから魔法使いというものはそのようなものだろうと。

そのため、一時クラスメイトの殆どを疑つていた。外見を操れる以上、同級生とは限らないのだ。年齢に見合わない外見をしているものの多いクラスだったため、その疑いに拍車を掛けた。その過程でエヴァのことを元賞金首だと知つたのだつた。

最初、ネギに関しても見た目に反し大人なのだろうと趣味の悪さに反吐が出そうになつた。態々、外見年齢を操り子供の姿でやってきたのだと考えたのだ。けれど、直ぐにその誤解は解け、その幼稚な言動と行動から逆に子供を担任にすることに苛立ちを覚えるようになっていった。

「そいつは本当に女だつたか？」

「女だったぜ。少なくとも……身体はよ。でも魔法使いつてのは外見を偽れるんだから、あんまり意味は無いと思うけど」

投げやりな千雨の答えに苛立ちを覚えながらもその答えにエヴァは一人の魔法使いを頭に思い浮かべた。アルビレオ・イマ、紅き翼に所属し年齢も不明な彼の性悪な魔法使いであればその程度やりかねない、とエヴァは考えたのだ。

確かに実力差が有り過ぎるであろう千雨を騙すことなど些細なことであり、外見などいくらでも偽れる、とエヴァは同意した。だから、アルが千雨に魔法を教えた、つまり昨年の夏に麻帆良内にアルがいた可能性について、外見が女だったからといって低下する事は無かった。彼の魔法使いであれば自身の呪いを解けるのではないかとエヴァは考えていたのだ。

「そういえば、マクダウエルは呪い、どうするんだ？」

次の満月まで吸血は出来ない由を聞かされたものの、千雨としては気になるところだった。面倒事は一度で御免ということなのだ。次があるなら巻き込まれない様にしたかったのだ。命の取引のないようなある種の遊びなのだから参加する気は毛頭なかったのだ。ネギに関しても血液くらい提供してやればいいのに、くらいに思っていた。

「……ああ。停電の回復が余りにもタイミングが良過ぎた。つまりそういうことだな」
「なるほど」

千載一遇のチャンス、その機会を最高のタイミングで潰されたのだ。それはあまりにも出来過ぎた話だったとエヴァは考えていた。しかし、同時に誰かの手によって為されたとは思っていない。運が無い

とただそう思っているのだ。つまり、運が無い自身に次のチャンスがあるとは思えなかったのだ。

一方、千雨はエヴァの言葉は監視下にあつた事を意味すると解釈した。つまり、何者かが千雨達の奮闘を肴に酒でも飲み交わしながら観戦し、エヴァを解放しないように停電を回復させたということなのだろうと。馬の目の前に決して届かないようにニンジンをつら下げ、走らせるようなものではないかと、エヴァのこととはいえ千雨は憤慨する。それは昨年の夏休みに自身が散々味合わされたことであり、同情を覚えた。学園どころか魔法使いに対し悪印象しか持っていない千雨からすれば当然の解釈だった。

*

翌日、アスナとネギの間に微妙な空気が流れていた。いくら最終的に千雨に強行されたとはいえアスナとしてはネギを見捨てたことに変わりなく正直にその話をしたものの、どう声を掛ければ良いか解らなかつたのだ。

アスナからの謝罪の言葉は逆に自らの至らなさを恥じいつたネギからの謝罪で返された。その微妙な空気を打ち破つたのはこのかであった。流石に同室であつても魔法関連の話をつこのかの前でするわけにはいかず、そのまま有耶無耶になつたのだった。そして、放課後もう一度話をしようとカフェにやってきたのだった。

「あ、エヴァンジェリンさん」

他に席の空きが無く、エヴァと茶々丸、アスナとネギとカモの相席という形になつた。互いに気まずく声を上げる事は無かつたが、思

いきつたネギから話を切り出した。

「あのう、エヴァンジェリンさん。父さんのこと何かご存知ないですか？」

ネギからすればずっと聞きたかったことだった。呪いを掛けたのがナギであると知った時からであったが、エヴァが怖く中々聞く勇気を持ってなかったのだ。今がチャンスと聞くことにしたのだ。

「ふん。あ奴のことなどしらん。十年前に死んで」

「待って下さい。僕は六年前に父さんと会った事が有るんです」

「……なんだと」

「六年前のあの日僕は父さんに杖を」

ネギの話を慎重に聞いていたエヴァは嘘を吐いているようには見えないとネギの事を信じることにした。

「手掛かりだったな。京都に行ってみるがいい」

ネギに探させるのも一興かとエヴァはネギにヒントを与えるのだった。

*

ネギとアスナの微妙な関係に終止符を打つにはそれから四日ほどを要した。最終的に空気を察したこのかがアスナの誕生日にかこつけて仲直りをさせたのだ。カモも動いていたが、残念ながら二人の微妙な空気を打ち破るには至らなかったのだ。

しかし、もう一つの、ネギと千雨の関係は冷えたままだった。

「あ、千雨さん。昨日はありがとうございました」

「うん？ああ」

停電の翌日、廊下ですれ違った際、立ち止まりそう告げたネギに対し、殆ど立ち止まる事も無く、そして返事もおざなりにその場を去っていったのだ。しかし、これは千雨からすればいつものこと。面倒事をもつてやってくるネギに敬意を払う気も無く、あまり近づきたくない人間なのだ。ネギが赴任以来、その態度に変化が無いだけだったのだ。傍にアスナが居れば“いつものことよ”と付き合いの悪い千雨のフォローを入れるところだったが、傍にいたのはカモだけだった。

だから、ネギはストレートにその意味を受け取った。赴任以来四月まではあまり千雨に注意を払っていなかったためその態度に気付かず、エヴァの時は一方的にネギの方から迫って周囲が見えていなかったため千雨の態度を気にもしなかったのだ。つまり、冷たくあしらわれたのは初めてであり、明確な拒絶だと受け取ったのだ。

また、カモもアスナの時とは異なり、千雨との間を修復させようとアドバイスする気はなかった。気絶していてその場に居合わせなかったものの、ネギをエヴァに売った主犯なのだ。しかも、アスナは謝罪してきたのに謝りもせず冷たい態度をとる千雨に怒りこそすれ仲直りする必要も感じなかった。

ネギが怒らず、カモが怒ったのはネギに対する価値の違いだった。ネギ自身は内向的な人間であるため、自身の価値を低く見て、追い詰められた場面において自身を差し出すのもやむを得ないという考えに至っており、千雨の判断を追認していた。しかし、カモからす

ればネギは恩人であり、漢である兄貴なのだ。そのネギを売るなど到底考えられず、認められない考え方だったのだ。

*

「ネギ先生は昨日のこと何も言わんかったよ」

「ほう」

「ふむ。じゃからといって警告を無視したエヴァを無罪放免する気はないがのう」

千雨の判断をエヴァは感謝していた。あのとき、時間が差し迫っていた事もあり、既に焦り出していたエヴァは乱暴な手段を辞さないつもりだったのだ。つまり、極端に言えば建物ごと壊し生き埋めにする事である。魔法が効かないアスナを盾にされる以上、他の手段による攻撃しか意味が無く、それは物理攻撃であった。しかし、近接でやり合うほどエヴァは二人を舐めてはおらず、だからこそ建物を壊すという方法も脳裏には浮かんでいたのだ。最低でもアスナを動けなくすれば千雨は降伏するだろうと読んでいた。

しかし、万が一の時もあるのだ。出来る限り気を付けるつもりであったが、大怪我や死に至る可能性もあった。その意味で、それをを行う前に千雨が判断してくれたことに感謝していたのだ。尤もそのことを千雨は考えていたかは別であったし、あくまで結果によるもの。それでも、エヴァはそれを小さいながらも借りだと考えていた。

「ふむ。それで長谷川くんじゃったか。別に放っておけばいいじゃろ。エヴァの報告では特に魔法をバラそうという考えもないようじやし、危険な思想の持ち主とは思えんしな」

旧世界にも魔法使いが多数いる現在、特に把握しようとはしていなかった。学園中心に東日本を担当する関東魔法協会とて全員を把握しているわけではなく、また互助組織に過ぎず、参加を強制しているわけではないのだ。尤もそれが大きな力を持っていたり、危険思想などの持ち主であれば別であったが、特に際立ったもののない千雨に参加を強制する必要を感じなかった。

「わかった。私から言っておこう」

エヴァは千雨の行為を過少に報告し、冴えない魔法使いである事を印象つけることに成功していた。そして、学園長からその答えを引き出すことにも。これで貸し借りなしだからな、とエヴァは内心勝手に結論付けていた。尤も過少に報告しなくとも千雨であれば何度か呼び出され面倒な話をする程度で済んだ事は間違いないだろうとエヴァは踏んでいた。だから、平穏な生活を望む千雨にそういった面倒事を煩わせないという借りの返し方なのだった。

班員も微妙だということに千雨は今さらながら気付いた。千鶴・夏美は面倒見がいいものの面倒事を引つ張ってくるタイプではないため安心できるが、残り二人の委員長と朝倉が問題だった。シヨタコンの委員長・あやかはトラブルを運んで来そうなネギを連れて来そうであったし、トラブルに自ら首を突っ込みそうな“麻帆良のパラッチ”などと呼ばれる事もある朝倉もいるのだ。

新幹線でエヴァ始め三人の不参加によりザジが同班になったが、変な奴というのが千雨の評価だったが面倒事を持つてくることはないと考えていた。今さらながらに班員の選定を失敗したことに千雨は気付いた。尤も、千雨に選択の余地はあまりなかったが。

千雨がやや未来のことを考えていたとき、車両内ではカエルが飛び交っていた。現実逃避ともいえる今後の考えを纏めていた千雨は、目の前の現実から目を逸らし、一人外の風景を眺めていたのだった。ただ只管、“話しかけて来るな”と内心唱え続けていたお陰か、ネギやカモ、アスナに話しかけられることなく、旅館に到着した。その間に落とし穴や滝の水が酒に代わっていたことなど、言ってみれば厄介事が巻き起こっていたがお気楽なクラスメイト達は気にした風でもなかった。

旅館でも千雨は出来る限りネギたちの眼に着かないようにとこそそこそと、出来る限り部屋から出ないようにと過ごしていた。しかし、その平穏も夜に終わりを告げることと為るのだった。早い時間にも拘らず、千雨は布団に入り寝ようとしていたのだ。そこにアスナがズスカと押し入ってきたのだ。

「入るわよ。千雨ちゃんいる？」

「あら、アスナさんどうなさったのですか」

悪魔の声だ。千雨はそう思いつつも、もしかしたら寝ていれば帰ってくれるかもしれない、と布団を更に固く握りしめた。

*

千雨からすれば鉄壁の布団も悪魔であるアスナには簡単に突破されることとなった。“千雨ちゃん借りるわね”などと簡単に言われ部屋から千雨は連行された。その間、止める人間がいなかったのは自身の人望の無さなのか、それとも常態化されたことなのか、とクラスメイトに対しやるせない思いを千雨は抱いた。

「で、なんだよ？」

不機嫌さを前面に押し出した千雨は連れて行かれた先のロビーで待っていたネギ・刹那・カモにそう問いかけた。カモだけは“ケツ、偉そうに”などと小声で言っていたが他二人ネギと刹那は申し訳なさそうな顔で口を開いた。

「まとめると、親書と近衛が狙われていて、相手は関西呪術協会ってことか」

「このかさんは巻き込まれただけで親書狙いだと……」

冗長ともいえた少し長めの説明を聞き、千雨はそう要約した。だったら結論は一つだと千雨は考えた。

「協力する気はない。お前らで勝手にやれ」

すなわち、拒否である。当たり前のようにそう告げると、千雨は立ち上がり部屋に戻ろうとした。しかし、アスナに腕を掴まれ引きとめられる。

「千雨ちゃん、待ちなさいよ。協力してくれてもいいじゃない！」
「よくねえよ」

カエルと酒と落とし穴、そして風呂場でのこのか誘拐未遂。刹那は“嫌がらせ”というレベルだというのが千雨の認識は異なった。先の三つは警告で、後者が目的なのではないのかと。一般人にバレないようにというのが暗黙の了解としてある、と千雨は聞いており、であれば、最初の三つは一般人を“遠ざける”という警告だと考えたのだ。

前提として千雨は先の停電、それ以前からも学園に不信感を抱いていた。それは認識阻害結界のためであったが、停電の件で更にそれが増した。停電が回復したタイミング、目立つ橋で巨大魔力の打ち合いをやったにも拘らず現れなかった援軍。その二点から千雨は監視があつたと見ていた。酒の肴に観覧とまでは言わないまでも、暇を持って余した魔法使いの遊びだったのではないかとさえ思っていたのだ。

そんな不信感を持った千雨からすれば今回の件も偏った眼で見ざるを得ない。まず、“親書”に関しては挑発ではないのか、と考えたのだ。

千雨なりに考えれば親書の役割は二種類。機密を含むなどの内容と、渡すという行為を重視するパフォーマンス的なものだった。ひよっここで子供に過ぎないネギに機密を渡すはずが無いと前者の可能性を

千雨は切り捨てた。そして、後者だとすれば如何なる意味があるのかと考えたのだ。

ネギは本人に千雨が聞いたところ英雄・ナギの子。そして、ナギの戦友が関西呪術協会の長をしており、戦友の子が親書を届けに行くのだ。けれども、千雨がまほネットで調べたところ、ネギの素性に関して全く知られていなかった。ナギに子がいることすら知られていない。

それはつまり、世間的にみれば十歳の無名の子供が親書を届けるということなのだ。関東魔法協会は関西呪術協会に対して子供の使い程度の重さしか置いていないという意味としか受け取れない。すなわち、挑発であると千雨は踏んだのだ。

そして、その挑発行為の為にやってくるネギが一般人に紛れてくるのだ。安全のための盾として、また先に手を出した際、問題にし易いように一般人を連れているようにしか受け取れない。関西呪術協会側はだからこそわかりやすい形で“警告”を行ったのではないだろうか。

このかに関しては微妙なものだった。千雨が調べたところ関西呪術協会の長の娘で学園長の孫なのだ。人質に取られない様に関西呪術協会が回収に来たのか、それとも逆なのかもわからない。ただ、学園長がその事を危惧していたのは刹那がついていることから明白なのだ。挑発を受け入れ、断交するのだから回収するためか人質にするためかのどちらかだろうと推測したのだ。

更に付け加えれば、親書とこのかは餌ではないかと千雨は考えていた。学園長か誰かによる釣りが行われているのではないかと。一般人に手を出させ、それを大義名分に叩き潰す、そんな思惑があるの

ではないかと。

「どうして、協力してくれないのよ」

「私は必要ないからだよ。クラスみんなを守りたいんだろ？ だったら原因を取り除けばいいんだ」

「じゃあ、どうやってそれをするのよ？」

「親書を持ったネギ先生が近衛を連れ帰ればいいだろ」

「このかは関係ないでしょ」

「狙われているから桜咲が護衛してんだろ！！」

千雨はそう言い終わるとアスナの手を振りほどき、その場から去った。

*

「あんな奴のいうこうとなんて気にすること無いっスよ」

千雨が立ち去った後、嫌な沈黙が流れる中、カモがそう口を開いた。今回の件に関してカモと千雨は見解を異にしていた。カモは親書の中身が大事だと思っているのだ。それはネギがひよっこのただの子供ではないからだった。カモからすれば学園有数の魔法使いなのだ。

この認識は多少臆目が入っているものの妥当なものだった。実戦経験は少ないものの、それを補って余りある巨大な魔力をネギが持っているためだ。何よりそれは百戦錬磨のエヴァと敗れたとはいえ、戦り合えたことから窺い知ることができる。

エヴァとこのことを見て知っていたにも拘らず、ネギをひよっこと

千雨が決めつけたのには理由がある。千雨は今まで、ちゃんと会った魔法使いは三人しかいないのだ。エヴァにネギ、そしてもう一人も多大な魔力量を持っており、魔法使いとはそういうものなのだと思うっていたのだ。

ネギとエヴァが戦えたのも、エヴァが実力を出し切らなかつたのか、呪いが完全には解けていなかったのだろうと推測していた。そして、千雨自身実戦経験もなく、あの戦闘がどれほどのものか知る由もない。

魔法使いの基準を高く設定しているために、他の学園の魔法使いはもっと強いのだろうと純粹に思っていたのだ。けれども、巨大な魔力を操るということは同時に堅い魔法障壁を張ることが出来、実際はネギを倒せる学園の人間は限られる。

狙われる原因であろう親書の排除に力モは反対だった。このかに関してもあくまで嫌がらせの延長上でネギや関西呪術協会から裏切り者と思われているという刹那の傍にいたからに過ぎないと考えていたのだ。狙いは親書であり、お風呂で式神にこのかが連れて行かれそうになったのも嫌がらせの域を出ないのだと見ていたのだ。

「兄貴、大丈夫だって。俺っちたちが守ればいいんだよ」

「……うん、そうかな」

「そうだけ。それに西と東を仲良くするためにやらなきゃいけないんだろ」

「うん、そうだね」

学園長から妨害があるかもしれないと聞かされていたからこそ、妨害の一環だと見ていた。尤も神鳴流の使い手である刹那と西洋魔術師であるネギの目の前で低級式神のみで誘拐しようとしたとしても

それを本気と取るのは難しい。確実に防がれることは目に見えるのだからあくまで妨害の一環と見る方が妥当だと力毛は考えていた。そして、そのことはネギも刹那もアスナも同意であり、千雨の心配のし過ぎであると考えたのである。

「折角の修学旅行だし、このかを帰らせちゃうのも嫌だしね。私も協力してあげるわよ」

「あ、ありがとうございます。神楽坂さん」

「いって、このかは友達だし、友達の友達も友達だからね」

「よし、決まりですね。じゃあ、僕たちでクラスのみんなを関西呪術協会から守りましょう!!」

アスナの言葉、そしてネギの能天気ともいえる声に刹那は顔を赤らめる。気恥しくも嬉しかったのだ。このかを守る、ただそれだけの為に強くなった。しかし、魔法の事を知られない様にと遠くから見守るのみで、一番の友達だったこのかとも仲良く出来なかった。

また、それ以外の事は些事とクラスの人間とも馴染まずにいた。学園の警備も結果的にこのかを守る一助になれると参加しているものの、形は外部参加者に近く殆どが同室の真名と組んでいた。そのため他の魔法関係者をあまり知らなかったし、真名はビジネスだという考えを持っており、あくまで仕事仲間に過ぎなかった。

だから、“友達の友達も友達”という論法ではあったものの、アスナの言葉は嬉しかったのだ。そして、ネギの言葉は仕事というよりも仲間のようなものを感じさせて刹那に気恥しくも喜ばしいものと捉えさせていた。

「敵は今夜もまた来るかも知れません。早速、僕は外に見回りに行つてきます!!」

千雨の考えは心配のし過ぎだとは思いつつも、このかにはアスナに突きつきりについてもらい、刹那は旅館内を警備することにした。外回りというのは人数的な意味であまり好ましく無いようにも思えたが、侵入しようとする敵が発見できる可能性もあり、ネギのやる気をそぐ必要もないと刹那は見送った。

このかの魔力含有量はネギよりも巨大であるといわれ、その為に魔物に好かれるたちである。刹那が付いているのはそのためであり、対関西呪術協会用ではないのだ。しかし同時に、刹那は関西呪術協会から裏切り者であり、このかとは別に狙われる要素を持っていた。低級式神の使用というこのかへの接触方法はあまりにも稚拙であり、嫌がらせの域を出ない。総合すれば、裏切り者とされている自身への嫌がらせかもしくは親書の件での嫌がらせなのだろうと刹那は受け取っていたのだった。

しかし、そのことが誤りであったことを刹那は一時間もしないうちに知ることとなる。旅館への侵入を許し、このかの誘拐を易々と許してしまったのだ。それも発見したのは偶然に過ぎず、もうしばらく時間が経っていれば追跡は困難を極めたと刹那は推測していた。だから、考えを改める必要があることを自身に戒めるのだった。

外伝 長谷川千雨の× 回？

「ふあゝ」

千雨は欠伸をしながら、数時間前と同じ状況に内心陰鬱な思いを抱えていた。千雨は探知に優れた魔法使いでもなければ気配を察せる武道家でもない。また、睡眠中に他の部屋で少々騒がれた程度で起きるほど鋭敏な神経の持ち主でもなかった。

千雨は話を終えたとばかりにネギたちの元から去った後、部屋に戻り早々に眠った。修学旅行だから枕投げだ、夜更かしだ、などといった行為に少しの憧れを持っていたものの、キャラでないし相手もいなかったのだ。また、ネギが絡まなければまともな委員長であるあやかが同室である以上、そういった事は無いと眠りに着いたのだ。現にそういったことは行われず、千雨が眠ってから時を経ず、千雨の班員達は寝た。

しかし、夜遅く突然叩き起こされ、眠い目を擦りながらロビーまで連れて来られたのだった。相手は刹那であり、またかと思いつつ連れて行かれた先ではアスナはいないものの、同じメンバーが待っていた。千雨としては不満を覚えざるを得ない。そして、聞かされた話はこのかが誘拐され何とか取り戻した話。このかに対しては何とか誤魔化し、今はアスナが見張っているものの、どうすればよいのかという相談だった。

「関西呪術協会の長は近衛の親なんだろ。誘拐犯に引き渡せば？」

投げやりに千雨はそう告げた。何も通るとは思っていなかったものの、さっさと終わらせたい千雨からすれば当然の提案だった。尤も、

話を聞く限りでは関西呪術協会そのものというより、誘拐犯はその中でも長への反対派。むしろ害されるのは目に見えている。

「ダメに決まっています。やつらはこのちゃんを操り人形にするつもりで」

刹那は興奮した様子で千雨を睨みつけそうだった。しかし、最後の方は興奮のあまり言葉になっていなかったものの、否定意見だという事だけは知れた。尤も、否定される事を千雨はわかって言っていたが。

「真面目な話、昨日言っただろ？近衛と親書を学園にさっさと帰せばいいんだよ」

「……しかし」

「桜咲、現状認識できてんのか？いくらなんでもクラス全員を守るつてのは無理だろ。相手は別に近衛でなくてもその辺の、例えば本屋でも綾瀬でも誘拐すれば親書と交換できるだろうし、他にも人質とればなんともなるんじゃないかねえか？」

魔法使いに悪意ある千雨からすれば当然の考えだった。一般人に手を出さないなどという言葉は軽い事ものだということは、既に新幹線でのカエル騒動や音羽の滝の落とし穴や酒の件でわかっていると千雨は考えていた。つまり、あれらが警告だったとして、何ら手を打っていない以上、一般人に手を出されることも考慮に入れるべきだと。

「……そんなことはしない、と」

「言いきれんのかよ。裏の仕事を請け負う組織なんだから、手慣れたものだろ？」

「……………」

考えてもみなかったと刹那は沈黙する。“裏”の仕事が誘拐や暗殺などだと千雨は想像していた。で、あれば関東魔法協会も、つまり学園も似たような事をしているのだろうな、と嫌な想像を千雨は働かせていた。

「だけど、長谷川さん。そんな酷い事をするとは……」

「けど桜咲が言っただろ。裏の仕事を請け負うってさ。まあ、私も現実にどうなんだかしらねえから想像の話だけだよ」

「桜咲さん、そんなことないですよね!？」

「………ないと言い切れないです」

否定を欲していたネギに対し沈痛な面持ちで刹那は千雨の話を肯定した。刹那自身実際にそういう場面に遭遇した訳ではなかったが、噂で裏の仕事の話を聞いたことがあったのだ。だから、断言する事は出来なかった。

「じゃあ、僕はどうしたら……」

「長谷川の姉さん。他になにか修学旅行も続けられる、そんな方法はねえんでスか？」

カモとしてはネギの望みを叶えたかった。つまり、誘拐も妨害も防ぎ、親書を届け、修学旅行もみんなが楽しむということだった。

「方法ね。私は正直、早々に修学旅行中止して帰るべきだと思うんだけどな。けど有るとすれば戦力を増やすことだろうな」

「戦力つスか？」

「私から提案したことにすると拙いんだけど」

千雨は前置きを行った。エヴァから学園が“無害”だから放置する

という決定を聞いていた千雨はあまり提案したくない内容だったのだ。

「桜咲、関係者はここにもいないのか？そいつらに協力を求めるのが一つ。もう一つは関係者以外の戦力になりそうな奴を招集だな。もちろん、学園からも援軍を呼ぶ前提だけだよ」

魔法使い・関係者がそう多くはここにいないだろうと千雨は思っていたのだから、強者として、関係者で無い人間も集めるという判断に至った。それには魔法バレを促進するようなことであり、その提案自体が学園に“無害”でないと判断される可能性を慮っていたのだ。

「……それは勿論、学園に援軍を求めます。ですが、今は深夜という事もあって連絡がつかないんです」

このかを取り返した後、宥め寝かし、刹那が千雨を呼びに行っていた間、学園長とタカミチに連絡を取ろうとしたが通じなかった。学園長への連絡手段はあくまで個人というより学園対してしかなく、その為深夜に誰かが出るわけがなかった。そして、タカミチは海外におり、連絡が取れなかったのだ。

「それは仕方ねえけど、侵入者を発見したのは偶然だったんだろ？だったら、今の状況はいつ侵入されてもおかしくないってことだ。どちらにしろ、援軍が来る前に補強しとく必要があるだろ。で、桜咲誰がいるんだ？」

「私も外部協力者という立場なので、あまり詳しくは……。ただ、……龍宮とは良く組みます」

刹那は尋ねられ迷いながら真名の名前を挙げた。本来、学園に所属

していない千雨に関係者のことを教えるのは躊躇われたのだが、非常時だと思いきり答えたのだった。尤も、それは外部協力者である刹那も似たようなものであまり関係者のことを教えられていない。外部協力者というのは、半ばこのか専属でたまにしか警備に参加していなかったためである。そして、名前の拳がった真名も刹那とは別の意味での外部協力者だった。真名は傭兵であり雇用という形を取っていたためである。

「え、龍宮さんが!？」

「あとの麻帆良の武道四天王はどうなんだ？」

「いえ、私の知る限り関係者ではないです」

「となると、後は超と葉加瀬か」

「そ、そうなんですか？」

ネギからすれば寝耳に水。クラスメイトに多数の関係者がいることに驚いたのだ。エヴァと茶々丸を含めればクラスの四分の一弱が関係者だったのだ。驚くのも無理は無い。

「しらねえけど、茶々丸を作ったのはあいつらだろ？ だったら、関係するだろう。それに“麻帆良の最強頭脳”がいれば私より良い策を用意してくれるだろう」

「確かに、それはあるかもしれませんが……」

「じゃあ、龍宮・古菲・長瀬・超・葉加瀬がいりゃなんとかかなんだろ。で、どうするんだ？」

名前を挙げながらクラスの面子のおかしさに千雨は内心頭を抱えていた。麻帆良の武道四天王などと称される麻帆良有数の強者四人に、麻帆良の最強頭脳と呼ばれる超に、超には劣るものの並び称されることもある葉加瀬。千雨からすれば異常な人間がこんなにもクラスメイトに集まっているのだ。他にもロボットに吸血鬼と、いわくあ

る者しかいないことを鑑みれば、自身も入学当初にそちら側の人間と言えたのだろうかと思鬱な気分になった。

「え、え」と

「待って下さい」

自身で決断するわけにはいかない千雨はネギへと決断を迫るが、魔法バレをするということにネギは迷いを生じさせる。もちろん、危機が目の前に迫っていれば選ぶことに迷いはないだろうが、今は撃退に成功した後なのだ。この戦力でいけるかも、とも思っていたのだ。そこに刹那から待ったが掛った。

「何だよ？」

無然と千雨は刹那に問いかける。唯でさえ、クラスの異常さを改めて思い出したことで気分が落ち込んでいたのだ。できることなら、このまま何も聞かなかったことにして帰りたいという当初の目標は兎も角、今はさっさと身の危険を回避する術を考えなくてはいけないのだった。

先に、のどかと夕映を具体例に挙げたものの、魔法使いとしては未熟な自身など格好の人質ではないかということに気付いているのだ。だからこそ、他のクラスメイト同様自身の安全のためにも戦力の増強は急務だったのだ。それに待ったを掛ける刹那の言葉に無然とするのは仕方なかった。

「朝まで待つべきではないでしょうか？学園長に一度判断を仰ぐべきです。先の一件で敵は一時撤退しているので、流石に朝までの襲撃はないものと思われませう」

「そうっすね。性急にことを進めるのはよくないっす」

カモはネギ同様、クラスメイトに関係者が多数いることに驚いていた。そして、内心ネギとの仮契約候補に想いを馳せつつも、刹那の言葉に同意した。刹那同様にあちらの戦力は潜入の得意な呪符使い一人と神鳴流の剣士一人の計二人とみて、一度倒した以上朝まで安全だろうと考えていたのだ。

戦力が他にいない理由としては、人払いを済ませた京都駅に剣士一人しか増援が現れなかったためだった。人払いをしていた以上、そこで戦う予定であった事を現しており、だからこそ最大戦力だったと踏んでいた。

そして、もう一つ刹那にない理由があり、それはネギが決断しなければならなかったことだった。例えば、責任者が別であればカモは賛同していたかもしれないのだ。しかし今は、千雨は部外者、刹那は外部協力者、アスナは従者と責任者は明らかにネギであった。この場合、何かあればネギの責任と為る可能性が高いのだ。

魔法バレもそうだったが、重傷を負う可能性もあり、その場合ネギの修行が中止と為る可能性も想定できた。敬愛する兄貴であるネギにそういった事になってほしくなかったと同時に、犯罪者である自身がここにいられるのも“立派な魔法使い”候補生の使い魔だからだという事をカモは忘れてはいなかった。

「ま、私は半分部外者だから好きにすればいいんじゃないか。妥協案としては龍宮を呼んで、先生と桜咲と三人交代で朝まで見回りつてとこか？」

刹那・カモ同様、敵戦力は二人だと千雨も見ており、またその二人がやられた以上、朝まで来る事は無いだろうとは考えていた。しか

し同時に、万が一の可能性を常に考えなくてはならないと思っ
ていた。

戦力が二人だと見せかけていただけかもしれない、また他にも撤退ル
ートがあり、そちらで待機していたのかもしれない。もしくは戦力
の逐次投入の愚を犯す相手なのかもしれない。だから、結論はわか
らない、だった。わからないのだから出来る限りの事をおこ
う、ということが千雨の答えだったのだ。

「長谷川の姉さんは何をするんですか？」

「あんな、オコジヨ。私は一般人に毛の生えた程度の力しかねえん
だよ。だから、見回りなんてしたところで大した役には立たねえし、
気付かない可能性の方が高えよ」

ネギが七年の魔法学校を五年で卒業したが、千雨は実質魔法に関し
ては二年程度しか学んでいなかった。そして、ネギのように特段の
才能が有るわけでも一所懸命に努力したわけでもない。只管、暇つ
ぶしだと言って覚えさせられたに過ぎない。

残念ながら、教師の才能が有ったのかそれとも一対一だったからか、
千雨は魔法学校で教えられる二つの攻撃用魔法“魔法の射手”“武
装解除”、他にも身体強化や記憶を消す魔法など基本的な魔法は一
通り覚えさせられた。

だからといって、魔法学校卒業生程度の強さが有るといえばそうで
はない。まともな戦闘訓練も行っていないければ、魔力量も一段と低
いのだ。魔力量に関しては、魔法学校に行くような魔法を積極的に
学ぼうとする者は概して魔力量が高く、魔法使いの中で千雨の魔力
量はかなり低い。つまり、一般人に毛の生えた程度は言い過ぎにし
ても、ネギや刹那・真名に較べれば役に立たないのは事実だった。

「そうなんですか!？」

刹那は千雨の自己申告に驚きの声を挙げた。刹那も千雨の身体の動きから身体能力が優れていないことはわかっていた。しかし、戦士系ではなく後衛タイプなのだろうと思っただけに過ぎない。刹那の持つ西洋魔法使いのイメージとしては後衛に専念し真名のような優れた前衛をもつ者であり、千雨が身体能力に優れていなくともそういうタイプなのだろうと思っただけだ。

尤も、関係者だと知ったのも昨日今日の段階であり、ネギやアスナが頼りにし助言を求めていたことから優秀な魔法使いなのだろうと思っただけに過ぎない。だから、このかが攫われた際に内心、何故助けに来ないのかと多少の憤りを覚えていた。

「でも、エヴァンジェリンから逃げ回ったんスよね？」

「あれは魔力が乏しくなっただけだし、神楽坂がいたからだ。私だけじゃなにも出来ないよ」

刹那はエヴァとのことを聞いておらず、またしても驚いていた。そして、二対一とはいえエヴァから逃げ回れたのだから戦力に換算可能だと踏んだ。先ほどの言葉を重度の謙遜と見たのだ。

「で、どうすんだよ。先生？」

外伝 長谷川千雨の× 回？

真名との交渉は“いざとなればネギ先生が出世払いするから安心しろ”という千雨の言葉で決着がついた。その後、朝までネギ・刹那・真名が交代で外を見回り、ネギの部屋で寝ているこのかには千雨とアスナが付いていた。一度誘拐された事を踏まえ寝ずに見張ろうとするアスナに対しやる気の欠片も無い千雨はさっさと寝ようとした。アスナの性格上しつかりやるだろうと思つての本気であり、見張りなどする気はなかったのだ。

しかし、実際は逆となった。多少睡眠を取っていた千雨と異なり、京都駅まで遠征しこのかを取り返すために奮闘したアスナは疲れておりすぐに眠ってしまった。一方、千雨は眠る気は有ったものの、明け方まで緊張感から眠れなかったのだ。もしかしたら、侵入者があつた際、自身が火の粉を被る可能性もあつたためである。

食事の時間になつた頃、ネギ・千雨・カモの三人はネギの部屋にいた。学園長に連絡するためであり、漸く連絡がついたのだ。千雨としてはここで失敗すれば面倒事がさらに増えることが想定でき、早期決着と行きかけたのだ。

つまり、最善は修学旅行中止でこのまま学園に帰ること、次善はネギとこのかを学園に帰すこと、最悪はこのまま何もせず修学旅行の継続である。最低限、戦力の招集と援軍を期待できるようにしなければ、話にならないと千雨は考えていた。そうでなければ、風邪になつたことにし旅館に一人籠るか言い訳を用意して学園に帰ることも考えていた。

「で、どうだつて？」

「様子見をするから現状維持だそうです」
「ふざけてんのか！！ちよつと貸せ！！」

学園長に現状を話し、提案を行ったネギの答えは千雨の考えの最悪な部類だった。そのため、ネギでは話にならないとネギの携帯を千雨は奪い取った。寝不足から怒りの沸点が普段よりも低くなっていた事もそれに拍車を掛けたとあって良い。

「おはようございます、学園長先生。長谷川千雨と申します」
『ふむ、長谷川くんか』

一応、丁寧に自己紹介をしたものの千雨の声は苛立ちを隠せていなかった。一方、好々爺といった学園長の声に千雨は更なる苛立ちを覚えていた。自身が疲れているにも拘らず元凶は安全圏にいて呑気に喋ってやがるのかと。だからこそ、千雨は一気に捲し立てた。

「ネギ先生の話にあつたように現状維持など以外の外です。それとも、現状維持しなくてはならない別の理由でもあるのですか？」
『どついつ意味じゃ？』

学園長の声から訝しんでいる様子が窺えた。現状維持といつてもそれはネギたちに対してのことであり、援軍を送りこの後関西呪術協会の長たる詠春と会合を開きあちらでも対策を打って貰う気であった。そして、“理由”というものに心当たりもなかった。

「そのままの意味です。これは釣りなのですか？」
『何を言っているのかわからんのじゃが？』
「……子供の使いを代表として送る、挑発行為以外の何物でもないと考えますが。それに木乃香さんも狙われる理由があるから桜咲さんが付いていたでしょう」

「えっ？」

千雨の言葉に隣にいたネギから戸惑いの声が漏れる。ネギが特使として選ばれた事自体が問題だと指摘されたのだから当然の反応だった。ネギ自身、特にその事を深く考えていなかった。魔法学校卒業生という段階である程度大人に準じると見られているのが普通だったからだ。しかし、それは西洋魔法使いの常識であり関西呪術協会がそうとは限らないし、一般人から見れば千雨が正しい事に思い至ったのだ。

『挑発行為などは考えておらん。それに木乃香に関しては万一を慮つてのものじゃ』

「しかし、私から見れば挑発行為にしか見えません。現に実行犯の言動は関西呪術協会の不穏分子そのものだったそうです。木乃香さんを操り人形にする、と。木乃香さんも餌の一つですか？」

『じゃから、そのような真似をしたつもりはない。ワシは木乃香を大事に思っておるんじゃ。何故、そのような真似をせねばならん』

孫であるこのかを眼に入れても痛くないほど可愛がっているのだ。学園長としてはこのかを餌として使っているのではと指摘され、やや怒気の孕んだ声になった。事実、学園長にはそのつもりはなかったし、このかの父・詠春にもそのつもりはなかった。ただ、戦友の子ネギに会いたいとの詠春の要請を入れたに過ぎなかったのだ。確かに長として詠春は完璧とはほど遠く、反対派を抑えきれない事は予想された。

しかし、それとて万が一の事であり、昨日起きた事のようなことまでは予想していなかったのだ。もし、成功しこのかを操り人形に仕立て上げたところで、関西呪術協会を牛耳ることはもちろん、多数派になることも不可能である事は自明だったのだから。つまり、既

に反対派は極少数勢力に陥っていたのだ。

「私には計りかねます。ただ、学園長先生は大事の前の小事と目を御瞑りになることがしばしばある事は存じております。例えばネギ先生が担任という件など」

『……そのことは』

エスカレーター式の学校とはいえ中学三年。他校に進学する千雨などの生徒もいるのだ。千雨からすれば、たとえ優秀でもそれは勉強でのこと、ただの一教師としてならまだ問題は少ないかもしれないが、人間関係などが問われかねない担任というのは大いに問題といわざるを得ないのだ。だから、ネギを成長させるためにクラスの人間の事など小事だと言っていると言っているのだった。

しかし、学園長からすれば結果論とはいえ、クラスの人間から不満の声を聞いていない。その上、担任になるという話を聞いたうえで、期末テストを皆で頑張ったのだからクラスの人間公認とも言えるのではないかと。少なくともネギの評判は上々なのだ。

ここでも更にネギの顔色が悪くなる。ネギは基本的に自身を批判されることに慣れていない。魔法学校での五年間は優等生であり、唯一の例外の友人アーニヤ以外は褒められる事しかなかった。アーニヤもそれは批判というより喧嘩の延長上であり、千雨のような批判をされたことはなかったのだ。

「他にも多数ありました。ですから、関西呪術協会でも不安定分子を処分するという大事の前に、その為の餌の危険など小事なのではないでしょうか？」

『じゃからそのような事は考えた事も無い』

認めない学園長に更なる苛立ちを覚えた千雨は怒鳴りつけたくなるのを我慢しつつ、話の方向を変えることにした。今は学園長がどう考えているかなどどうでも良く、身の安全を図ることこそ最も大事なことなのだ。

「でしたら、今考えていただきませんか。部外者である私ですら挑発行為だと思ったのです。彼らなら更に悪意ある解釈をしたのではないでしょうか？」

『それは……………そうかもしれん』

漸く肯定的な言葉を聞くことができ、千雨は一息ついた。相手が挑発行為と受け取りさらに活発な活動を行う可能性を認めただからあと一息だと更にたたみ掛けた。

「先ほど木乃香さんを大事とおっしゃいました。そうなのでしたら安全第一に考えるべきです。ネギ先生と桜咲さんを付けて学園に帰すべきかと」

『それはダメじゃ。折角、修学旅行を楽しみにしておったし…』

このかを眼に入れても痛くないほど可愛がっているからこそ、楽しみにしていた修学旅行を中止にしたくは無い。学園長としても危険性は認めつつも戦力の充実と詠春側に反対派の搜索をさせれば、決着がつくと判断していたのだ。そして、それを為すのは一日も掛らないと見ていたのだ。

「木乃香さんの楽しみの前では私たちクラスメイトの危険は小事だとおっしゃるのですか？」

『そうではない、そうではないんじゃない』

学園長にとっては決着のつくまでの一日程度の危険性であり、一度

失敗した以上再度来ないと踏んでいたが、万一の事と思っていたことが起きた以上その可能性を看過することはできない事をわかっていた。最後の判断でこのか可愛さに迷いが生じていたのも事実だった。

「でしたら、早急にご決断ください」

「……………わかった。ただし、学園ではなく西の本山に向かわせる。あそこならばこちらより近い上に守護結界があるからのう」

決断した以上万全を期すとし、より安全だと思われる関西呪術協会の本山に行くように学園長は指示を出した。単純に距離と手段の問題である。学園に帰るためには密室空間と為る新幹線を使用するのが基本だが、その間に何かあっては手出しできないし、距離が近いため本山の方に行く方が遥かに早くつくのだ。

「わかりました。私は同行しませんが、ネギ先生に代わりますので、その事をお伝えください」

千雨からすれば、原因である親書とこのかが自身から離れば良かったため否やはない。出来ることであれば、そちらの安全も図りたかったがそれは二の次。あくまで自身が第一なのだ。それでもより安全だと聞き胸を撫で下ろす程度の良心を持ち合わせてはいたのだ。当然、ネギたちについて行くという選択肢は無く、臆面も無くそう告げ、返事を聞くまでも無いと、ネギへと携帯を返した。

このか達が手の届かないところに本山の結界の中に行けば、そこからおびき出そうと一般人を襲うなものだと考えそうなものだが、そこまでの考えには千雨は至っていなかった。それは一応警告を発するという良識のある相手であった事だし、ある程度魔法使いの常識も知っていたため、同行しているなどの場合を除き積極的に一般人

には手を出さないだろうということを千雨が無意識に考えていたためだ。実際、相手もそこまでする気はなかったため考える必要のない事ではあった。

「……はい」

ネギは顔色を悪くして、千雨から携帯を受け取り学園長と話をした。特使に関しても担任の事に関しても千雨から批判的な言葉が漏れたためだった。批判に慣れていないネギはその言葉に顔色を悪くしたのだ。それは内向的な人間であり同時に優秀な頭脳を持っていたからこそ自身の問題を次々と思いつく事が出来、千雨の言葉から連想ゲームのようにマイナスへと拍車をかけてネギを落ち込ませた。

要求を聞き入れられ、御満悦といったところの千雨はその事に全く気付かなかつた。千雨としては電話の内容の中でネギを批判したつもりは無いのだ。特使にした学園が悪く、担任にした学園が悪いと言っているのだ。尤も魔力を巧く制御できずアスナや他の何人かの服を脱がしていたことに関しては千雨もネギを批判していたが。

「長谷川の姉さん、もう少し気を使ってくれてもいいんじゃないか？」

カモが千雨に注意したかったのはあくまで言い方だった。ネギと異なり当事者ではないカモは千雨の言いたかったことをわかっており、ネギのように批判の対象を勘違いしなかった。尤もネギは学園が批判されていると聞いても自身の力量不足のためだと責めるところがあるため、どちらにしるあまり変わらないとも言えた。

「……っていわれてもな。教師なんだからその程度聞き流すだろ」

ネギの様子に気付きカモの言わんとしている事を理解した千雨は決まり悪そうに頭を掻きながらそう告げた。時に十歳児の子供であるといいつつ、時に教師だからと述べる。千雨はネギに関してはダブルスタンダードだった。自身の都合のいい、戦力としてや責任に関しては教師として一人前に扱い、その癪子供だと侮る。好ましくない、一貫性のなさである。しかし、実に凡人であった。一貫性などよほどの事でない限り凡人には無縁のものなのだ。

「長谷川の姉さん、頼みますって」

「て……はあ……わあったよ」

“てめえが言えばいいだろ”と口にしかかったものの、溜息一つで了承の意を告げた。何も難しい事をやるわけではなく、少々のフォロワーを入れるだけでよいのだと思いなおしたのだ。

また、戦いとは時に気分によって変動するものだと言ったことがあった千雨は、陰鬱な気持ちのまま、万が一の事があつてはネギにもしもあるかもしれないし、そうなれば同行者であるクラスメイトにも危険が及ぶ。ネギたちが旅館を出れば自身が被害を被ることは無くなるのだから、今回に関してはこれが最後だったとフォローを入れることにしたのだった。

ネギは担任ではなく普通の子供として見れば善良であり、好ましくさえ思うと千雨は考えていた。しかし、現実には担任であり、魔法の秘匿に関して甘く、自身を学園に知られるきっかけを作った相手なのだ。正確にはカモの方なのだが、ネギがいなければカモも来なかつたし、あの場にネギがいなければカモも喋る事はなかつたはずである。後一年、ネギがこなければ平穏な毎日を過ごせたのではないかと千雨は考えていた。

エヴァの事といい、今回の事といい面倒事を持ってくる。できればお近づきになりたいくない相手であるのだ。だから、これ以上仲良くなっても困るし、ある程度距離が置かれるようなフォローの仕方を、と千雨はネギが電話を終えるまで悩んでいた。

外伝 長谷川千雨の× 回？

「それにしても、行かなくてよかったのか。龍宮」

千雨はネギ・このか・アスナ・刹那・カモの乗るタクシーを見送った。あの後、ネギにフォローしつつ話し合いが持たれた結果、真名と千雨は修学旅行に参加することになった。そして、ネギたちの為にタクシーを呼び、今全員を乗り込ませ、出発したところだったのだ。このかには特段の説明を行っておらず、タクシー内でも話を聞くだろうと千雨は考えていた。

「長谷川も賛成しただろう」

「そりゃ、そうだけだよ」

その話し合いにおいて真名が居残る事を提案した際、真っ先に賛同したのは千雨だった。真名の提案理由はこのかと親書のみが狙いとは限らないし、また本山に移動したことを相手が知るには時間が掛るだろうからそれまでに何かあればいけないため、一応の戦力を残しておく必要がある事を挙げた。千雨としては、当然残る気だったのだから、身の安全を守れるに越したことはなく、一も二も無く真名へと賛同したのだった。

千雨は何も面倒だからというだけで残るのではない。少なくとも千雨から見れば、刹那は神鳴流の剣士としてかなりの腕だろうし、ネギはひよっことはいえ魔法使いとして自身の遙か高みに立つ。アスナはその従者であるが魔法無効化という特殊能力を持っているのだ。そんな中、魔法使いとしては最低ランクにも満たない自身の存在は足手まといにしかならないと考えたのだ。

「だったらいいじゃないか」

「けど、ホントにあんな理由だったのかよ。……みんなと遊びたかったとか」

「穿った見方は良くないぞ」

真名が残った理由に千雨は納得できていなかった。相手のターゲットがこれまでの行動上このかと親書以外のものとは考えられず、また居ない事に気付かないほどバカではないと千雨は考えていたのだ。だから、危険度合いはあちらの方がまだ高いと千雨は踏んでいた。尤も、本山に着けば凄腕の術者が守るだろうし、それまでの道中もそんな直ぐに襲われる訳もないし、襲われたとしても本山まで逃げ切る程度は出来るだろうとは考えていた。

最終的には、自身が素人に過ぎず、経験豊富だという真名の意見を尊重すべきであるとの考えに至っていた。だから、違和感を覚えつつも自身にも利益のある真名の行動には賛成していたのだ。

「お、丁度いいところにいいんちよがいるな」

二人して玄関から中へと入ってきたところであやかはじめ数名のクラスメイトが居た。筋書きとしては病気になったこのかを教員であるネギと同室で仲の良いアスナ、そして京都の地理に詳しい刹那が同行したというものだ。突っ込み所は満載だが、理由は存在すればいいだけなのだ。あとで責められる事のない千雨はその辺に關しても無責任だった。

教師陣にも告げずに行ったのは、そのままの筋書きと面子を受け入れられる可能性がないからで、タクシーの中からその筋書きをネギが電話することになっていた。教員の側から説明があるはずだったが、一応委員長には話しておこうと考えていたのだ。

「いんちよ、ちょっと話があるんだけど」

「なんですの、千雨さん。私は今、ネギ先生を探しているのですが」

「そのネギ先生の話なんだけだよ」

「なんですか!？」

おざなりに聞いていたあやかが、ネギの名前を出すと瞬時に食いついてくる。少々行き過ぎている熱意に千雨は頭痛を覚えた。話す必要も別ないのだから、話さなくても良いのではないかと思いつつも、一度ネギの名前を出した以上、話さない訳にはいかないと事情を説明するのだった。

*

「はい……はい。すみません」

電話の相手である教師の新田に対してネギは謝罪を繰り返していた。病気とはいえ一言の相談も無く出てきたのだ、新田が問題視するのは無理もないとネギ自身も思っていた。委員長であるあやかに面倒を掛ける形になったし、他のクラスのみんなも心配していたかもしれない、とネギは内心謝っていた。

「では、お願いします」

そういい、ネギは新田との電話を切った。タクシー内は助手席に刹那、後部に右からネギ、このか、アスナの順に座っていた。このかを起こして直ぐに事情も説明せず連れてきたため、このかが疑問を抱くのは当然だった。電話でこのかが病気で病院に行くという話をしたにもかかわらず、空気を読んで黙っていてくれた事は感謝しなくてはいけないとネギは思っていた。

「それで、ネギくん。電話も終わったことやし、そろそろ説明してほしいんやけど」

このかに関して学園長は詠春に任せるといってネギは事情を話す事を許されなかったのだ。尤も、それは強く求めたものではなく、半ば今回の事の交渉に当たっていた千雨はその事には触れなかった。千雨からすれば、このかに事情説明するかどうかに重きを置いていなかったに過ぎなかったが、ネギは隣から発せられる疑問の視線に耐えられるか自信が無かった。

「え〜と、それは」

ネギは口ごもり、このかを挟んで逆側に座っているアスナに対して助けを求めるように目を向けた。けれど、それは直ぐに逸らされ、アスナからの助けが無い事を知り、斜め前の刹那の方向を見たものの、ネギに気付く様子はなかった。カモに視線を向けるも、この狭い空間で喋ればバレることは自明であり、助けを求める意味はなかった。

「う〜ん、なんや言いにくいことなん？それともウチにみんな隠し事をしてんの？」

「うっ………そ、それはですね。今から行くところで事情を聴けるはずです」

「でも、目的はウチの実家やる？なんで隠すん？」

にっこりした笑顔をネギにグツと近づけ、このか問いかけた。けれども、事情説明をする事の出来ないネギは黙るしかなかった。学園長から許されていない上に、タクシーという狭い空間である性質上、運転手にも聞こえてしまうのだから、話せないのだ。

「このかお嬢様、事情が少々込み入っております、私たちからは説明しにくいのです。ですが必ず後ほど何らかの説明をさせていただきますので」

「む、せつちゃんが言うなら」

刹那の助け船にネギはそつと胸を撫で下ろした。そして、このかの興味が刹那に移りそちらへと話題が移っていった。

「そやった。せつちゃんもみんなも昨日ありがとくな。なんやわからんけど助けてくれて。そうや、せつちゃん」

「いや、ですからお嬢様。昔の話を持ち出されましても」

「そういや、このかと桜咲さんは昔どんな感じだったの？」

「って感じやったやんな、せつちゃん」

「え」と

アスナがいつの間にか参加しこのかと刹那の昔話に花を咲かせていた。尤もこのかは嬉しそうに、刹那は困窮しながらの対応となっていた。アスナの意図は事情から話を逸らすこととこのかと刹那の仲を修復しようという気遣いによるものであったが、このことはむしろマイナスとなるのだった。

*

「て、そういやせつちゃん。ウチの実家と違う方向に走ってると思っんやけどいいん？」

「えっ？」

途中から刹那はこのかに掛りきりであったため、周囲の景色を見落としていたのだ。どこに向かっているまで確認していなかった。そして、周囲の景色を見ていたネギは地理を知らないため意味はなかった。ただ単純に京都の町並みに感じ入っただけなのだ。

「キャツ!!」

タクシーは急停車し、このかは悲鳴を上げた。ネギとアスナは前部座席の背中に頭を打ち付け、前部へと打ちつけられようとしていたこのかを刹那が辛うじて抱きとめた。

「もう入ってもうてたし、ここまで気付かれんとは思ってなかったわ」

そう侮蔑の表情で刹那を見ていた運転手は帽子を脱ぎ、短く見せかけていた髪を露わにし、眼鏡を掛けた。その顔は昨日の誘拐犯、旅館に侵入しこのかを誘拐した呪術師・千草だった。このかが間に居り手を出せない刹那を尻目に、千草は運転席から車を降りた。

「貴様あ!!」

刹那のその声に頭を打ち付けていたネギとアスナも運転手が降りた事に気づき、続いて降りて行った。

「あ、貴女は昨日の呪術師の」

「そうです。今度こそ、このかお嬢様を戴きますえ」

千草の言葉とともに周囲から白髪の少年・フェイトと神鳴流の使い手・月詠が車を取り囲うように姿を現した。嵌められたことを理解した刹那は目敏く運転席を見たものの、鍵を抜かれている状態で車

の使用はできないことを悟った。

「このかお嬢様。申し訳ありませんが、詠春様か学園長、長谷川さん、龍宮の誰かに連絡を取ってください」

小声でそう告げ、一人このかを車内に残し刹那も外へと出た。一先ず戦闘になる事を鑑みれば、車内というある程度安全といえそうな場所に居てもらった方が安心できると刹那は考えたのだ。目の前に降り立ったのは神鳴流の後輩を名乗る月詠だった。京都駅の時には少々抜けているように思っていたが、その力は十分に脅威に値する事だけは剣を交えた刹那にはわかっていた。

「どうもー、神鳴流です。センパイ、相手してくださいね」

ウフフと笑う月詠に対し刹那は焦りを感じていた。神鳴流同士という関係上、たとえ車という金属の塊の中でも安心ではなく、そのためこのかの安全に気をもみながら戦わなければいけないのだ。

「このかお嬢様を傷つけるのは本意やありません。やからセンパイ、場所の方を移動しましょうか」

刹那は月詠の提案に乗り場所を移動することにした。自身が離れることでこのかの安全に不安を覚えるものの、ネギとアスナが居り、また周囲の状況を勘案しながら戦える相手ではない事はわかっていただけだから。

*

「一応、言うときまますけど、もうあんたらは捕えられてるさかいな」
「どういうことですか!？」

「無限方処の呪法。ウチとしては結界の中に既にいるんやから、無駄な抵抗は止めてさっさと投降してほしいんやけど」

無限方処の呪法は半径五百メートルの内でループし、出ることが叶わない結界である。抜けだす方法は結界そのものを圧倒的力によって破壊することと、いくつかある起点の一つでも壊すことであった。

「無限方処の呪法ってなによ!？」

「まあ、簡単に言わせてもらえば、結界の中に閉じ込めたさかい、あんたらは脱出できひんいうことですよ」

アスナの質問に千草は簡単に答えた。諦めさせる意味でも先にこの事を告げておいた方が無駄に走り回られるより良いと考えたのだ。そして、この結界内では携帯のような外との通信も遮断されるため助けを呼ばれる心配も無い。

「本当なの、ネギ?」

「ええ」と、呪術には詳しくなくて。でもそういったものがある事は聞いたことがあります」

「ちよっと、どうすんのよ?」

話を聞いたものの、千草の話が本当かどうかアスナに確かめる術はなく、ネギもそれは同様だった。眼に見える結界ではないため、ループを体験しない事にはわからないのだ。尤も、このかをおいて移動するわけにもいかない以上ネギにも確認する気はなかったが。

目の端でこのかが携帯を使用しているのを確認したネギは助けを呼んでくれることを期待した。千草のいつている事が本当だとすれば

呪術に詳しくないネギにはどうしようもなく、また刹那も呪術には詳しくはないだろうと予想できた。だから、結論としては助けを待つにせよ対策を考えるにせよ、目の前の二人、千草とフェイトをどうにかしない事には何もできない事をネギはわかっていたのだ。

「アスナさん。ボクたちでこのかさんを守りましょう!!」

「……わかったわ」

ネギの強い決意の言葉にアスナは笑顔で応えた。アデアットと唱え、アーティファクトを手に持った。ただのハリセンにしか見えないものの、京都駅では千草の出した鬼を一撃で沈めており、外見はふざけているが強力な武器である事をアスナは知っていた。そして、エヴァから千草とともにネギを抱え逃げた際、魔法が効かないことを聞かされており、またその場でそれが何度となく魔法を打ち消し、それは証明されていた。武器に関しては認識不足の面があつたが、自身が対魔法使用に関して多少なりとも戦える事をアスナは自覚していたのだ。

「じゃあネギ。あんたそつちの白髪の子を相手しなさい。私はこの猿女をやつつけるわ」

「わかりました」

流石に、フェイトは外見上少年であり、それを叩くというのはアスナとしてもあまり好ましくないと思い、ネギをそちらへと割り振った。そして、正面に捉えた千草を睨みつけ、改めてアーティファクトを握りなおした。

このかが狙われるなんて一度で充分、ここで決着を付けるんだと再度強く意思を固めた。ここで、千草達を一網打尽に捕まえてしまえば次は無いのだろう、と。

「猿女、ちっちとちやらねちやいなさい！！」

外伝 長谷川千雨の×回？

「長谷川、残念な知らせがある」

昨日からの面倒事を朝方に片付けた千雨はのんびりと修学旅行を楽しんでいた。少々、ネギに任されたと張り切っていた委員長や一緒に回りたかったと落ち込むクラスメイトを数名見かけたものの、千雨としては平穩だった。何ら騒動になることなくまともな観光だった。これだよ、これが“普通”の修学旅行なんだよ、と少々大袈裟に喜んでもいた。しかし、その喜びも旅館に帰ってくるまでの間まだった。帰ってきた直後に真名から話しかけられ千雨は嫌な気配しか感じられなかったのだ。

「私としては聞きたくないのだけど、聞かないって選択肢はないのか？」

「既に仕事だからそれは無理だな」

「……はあ」

希望的観測に基づき、もしかしたら通るかもと思おうとしていた要求は却下され千雨は溜息を吐いた。真名が知らせて来る以上、今朝の続きであり、千雨にとっては面倒事が増えることだったのだ。自身に火の粉が降りかからないという最大の願いはともかくとして、このか達の安全も願っていた千雨としては残念でならない話なのだ。聞きたくはなかった。

「近衛が誘拐されたらしい」

「本山ってやつからか？」

「いや、あのタクシーの運転手が敵で、結界に閉じ込められていたために連絡が遅れたらしい」

時間的に既に夕方という事もあり、当然千雨は本山についていることを前提に考えていたのだ。朝に出たのだから昼前には距離的に確実についていたはずなのだから。実際、奈良に着くまでは千雨も気にかけていた。便りがないのは良い便りと特に千雨が話から連絡を取らなかったことが失敗だったかと千雨は悔んだ。同時に連絡を取ったからといって何か出来たかという疑問符を付けざるを得なかったが。

「……それで？」

「今、ネギ先生達は本山にいるらしく、戦力を本山に集めるそうだし、
「そうか」

戦力という以上、プロの集まりであり自身など歯牙にもかかけられないだろう、と千雨は考えた。千雨の考えでは真祖であるエヴァが呪いで実力を最大限は発揮できなかったとはいえ、そこそこ戦えていたネギがいたにも拘らず誘拐されたのだ。千雨のようなひよっこ以前の人材が出る幕ではない。

例えるなら、プロの軍人が戦っている戦場に素人を放り込むような愚行。むしろ邪魔になる可能性が高い上に自身の命も危ないと、千雨はそう思ったところに出ない様にしていたのだ。エヴァの時も目の前で繰り広げられていなければ、千雨がそのような場面に出るつもりはなかった。

今回に関しては多少なりとも助言をした立場として、このかの誘拐された一因に自身を数えつつ、想像力が足りなかったと反省はしていた。そして、真名がそのことを知らせてきたのは好意からだと察した。戦場に足手纏いが必要とされるわけがない、と。

だから、安全圏にいるからこそ、千雨は純粹にこのかの身を案じた。今までは自身の安全も掛っていたが、今は状況が大きく変化したのだ。

「何か、手伝えることは無いか？」

戦力として本山に行くことが無い以上、何らかの形で多少なりとも手を貸そうと口に出した。このか達が居なくなった事に対して巧く工作する程度の事しかできないだろうとは思っていた。だから、あくまでこの発言は旅館に残ってなにかする事はないか、という意味に過ぎなかった。

「そうか、そう言ってくれると助かる」

「へっ？」

千雨は予想外に真名が満面の笑みを返したことに嫌な汗を流した。満面の笑みを返されるほどのことではないのだ。ただ、ちよつと旅館での工作を手伝う程度なのだから。

「長谷川も本山に召集されている」

「……はい？」

今度の真名の言葉は千雨が理解するのに少々時間を要した。

*

「長谷川さん、龍宮さん、すみません。僕が不甲斐ないばかりにこのかさんを」

本山で待っていたネギは千雨と真名を見て直ぐに頭を下げ謝った。折角、手伝ってもらったにも拘らず自身の力不足で現在の状況に陥っていると考えているのだった。

実際にはフェイトという札が切られた以上、例え真名がいたとしてもこのかを逃がすのは難しい状況ではあったためネギの力不足の問題ではなかった。ネギ自身も無事に本山に辿りつけたのは幸運に過ぎない。アスナの魔法無効化能力と千草が早々に撤退しようとしたためなのだ。

頭を下げていたネギはそういうと、頭を上げた。しかし、その眼に映った二人の背後に存在した何人かのクラスメイトに気付き、ネギは茫然とした。

「ちょっと、千雨ちゃん。どうして楓ちゃん達を連れてきてるのよ」「隠れて出て来るのが無理だったんだよ。龍宮は兎も角、私が撒けるわけがないだろ」

勿論、嘘である。呼ばれたのが真名と二人だけだと知り、それから逃れられない事を悟った千雨は急ぎ楓達に声を掛けたのだ。千雨と異なり、ただただクラスメイト想いの彼女たちに否やはなかった。千雨の場合は異なっているというより自身の実力が無い事を知っているからこそ、弁えているつもりだったが。そのため、楓・古菲・超・葉加瀬の四人を連れ本山へとやってきたのだった。

「まあ、見つかったもんじゃないは仕方ねえだろ。幸運にもこいつらは戦力になりそうだしさ」

「……白々しいでござるな」

*

本山の中は閑散としていた。既に使える人材は搜索へと出ていたのだ。長として残っている詠春を除けば連絡役をこなすに過ぎない事務員だけだった。そんな中、ネギを始めクラスメイト達で話し合いが持たれた。

「……つまり、近衛サンが誘拐されてから連絡は無いわけか」

「……はい」

事情説明を終え、最初に口火を切ったのは超だった。魔法に関しての説明もネギは行ったが、あまり驚かない姿に寧ろ驚かされていた。超と葉加瀬は知っていたし、楓もその存在に薄々気付いてはいた。古菲は周囲があまりに当然のように受け入れたため驚けなかったけどだったが。

「ハカセ、どう思うか？」

「要求なりがあるのなら、別に時間を置く必要もないでしょうから、京都駅で聞いたという操り人形に仕立てているのではないのでしょうか？」

「でも、長さんは否定していました。このかさんを操り人形にしただけでは乗っ取りはできないって」

「そうヨ。何だかんだ言って当代の関西呪術協会の長は組織を掌握してるネ。かといって長個人を脅したところで巧く行くはずが無いヨ。……だったら、別の目的は考えられないか？」

このかを操り人形にしたところで、ある程度以上の使い手であれば初見で見破れる。また、このか事態は長の娘という立場であったが、

政治的にそこまで大きな意味合いを持っていない。当代の長である詠春を捉え操り人形としたのなら別であるが、既に一度誘拐されていると知られてしまったこのかを操り人形にしたところで関西呪術協会を乗っ取れることはないのだ。だから、超は千草が言ったその言葉は単なる挑発行為に過ぎないと見ていた。

「と言いますと？」

「それがわかれば苦労は無いネ」

事情説明の段階からアスナ・古菲は脱落。他の面子も超と葉加瀬、ネギの話に耳を傾けてはいるものの、口を挿めないでいた。

「なあ、近衛の父親ってネギ先生の親みたいに英雄なんだろう？そのへんは関係ないか？」

「恨み力。けれど態々、傷つけずに攫おうとしてたからその可能性は低いんじゃないか？」

「そっか」

千雨は何ともなしに口にしたが超にいと也容易く却下された。それでも千雨は何かないと頭を捻っていた。

「……………英雄の子か。……………いや、長谷川サン良い線行てるかもしれないヨ。近衛サンはネギ坊主同様に巨大な魔力を秘めてるネ。その利用法なんていくらでもあるはずネ」

長い沈黙。それを破ったのは変わらず超だった。

「魔力の利用法ですか？」

「その辺、私は詳しくないネ。ネギ坊主、長谷川サンどうネ？」

「魔力タンクとしては……………うっん」

魔法使いとして学んでいるネギと千雨に問いかけられた。ネギは頭を捻るも思いつかない。これはネギも千雨と違った意味で偏った勉強してきたためだった。攻撃魔法に関しては多くの時間を割いて勉強したが、他の知識は一般的な魔法学校卒業生並に近かったのだ。

「私はそんなに詳しくないんだけど。……そうだな。マンガみたいに何か召還したり封印を解いたりできるんじゃないやねえか？ 確か悪魔を召還するのがどうたらってマクダウエルの奴が……」

先日の停電の帰りで行われたエヴァの講義を思い出し千雨はそう口にした。あまりにも悪魔という言葉に反応したエヴァに対し千雨が聞いたのだ。その結果は漫画みたいなことが出来るのかということだった。尤も、魔法の存在そのものがすでに漫画だった事を棚に上げての事であるが。

「……封印を解く。可能性としてはあり得るネ。誰か長サンを呼んできてくれないか？」

*

「このかの魔力を使って封印を解く、ですか。……確かに可能性はありますね」

超からの説明を受け、しばらく考えた詠春はその発想に肯定を返した。詠春自身、このかの魔力の重要性を軽視していたといつて良い。あくまでその価値は関西呪術協会の長の娘、関東魔法協会の理事の孫としてのものに着目していたためである。

「それに今日は新月。何か意味があり気ネ」

「そうですね。……新月の夜は封印が最も弱まる時の一つです」

タイミングが良すぎると詠春は顔を歪める。月の魔力と言うように全く月が出ない新月の夜、その時は大気中の魔力も薄まり、封印も弱まるのだ。エヴァは呪いの強弱よりも月の魔力に左右されるため、満月のときに最も力を取り戻すが、基本的にそれは例外なのである。

「と、すると今日という可能性があるということか？」

「ええ、特に深夜一二時頃が良いと……あと一時間程度ですか」

「封印の心当たりはあるか？」

詠春は熟考に入る。距離の問題でおそらく京都内であることは確かであると。そして、京において東西南北に四つの封印があった。うち三つは同じ封印であり、手順の問題上その中の一つに絞られる。つまり、その絞られた一つと異なるもう一つの封印が問題なのだ。

「……この辺りでは二つ。共にかなり危険な鬼と為ります。今は手の者が出払っているためここから向かうことになります。正反対な上、今から向かうとすれば間に合うかどうか」

三つに分けて封印されている酒呑童子と両面宿儺。本来であれば両面宿儺など足元にも及ばない危険な酒呑童子であったがそこは三分割されていることで、同程度の力しか発揮できないはずであった。そして、このか程度の魔力量では封印が解けるのは、そのうち一つではない。

「……今日ではない可能性もあるヨ。それに目的が違う可能性もあるけれど、向かておく方がよさそうネ」

「……ご協力お願いできますか、みなさん」

頭を下げる詠春を前に皆は一応に頷いた。

「危険度は同程度力？」

この質問は難しいものだった。酒吞童子と両面宿儺では封印の嚴重さが異なるのだ。両面宿儺は十数年前に再封印を行ったところで比較的新しいものである。新しいからこそ、破られやすいのだ。一方、危険度は高いものの酒吞童子の封印は一度も破られたことなく平安の頃からのもの。古いからこそ、破られにくい。言い方を変えれば近年の呪術師と平安の呪術師とではレベルが違いすぎるのだ。

だからこそ、特に酒吞童子に関しては封印を解く事が理論上可能であるという程度に過ぎない。しかし、詠春呪術師出身ではないため、そこまで詳しくは知らない。そして、詳しい人物は既に出払っている。ただ、かつて前任者に同程度のものと聞いたのみだった。

「……ええ」

「だったら二つに分けるネ。ネギ坊主・アスナさん・刹那サン・楓サンで一組。長サン・龍宮サン・長谷川サン・古・私で一組ネ」

ちよつと待てと出かかった言葉を千雨は口におさめた。神鳴流の剣士と魔法使いを二手に分け、ネギに較べ自身が遥かに劣ることが見越され一人多くなっている事を千雨にはわかったからだ。出来る事なら危険地帯に赴きたくはなかったものの、それを言いだす事は出来なかった。あくまで後方待機や支援程度なら出来るかもしれないと。

流石に駄々を捏ね、ついて行かないというほど千雨は薄情ではない。

そして超を何だかんだいつて信頼しているのだ。自身の非力は知っていて、あくまでそれは使い方次第。超であれば巧く安全な使いどころ見つけてくれるかもしれないと考えたのだ。

「ハカセはここに残って連絡を」

「わかりました」

「では出発ネ」

学園長には既に連絡を入れている。明日の朝一番に援軍が到着することだったため、千雨とすれば今夜が何事も無ければ晴れて解放されることと為る。できることなら、封印の件は杞憂であってほしいと千雨は願った。

だからといって、このかの安全を願っているのは確かで、安全のためには早めに見つかるに越したことはないことをもわかっていた。自身が危険に飛びこむ可能性とクラスメイトに過ぎないこのかの安全、誘拐されたという切迫した状況において千雨の考えもやや後者を重視するように傾いてはいた。その二つの葛藤を内心に抱えつつ、超たちとともに目標へと足を踏み出すのだった。

外伝 長谷川千雨の×回？（後書き）

酒吞童子とか唯のネタ。なんでもよかったのですが、思いつかなかった。なので有名どころにしました。発想の貧困さを嘆きたい。

本編を話数では越えますが、たぶん文字数ではあちらの方が上。テキストを信条に書いた本編は文字数もテキスト。それに較べれば外伝はちよつとだけまともに書いているつもりなので、一話五千字程度にしています。どうでもいい話でした。

外伝 長谷川千雨の×回？

「当たり前、か」

湖の真ん中で儀式を行っている千草たちを千雨達が発見した。周囲を森に囲まれた湖でのこと、湖まではその森が障害となっていたためか千草たちに気付いた様子はない。しかし、その儀式とていつ終わるかとはわからない。一応、あと十分少々といったところを詠春は予想していたが、確証はないのだ。どちらにしる時間が無い事には変わらないと超は考えていた。

「作戦は三人で敵を惹きつけて、逆方向から私と長谷川サンが突入するというのはどうネ？」

湖の中央に位置する祭壇までの一本道。超の確認では儀式を行っている千草を除けば、三人がいた。ネギからの情報に有った一人は白髪の少年・フェイトと神鳴流の剣士・月詠、そして新顔の黒髪の少年・小太郎だった。儀式中ということで千草が動けないことが予想され、その三人を除き儀式を止める必要があった。

相手はネギを容易く倒すほどの少年と刹那と互角を演じる女剣士、そして未知数の少年ということで、一々相手にしている余裕はないと超は判断したのだ。残念ながら湖を祭壇まで掛る橋を利用せず近づけるのは千雨のみ。魔法の杖に乗り移動する方法である。しかし、超の見る限り実力はそこまでではない千雨を一人にするわけにもいかず、そういった方法をとることにしたのだ。

「賛成だな。私があのお白髪の少年。長さんがあのお女剣士。古にはあの子供だな」

真名の見立てでの戦力分析では、相手の中での最強は白髪の少年・フェイトであり、長・詠春でも敵わない。であれば、自身が時間を稼ぐ程度で足止めすれば良いという結論に至った。久しぶりの危険な仕事だとニヤリと笑う一方、高額報酬を要求せざるを得ないと考えていた。

「ちょっと待って下さい。あの白髪の少年は……」

詠春が真名を止めたのは当然だった。フェイトを詠春は見たことがあったためだ。嘗てナギとともに“紅き翼”として動いていた時にいた敵。完全なる世界の幹部だったと詠春は記憶していた。けれども、鈍った自身では既に勝負にならないこともわかっていた。フェイトも鈍っていれば話は別であったが。

「強いんだろ？わかっているよ。ただ、私は銃使いだから剣士とは相性が悪くてね。長さんも鈍っているだろう？」

真名は詠春の実力のほどを大凡計れていた。そして、一概には言えないものの自身の方が上とみていた。そして、フェイト相手でも時間稼ぎ程度なら可能だと踏んでいた。何も倒す必要はないのだ。

「……それは」

「わかったアル。さっさと倒して儀式を中止させて真名を助ければいいアルね」

「そうだ」

*

「巧くバラけたか」

千雨はそう口にしたものの、そこまでうまくはいつていなかった。祭壇への橋の辺りでも真名とフェイトが戦っているのだ。その意味で、逆から行くという超の目論見は成功に思われた。千雨は真名達が仕掛けている間、湖周辺の森を気付かれない様に移動し先ほどまで居た場所の反対側に来ていた。二度目の戦場であり、自身の手が震えているのに千雨は気付いた。エヴァの時は半ば夢物語で必死さもあり手が震えたのは後日の事だったが、今回は今来ていた。

「長谷川サン、覚悟は出来たか？」

さっさと行けということなのだろう、千雨の杖に乗る超からそう告げられた。特別仲が良いというわけではない、ただのクラスメイトを救う、そんなキャラではないことをしようというのだ。そういうのはヒーローの仕事だろ、と千雨は自嘲するも既にそんなことを考える時間は過ぎていると思いいなす。

「はあ、わあつたよ。いくぜ」

苦笑いを浮かべ千雨は了承の言葉を口にした。やはりキャラではない。こういうのはネギやアスナのようなお気楽な人間がやるべきなのだ、と。

自身の仕事を思い出す。全力で祭壇まで湖を突っ切り超を届ける。そして、このかを回収し撤退することだ。そうすれば、千雨の眼から見ても不利な戦いを強いられている真名たちが逃げることでできるのだと言い聞かす。怖くはないとは言えない。けれど、ここで逃げ出した時の後味に較べれば幾分かマシだろうと千雨は笑顔を浮かべた。

ザアアアツ、水を切る音が千雨の耳に入る。既に自身が戦うなどという事を考えていない千雨は退却のときの魔力はあまり考えていなかった。儀式を止めさせ、時間さえ稼げれば別の場所に行ったネギたちが助けに来るはずであり、その時まで逃げる事が出来ればいいのだ。

全力を投下し、普段の千雨では考えられないスピードを惜しげもなくだしていた。湖の中央、両面宿儺の封印の岩。そのお陰で岩を挟んで反対側にいる千草達には見つかることなく接近できた。既に儀式の終わりが近い事を示すように岩が光出しており、千雨はその岩の横を通り、一気に儀式を行っている千草とその台に寝かされるこののいる祭壇へと辿りついた。

「巧くいったネ」

「あんたらなにも…グヘツ」

超は杖に乗った勢いそのまま祭壇へと飛びおりた。かなりのスピードから飛び下りた超はその勢いそのまま千草を祭壇の端まで蹴り飛ばした。超はその隙に、と眠らされているこのかに手を掛けた。光るこのかを持ち上げ、そのまま千雨とともに逃げようとしたのだ。

「待ちいな。今このかお嬢様をそこからのけたら……」

千草が起き上り、そのことを口にした時には既にこのかは台から離され超の手の中に収まっていた。千草はそれに気付くと口をパクパクし、顔色を瞬時に青くした。尋常でない事象、千草にとってそれが起きている事は察せられた。

「…あ、あんたら自分らが今何したかわかっとなるんか!？」

この儀式において行われていたことは二つ。封印の解除と制御だっ

た。その要ともいうべきこのかをそこから外されたのだ。封印は寸でのところまで解除されており、制御の方が出来ていない状態になったのだ。千草とて無意味に街を破壊する気はなかったのだ。しかし、制御されていない両面宿儺は当然無差別に破壊を行う。

「ま、まさか…」

顔面蒼白にしながら焦る千草の姿に超はそのことに気付き、千草も一拍遅れながらもそのことへと思い至りそう口にした。そして、その事を示すようにビキツと岩にヒビが入っていった。

「てめえ、どうにかしろよ!!」

杖の勢いで行き過ぎていた千雨は引き返して来て祭壇に降り立ち千草の元へと向かった。そして、茫然とし座り込んでいる千草の首元をつかみ、そう迫った。

「しるか。ウチやって、こない危険なもん、慎重に取り扱わなあかんのや。やのにあんたらが邪魔するさかい……」

「うるせえ。出来るのか出来ないのか答えるよ」

「無理や。ウチは解放する方法は知っても封印する術は無いんや」

再度ビキツと岩にヒビが入る音が千雨の耳に入った。この段階に入り、既に千雨にも両面宿儺の圧倒的な魔力を感じられる段階に入っていた。エヴァの時はあまり感じなかった巨大な魔力だった。千草の反応にそれが事実だと悟った千雨は、彼女に掛けていた手を離した。千雨も千草同様、茫然といった状態へと陥ったのだ。

「長谷川サン、ここは逃げるネ!!」

最初に再起動した超の言葉に千雨も動き出そうとする。打つ手が全くない訳ではないのだ。詠春が最近再封印したと話していた。つまり、自身には不可能でもここで逃げ切れれば“誰か”が封印出来るということなのだ。千雨はそう思いなおしたのだ。

「そうだな。さっさと逃げるぜ」

茫然自失のままの千草を置き去りに千雨は踵を返し、再度杖の準備を行った。横目で確認すれば、先ほどまでと変わらず真名とフェイトが戦っており、一本道の使用は出来ないものと考えた。走って逃げる事が出来ない以上、飛ぶしかなく、残り少ない自身の魔力でもこのか含め三人分、湖を渡りきる程度の魔力は持つだろうと千雨は冷静に計算していた。

千雨が跨り浮こうとしていた杖に超はこのかを抱いたまま飛び乗り、行きとは較べものに為らないほどゆっくりとした移動となった。その間も封印の岩のヒビは大きくなる一方だった。

*

辛うじて、湖を渡りきった時、背後で巨大な光の柱が上がった。両面宿讎の復活。その事に異論を差し挟むことはできず、千雨はただただ逃げようと足を地に付け走り出そうとするのみだった。エヴァのときと異なり既に魔力は尽きており、身体強化など行えず自身の足に頼るほかないのだ。

「龍宮サンは何を……。いや、あの少年の方か」

千雨には周囲の状況を把握する余裕もなかったものの、このかを抱きながら走っていた超は冷静に周囲の様子を見ていた。かなり距離を置いた森の向こうで戦っているであろう古と詠春の戦局までは把握していなかったものの、拓けた湖の上で行われている真名とフェイトの戦いは見えていたのだ。そして、二人はその場から離れようとしていない。気付いていないという事は無く、フェイトによつて逃げようとする真名が足止めされているのだと超は気付いた。

「龍宮サンが拙いネ」

「……………はあ……………はあ……………どう……………すん……………だ」

このかを抱えた超と同程度でしか走れない上、息を切らしている千雨。千雨にこのかを任せ自身が真名を手助けに行くかと考えるも、それは無理だという事は超には自明だった。この場所も安全ではなく移動を重ねなければならぬ。このかを再度誘拐される可能性もあり、超が離れるわけにはいかないのだ。

「……………ちよつと……………待て……………あれは……………」

真名の戦況確認のため、やや速度を落としていた超に千雨の声が聞こえた。その声は今までになく恐怖に彩られていた。

千雨がその事に超より先に気付いたのは魔法使いであるために魔力に鋭敏だったというより、超の意識が真名の方に向かっていただけに過ぎない。千雨は最大の恐怖である両面宿儺に息も絶え絶えに為りながらも意識を傾斜させていたのだ。

だから、迷いもせず、千雨達の元へと両面宿儺が歩を進めて来ることがわかったのだ。偶々方向が一緒なだけだと思いたくもあつたが、千雨はそこまで楽観的に出来ていない。

「……ヤバいネ」

「……さっさと……走るぞ」

千雨自身、走ったからといって逃げ切れるとは思っていない。しかし、それしか手が無いと考えたのだ。少しでも時間を掛ければ、どこかのヒーローが助けに来てくれる。そんな幻想を抱きもしたが、現実自身に時間を稼ぐ方法など距離を空けるしかないのだ。

「……どうすべき、カ」

超は独り言を呟いた。この状況で両面宿儺がこちらを追って来ている理由を超は一つしか思いつかない。このかの魔力のためである。餌としてか脅威としてか超にはわからないものの、儀式で消費されてなお、このかの魔力量がこの辺りで一番なのだろうと想像したのだ。

千雨がそのことを知ればこの状況で選ぶかはともかくとして、困にすることや捨てることなども選択肢に入れるところだったが、超は選択肢に入れることすらしなかった。超の“正義”がそれを許さないのだ。叶えなければならぬ望みはある。けれども、ここで一人の少女を犠牲にして生き残ったとすれば、超自身の“正義”を語る事が出来なくなるのだ。

「……何か……ない……か」

徐々に迫ってくる両面宿儺を見て千雨は何かないかと考える。既に千雨自身には魔力も体力も尽きている。横目で見たところ、真名の援軍も期待できず、古と詠春の姿も見当たらない。距離的にネギたちが来るのはどんなに早くともあと十分以上は掛る。超の様子から

彼女には何も案が無い事を窺わせていた。この状況下で如何にすべきか、千雨は考える。

千雨には一つの手段は存在していた。しかし、それを行う事は自身にとって大切なものが失われる事を意味していた。それは命より大事なもののなのか、という問いに明確に否と千雨は答えられないでいた。

「キヤツ!!」

千雨は躓き転んだ。既に足の限界は来ていたのだ。湖に来るまでも魔力と体力を削り、ここでも更に体力がそこを尽くまで動かなければならなかった。特筆すべき運動などを行っていない千雨にはこの辺りが限界だった。立ち上がるうにも足が笑って立てないのだ。

「長谷川サン!!」

「いいからさっさと行け!!私は何とかなる!!」

声に気付き、振り返り引き返そうとした超に千雨はそう怒鳴り付けた。その声は先ほどまでの恐怖を孕んだ声と異なり、冷静さを表すような透き通る声だった。自身の声に驚きつつも千雨は笑顔を浮かべた。助けて、と返したかったしそう返事をするつもりだった。しかし、口はそう動かなかった。千雨は自嘲したのだ、いつから自身を犠牲に誰かを助けるような高尚な人間になったのだと。

超は逡巡するも、悔いる表情とともに走り去った。超は自身に二つの言い訳をしていた。いや、嘘をついた。千雨は自身で残る選択をしたのだ、だから自身は悪くない。そして、千雨は魔法使いだから何か手段があるのだらう、と。

理性に置いてその後日に追認したように既に打つ手はなく、千雨と三

人で犠牲になるか二人生き残るかしかなかったのだ。その理性の判断が二つの嘘を容認した。両面宿儺という圧倒的な恐怖を前に超もどこか冷静さを欠いていたといつていい。超には助ける手段がなかった。けれど何かあったのではないか、と後悔することになる。

「…………… 八八八八」

どこか乾いた笑いを千雨は上げていた。超の後ろ姿を見送った千雨は既に目の前に両面宿儺を捉えていた。圧倒的な体躯、なにより含有するその魔力を感じさせるその姿に千雨は自嘲していた。

今日、ここに来るという選択をしたのは調子に乗っていたのではないか。エヴァから逃げ回ることができた、その功を持って調子に乗っていたのだらう、と。あれとて冷静に考えれば、エヴァはかなり気を使って致命傷になるような攻撃をしない様に心がけていたと千雨は今になり振り返っていた。何だやっぱり自身はひよっこ以前に過ぎないのだと過信を戒めた。

両面宿儺は座り込んだ自身をターゲットにするかのように立ちとまり、口を大きく開けた。なるほど、こんなちっぽけな自身も敵としてくれるのかとどこか冷静な部分がそう判断し更に笑いが込み上げてきた。現実逃避しているのだとは千雨自身、気付いていた。

両面宿儺の口に巨大な魔力が集まっている様子が千雨の眼でも確認することができた。そして、それが収束しビームのように打ちだされると予想したのだ。一瞬で葬られると少し未来を予想したことで漸く恐怖が戻ってきた。

エヴァの時とは異なる圧倒的な死の恐怖。それを受け入れられるほど千雨は出来た人間ではない。少しでも逃げようと震える足で立ち

上がろうとするも、巧く立てず尻を着く。その時、震える手を見つめ嵌められた指輪に“取引”を思い出す。そして、先ほどまでの迷いを押しのけ助かりたいという一心で千雨はその指輪に向かい叫んだ。命以上に大事なものなど自身には無いのだと。

「助けてえー……………!!!」

「僕と契約して魔法少女になってよ」

腰まで伸ばした金髪に品性を窺わせるその顔の造形、千雨はその女性を見た時に一瞬見惚れた。漫画やアニメの世界のキャラクターのような完全な美しさと千雨は感じたのだ。だからその整った姿に、どこか夢を見ているようなそんな幻想を抱いた。

しかし、その言葉とともにその表情が嘲笑へと変わった時、千雨の表情も歪むことになる。その“魔法少女”なる頭の痛くなる言葉とその品性の欠片も感じなくなった彼女の表情に幻想が砕かれたのだ。

「いえ、結構です」

千雨は言いきった。千雨には珍しく明確な拒否だった。そして、漸く周囲を見渡し、おかしなことに気付く。鬱蒼と茂った森の中にいるのだ。自身は夏休み初日、変なクラスメイトに暫らく会わなくて済むと多少浮かれてはいたが、このような森の中にいる理由は無い。微かに聞こえる葉が擦れる音や臭い、感じられ肌感覚も現実そのもの。基本に忠実な千雨は自身の頬を抓り夢かどうかの確認を行った。もちろん答えは否。痛みが帰ってきたのだ。しかし、それでも信じられない千雨は自身の顔を殴ってみたがそれも同じ。

「フッフ、やっぱり面白い娘ねえ」

「……………」

自身をどこか呆れる様子で見る彼女を見、千雨は先ほどの言葉

魔法少女 は聞き間違えだったのだろうか、いやそうに違いない

と考えた。自身がここにいる手掛かりを持つのは目の前の存在しかなく、リアルな夢だとしてもそれは同じだと声を掛けることにした。

「え、え〜と。どちら様でしょうか？それとここはどこなのでしょうか？」

年上であろう彼女に対し千雨は言葉使いを改める程度の余裕は存在した。本来は人見知りである千雨には顔見知りでない彼女に声を掛けるのには相当な勇気が必要としたが、開き直ったともいえる。現実感がないからこそ、為せることだった。

「そうね。どこから説明すればいいのかしら。……まあ、言ってみれば僕が千雨を誘拐したってことかしら」

「……………え？」

千雨はその“誘拐”という単語を理解するのに少々時間を有することとなった。そんな千雨と彼女の出会い。

*

「助けてえ——————!!!!!!」

千雨の声は辺りに響いた。絶叫、魂の叫び。その声は千雨からは見えなかった詠春や古にも届くことになった。そして、その声とともに千雨の元へと巨大な光が降り注いだ。両面宿儺の大きな魔力の塊、それを収束したビームのようなものが千雨を襲ったのだ。

どこかそうなることがわかっていても拘らず、置き去りにした超は振り返ることなく走り続けた。少しでも遠くに逃げおおせることこそが千雨の遺志なのだ。眉間にしわを寄せ、既に後悔に苛まれつつも今は仕方ないと走り続けたのだ。

「「なっ！！」」

千雨の叫びに反応を返さなかったのは真名も相對していたフェイトも同様だった。戦場慣れしていた真名はその程度の声は聞き慣れており、目の前にフェイトがいる以上隙を見せるわけにはいかなかったのだ。

が、真名もフェイトも直後に起きた事象に驚きの声を上げた。それは超とは異なり、二人とも両面宿儺へと意識を向けていたからだ。両面宿儺の攻撃が少しだけ逸らされ、そしてその場所に巨大な魔力の持ち主が現れたのだ。

ネギにしては小さい、けれども充分に巨大と表すに値する魔力。その所有者に真名は心当たりがなかった。少なくとも千雨を救ったのだらうその行為から敵ではないかもしれない、と断定はしなかった。

*

「そんな叫ばなくてもよかったのよ、千雨」

「うるせえ」

「それで取引に応じてくれるのかしら」

迫ってくる光、魔力の塊に声を上げたものの、千雨は腰を抜かし座り込んでいた。当たると思い、眼を瞑るも衝撃が全く来ない。数瞬経ち、眼を開ければ光の流れが目の前で二つに分かれ、そして見覚えのある後ろ姿を眼にした。自身にトラウマを与えた相手である。

彼女の言葉に軽く返したつもりだったが、千雨の声にはやや泣き声が入っていた。先ほどまでの恐怖に対し彼女が現れただけで安心を得られたのだ。同時に悔しさを覚えた。こんな奴に安心感を覚えるのかと。

「……あれをどうにかしてくれるならな」

「まあ、それくらいはサービスしてあげるわ。僕は鬼じゃないからね」

悪魔だろ、と言い返したかったがそれは何とか口にせずにする。両面宿儺が無駄だと踏んだのかそれとも、再度の攻撃に力を貯めるためか一端、光はおさまっていた。しかし、周囲は先ほどの攻撃で舞いあがった土埃で見渡すことが出来ない。

腰を抜かし、立ち上がることに出来ない千雨に手が差し出され、止むを得ずその手を取った。そして、強制的に立ち上がらされた。

「さてと、覚えているわね」

「わあってるよ」

「アリー・スプリングフィールドの名において」

契約を行おうというアリーの言葉に千雨は驚く。ネギが探しているという妹の名を告げられたからだ。契約に置いて名前を偽ることは

できないと千雨は聞いていた。けれども、同姓同名という可能性もあり得る。足元から拡がる光を受けつつも、千雨はそんなことを考えていた。

そして、千雨の唇が奪われて契約の完了となった。他の手段などいくらかでもあったが、アリーはこの方法しか行わないし、千雨も抗議しようにもそのこと自体を知らなかった。

「さて、行くわよ」

「へっ？」

アリーから魔力が流れ込む。しかし、未だ動けない千雨はお姫様抱っこされ持ち上げられる。そして、やや冷静になりアリー以外にも意識を向ければ上から両面宿儺の腕が迫っていることに気付いた。

「おい、危ねえって。上か……………あ？」

腕が迫ってくると教えようとするも、徐々に沈み込む身体。そして気付けば同じ湖の畔とはいえ景色が大きく変わる。何より両面宿儺が湖を挟んだ反対側に存在していることに気付いたのだ。

「相変わらず魔法つてのは出鱈目だなあ」

「あら、これくらい大したことないわよ。例えばそのフェイトなんかにも出来るしね」

フェイトと呼ばれたのが真名と戦っている少年であることを察した千雨は、どちらにしる出鱈目な存在だろうと内心溜息を漏らす。改めて距離を取ったことで余裕が生まれた千雨はいくつかの事が頭に浮かぶ。少し離れ心に余裕があるからこそ気付ける両面宿儺の怖さ、超とこのかの事などだ。

「それにしても面倒ね。まあ、僕の千雨のためなら仕方ないわね」
「チツ、だったらもつと早く出て来やがれ」

先ほどの軽口は泣き声が交っていたが、今度は余裕の表れた声となった。いつもの千雨に近づきつつある。それだけアリーという存在を千雨は信頼しているのだ。もちろん、人格はその信頼には入っていない。ただ、その力が巨大で約束などは守ると千雨は知っているのだ。

「あら、今回は僕のモノになったから手を貸すのよ」
「わかってたよ。てめえがそんな奴だつてことはさ」

アリーの本質は気紛れ。二年間、共にいた千雨は嫌というほど思い知る機会を得ていた。千雨に取引を持ちかけたのも気紛れなら、今回見捨てる可能性もあったということ。自身に対して千雨は価値があるとは到底思えず、アリーの遊びに過ぎないのだろうと考えていた。

「どうやって倒そうかしら。別に僕が倒さなくてもエヴァと茶々丸が来ればどうにかなるんだけど、まだ来ないってことは何かあったのかしら」

「おい、マクダウエルの知り合いなのか？」

「それにあんまり時間を掛けて力を取り戻されると厄介だし……」
「うん」

「……私は無視かよ」

アリーの独り言に千雨は突っ込みを入れるも無視される。エヴァを愛称で呼んでいるということは親しい仲なのだろうと千雨は予想した。だから、エヴァの気になっていた人物がアリーなのだろうと。

「そういえば、丁度いい魔力タンクが……」

アリーがそう口にした時、何かを感じたのか森の方を見たことで千雨もつられてそちらを見た。そこには、詠春と戦っていたはずの月詠が一人立っていた。ただし、少々傷が目立ち、あちこち服が破れていた。けれども、最も千雨の眼に着いたのは月詠の服に着く返り血と小太刀に滴る血であった。すぐにその意味を千雨は悟る。詠春がやられたのだと。

「あんた強そうやな。ウチの相手してくれませんか」

そのどこか抜けた言葉とは裏腹の明確な敵意。アリーに向けられているそれは、千雨でも感じる事のできるほどのものだった。月詠は小太刀を口元に運び、滴る血を舐め上げる。その動作だけでも月詠の異常さを表すようで千雨は内心ビクついて、加護を求めるように無意識にアリーの傍へと更に近づいていた。

「あら、飼い犬に手を咬まれるなんて、“サムライマスター”も墮ちたわね」

「長は現場を踏まんようになって長いからな。それでもまだまだひよっこのウチがやれたんは運がよかったですわ」

千雨の叫び。その声が詠春と月詠の勝負の行方を左右した。現場から離れ勝負勘を失ったとはいえ“サムライマスター”と称された詠春は優位に戦いを進めていた。しかし、あと一步のところまで千雨の声が聞こえ、そちらへと意識を逸らしてしまった。現役の頃であれば当然のように無視できたであろう声に気を取られてしまう辺り現場を忘れたといえる。

その隙について月詠が致命的な一撃を詠春に与えたのだ。尤も止めまでは刺さなかった。格上相手でそこを突かなければ破れていたと

はいえ、月詠としては少々不本意な決着だったのだから。

「面倒ねえ」

「そう言わずに相手してもらいますえっ!!」

月詠は地を蹴り一直線にアリーの元へと進む。場数は少ないながらも月詠は魔法使いを相手にした事がある。“魔法の射手”などという矢を何本も放ってきてそれを避けさえすれば、接近戦の相手にすらならず倒せた。だから、アリーが格上であることは一目で認識できた月詠は不利になるであろう距離を置いた戦いではなく接近戦を望んだのだ。

「」

「何をいつ!!」

アリーの唇が動いていたことを目敏く見つけ月詠はそのことを口にしよとすると、何かに押しつぶされるように地面へと押し付けられる。立ち上がるうとするも、何かが上から抑えているように動けない。

「魔法使いが操れるのは、目で見えるものばかりではないのよ」
「グッ」

立ち上がるうとする月詠は更なる重みに再度這い蹲ることとなった。重力魔法、高位といわれる魔法使いの中でも使い手が選ばれる魔法の一つ。アリーの師の一人であるアルビレオ・イマの得意魔法である。無詠唱で使用したが、アルに較べれば威力が圧倒的に足りない。しかし、不意打ちの上、詠春との戦いで疲労している月詠に対してはそれで充分だった。

「縛」

アリーのその一言に月詠の影が彼女の身体に纏わりつき、拘束を完了する。本来のアリーの得意魔法は影。けれども、長年の知識の集約と戦闘経験により多くの魔法を使いこなすことが出来る。相性により威力や燃費に問題が多いことはあるが。

「……………はぁ……………はぁ」

直後、拘束された月詠の背後の森、彼女が出てきた森から息も絶え絶えに詠春が出てきた。肩や足から血を流し、足を引き摺りながら現れた。何より詠春は刀を杖代わりにし歩いていた。満身創痍、既に自身のみで立つことすら叶わないのだろうと千雨は目を見張った。

「くっ……………すいま……………せん」

月詠が拘束されている姿に気付き、詠春はそう口にし倒れた。止めは刺されなかったもののその傷は深くそもそも動けるようなものではない。にも拘らず、少しでも動いたのはただ只管その精神力の為せる技。自身が倒すはずだった月詠、詠春としては追いかけていた彼女が捕まっている姿を見て安心したのだろう、自身を支えて来た気力を切らし倒れたのだ。

詠春が倒れたことで千雨は居ても経っても居られず駆け寄った。契約によりアリーから魔力が供給され、身体を動かす事は既に出来るようになっていたのだ。そして、近寄って詠春のその満身創痍の姿を改めて確認し千雨は絶句した。しかし、魔力が合っても、治癒魔法のような高度な魔法を千雨は覚えていない。

「大丈夫ですか？」

「……ああ、長谷川さんだったか。……状況はどうなって……くっ」
気絶していた詠春は千雨の声に眼を覚ました。倒れた身体に鞭打ち立ちあがろうとする詠春に千雨は涙ぐむ。これが英雄なのだろう、と。自身の身を顧みず何かを為そうとする姿。これからに関して陰鬱な思いを抱いていた千雨に微かに清涼感を覚える。英雄を手助け出来るのだからと。

「頼むよ!」

「はいはい。わかったわよ。これで終わりよ」

涙ぐみ感動を覚えていた千雨は、自身に掛けられたその呆れるようなアリーの言葉に苛立ちを覚えた。

外伝 長谷川千雨の× 回？

「これが“魔法”よ」

千雨はポカンと口を開けて茫然と立ち尽くした。話には聞いていた。魔法があり、それを教えるために誘拐したのだと言ったからだ。とんだ電波さんと呆れ、さっさと帰り途を教えるように言葉を尽くした。

しかし、出てきた答えは否。これだから電波は嫌なんだと再度懸命に説得した。けれども、それは徒労に終わり、魔法を見せると言っ
て見せられたのが光る矢。何かの仕掛けだろうと千雨は口にするも、
今度は重力魔法だといって地面に背中に何も乗っていないのに押し
付けられた。最後には怪我を負わされ、その傷を瞬時に治されると
いう魔法まで見せられることとなった。

「……………へ……………へえ」

今まで信じてきた世界が崩れるのを感じ千雨は声を出せずにいた。
信じざるを得なかった。数分、アリーが何か話していたが千雨の頭
には全く入ってこなかった。ただ何となく相槌を打っていただけだ
ったのだ。

「……………あ、で、千雨に魔法を教えるから」

「……………ああ」

気のない返事だけは行つたが、アリーの言葉に何故自身の名を知つ
ているのか疑問に思えただけだった。文章を理解するほどに未だ頭
は働いておらず、“千雨に魔法を教える”といわれても引つ掛かっ

たのは千雨という単語の方。けれども、ここに誘拐するような輩なのだから、その程度朝飯前かと答えを導きだす。

「じゃ、契約するわね」

「……………ああ」

幾度目かの気のない返事。“千雨に魔法を教える”その言葉が何となく引つ掛かり頭の中で繰り返し流されていた。そして、漸くその意味を理解した時、アリーは文字通り千雨の目の前にいた。アリーの両手は千雨の両頬を捉え、アリーの顔が迫って来ていたのだ。

「へ？」

こうして、千雨とアリーの仮契約は行われた。ほとんど何の話も聞いていなかった千雨には突然の出来事であり、終わった直後に叫び声を上げたのはいうまでもない。

*

詠春の治癒は一瞬だった。そして、叩き起こされた詠春に対しアリーから絶対的な命令が下された。

「千雨を守っておいてね。あと、月詠の見張りも」

その言葉に詠春はやや茫然と頷き返す。アリーはそれを確認した直後、飛び立った。詠春の傷は完全に治されたわけではない。しかし、ある程度動ける程度には治癒されていた。先ほどまでと異なり死ぬ心配は無くなったといってよい。

「本当に大丈夫ですか？」

傷は表面上消えているものの、千雨には治っているかの判断材料が無い。もちろん、アリーが治癒したところを見ていたがそれも数秒。無理矢理詠春を起こして言葉を残し、飛んでいったのだ。千雨には死に掛けていた詠春が直ぐに治るとは到底思えなかった。

「ええ、大丈夫ですよ。ところで先ほどの女性の事なのですが、どなたなのですか？」

痛みはまだ残っているものの、動けはする。いざとなった時に千雨の盾になる程度には動けるだろうと詠春は判断していた。そのことを千雨に告げる必要は無いとその話題を終わらせ、アリーの事を訪ねたかったのだ。アリーは戦友ナギの妻でネギの母・アリカに瓜二つなのだ。少なくともアリカの血縁者であることは窺えた。

「え、すみません。私も知らないんですよ。……ただ、名前はアリー・スプリングフィールドっていうみたいです」

*

「カモくん、あれだよ!!」
「兄貴どうするんすか？」

もう一つの班として行動していたネギたちが漸く湖へと姿を現した。尤もネギとその肩のカモだけで全力で飛ばしてきており、他の班員は遅れている。そのお陰で、超が想定していたよりも五分少々早く到着していた。

杖に跨り向かってきていた最中には既に気付いていたものの、改めて湖に辿りつき上空から眺めれば両面宿儺の大きさとその威圧感が感じられた。素早く周囲の状況を把握し自身の役割は両面宿儺を倒すことだと位置づけた。全力で自身の使える最大の呪文“雷の暴風”で攻撃すればなんとか出来るかもしれないと口にしたのだ。

「僕の魔法ならどうにか……」
「ならないわよ」

ネギの言葉は途中で否定の言葉によって遮られる。同時に杖の後ろに重みが加わり、少し遅れ自身の頭に手を置かれている事に気付いた。ネギが振り返ればアリーが杖の上に立っており、敵かとネギは警戒を露わにする。

「スクナの近くによってくれるかしら」
「えっ？」

「契約に従い 我に従え 氷の

アリーの姿にネギは既視感と懐かしさを感じ、そのことに戸惑う。そして、アリーから発せられた命令、その直後に始まった詠唱から両面宿儺をどうにかするのだろうと推測しネギはその命令に従う。詠唱中に話しかけ気を散らすことになってはいけないと黙る事も忘れない。

両面宿儺に近づきつつも頭の中では先ほど感じた戸惑いに想いを馳せていた。少なくともネギの記憶の中にアリーはいない。忘れていただけなのかと記憶を探るも答えは出ず。再度、顔を確認しようと振り向こうとしたところ、詠唱も終わりに差し掛かるところだった。そこでネギは違和感を覚える。

「えいえんのひょうがー!!」

呪文が発せられる直前、ごっそりとネギの魔力が奪われたのだ。極度の疲労、ネギは何が起きたのかわからないまま、辛うじて空中に留まる事に成功する。

「スゲエぜ、兄貴。あの鬼を一撃で……………て、兄貴どうしたんでえ。顔色が悪くなってるっスよ」

「……………何でもないよ」

「全ての 命ある者に 等しき死を

」

一撃で先ほどまで感じられた威圧感が無くなり、両面宿儺が氷付いた。カモはその事に興奮を覚えるも、声を掛けたネギの様子のおかしさに気付く。顔色が青くなっているのだ。その事に気を取られつつも、止めを刺すのであろうアリーの再度の詠唱がカモの耳に入っていた。

「おわるせかいー!!」

「……………あ、っ」

呪文が発せられた直後のネギの呻き声。呪文により凍らされた両面宿儺の姿は碎け散ったが、そのネギの声にカモは心配になる。直後、杖のコントロールが失われ、アリー達を乗せたまま杖が落下を始める。

「何が起きて……………兄貴い!!」

杖の落下にネギの様子を窺えば反応がない。その為にカモは声を荒げたのだ。かなりの高さでありこのまま落ちれば危険なのだ。その前にネギの状態も心配であったが、まずは落下だとカモは考えた。

「おい、てめえ。何とかしやが……………へ？」

背後のアリーに声を掛けようとするも、既にその姿は無かった。しかし同時に落下が止まっていることにも気付いた。その代わりに先ほどまでいなかった人物にカモは目を見張った。

「え？どうしてエヴァンジェリンが……………」

*

ネギの魔力を使いアリーは両面宿讎を倒した。しかし、同時にネギは気を失った。前日の夜から朝に掛けての疲労、昼の戦闘、そしてここまで飛んできたことなど魔力を多大に消費しており、立て続けの大魔法にネギの魔力が底を尽いたのだ。

アリーとしては想定外のことだった。ネギの魔力量が半ばまで減っているとは思ってもみなかったのだ。特殊な眼など持っていないアリーはネギといえば巨大な魔力というイメージを持っており、残量を気にするという事をしていなかった。尤もだからといって充分な休養さえ取ればいいだけなので、大丈夫だと思いなおし杖の制御を行おうとした。

その直後アリーの直感が働き杖から離れようとした。しかし、間に合わずアリーの左足首を掴まれてしまう。ネギの影をゲートとして転移してきたエヴァによって捕まえられたのだ。

「くっ」

強く握られた痛みにより、思わず声が漏れる。最悪の事態を想定しアリーは迷わず手を下す。取り出したナイフで左脚を切り捨てたのだ。グチャツという嫌な音とともに切り離し、エヴァから距離を置くことに成功する。脚程度であればアリークラスの魔法使いに掛れば、どうとでもなるのだ。

「え？どうしてエヴァンジェリンが……」

直後力モの声が聞こえるもアリーは気にしていられないと治癒の魔法で最低限の止血を行い、体勢を整える。エヴァから距離を置き、湖の上空での対峙となる。

吸血鬼が恐れられる一つの理由として支配がある。相手に噛みつき魔力を送り込むことで支配することが出来るのだ。特に真祖ともなれば例外を除きほとんどの人間を支配可能だった。そして、アリーは例外に属さない。だからこそ、噛みつかれる前に足を切り離し、距離を置いたのだ。

「ぼーや大丈夫か？」

エヴァがネギを受け止め声を掛ける。その様子を見ていたアリーに更なる悪寒が走り、加速を加えた落下を行う。その直後、頭上を人が通り、影が走る。地面に着く直前、アリーは横方向に魔法を掛け、湖の畔詠春とともにいる千雨の元へと辿りつく。

「おい、大丈夫かよ」

エヴァ登場からの流れるようなアリーの動きに戸惑う詠春。自身を治療し月詠を捕縛、両面宿儺を倒したことから詠春はアリーを味方と判断していたのだ。けれども、アリーはエヴァを敵と見た。だからこそ、脚を切り落としてまで距離を取ったのだ。誤解を解く必要があると詠春は頭を働かしていた。

しかし、その詠春を置き去りに事は進む。詠春と千雨の元へと降り立ったアリーは千雨の言葉にも耳を貸さず、詠春が声を掛ける間もなく、次の行動に移ったのだ。千雨を抱きかかえ距離を取る様に森の中に入り、同時に詠春ではその気配を探れなくなったのだ。

複数人を相手に出来るほどの余裕が自身にないことをアリーは自覚していた。身の程をわきまえているアリーは直後に退却を決定し、そう行動に移した。千雨を抱え森の中に入り着地と同時に影を媒介とした転移を行う。潜伏や逃走は長年の経験を生かし得意なこととあって良かった。そのため、転移さえできれば逃げる自信があり、現に逃げ切った。エヴァの登場から一分と経たない早業での逃走だった。

*

アリーに対し仕掛けたのは楓だったが、アリーが急降下することでそれを避けられることとなった。楓も空中で器用な真似はあまり出来ず、アリーを追う事は出来なかった。先に向かったネギを追い楓は湖へと到着した時、エヴァとアリーが空で対峙していた。クラスメイトであり、更にネギを抱えるエヴァにアリーを敵と考えた楓が仕掛けたのだ。

「えっ？拙者の勘違いでござったのか？」

いつの間にか居なくなっていたフェイト。完治とは言い難かった詠春が倒れ、その隙にと魔法が切れた月詠が逃げ出そうとしたところを袋にして倒した。湖に浮いていた千草と古が確保していた小太郎とともに捕獲していた。一段落といったところで、フェイトの相手をしていた真名による事情説明が行われたのだ。

「あの女性が味方とは……。後日拙者は謝るでござる。しかし、ではどうしてエヴァ殿はあの御仁と対峙していたのでござるか？」

「私は巨大な敵がいると聞いてきたのだ。まさか退治された後とは思うまい」

「いえ、マスター。学園長はしつかりと説明しておりました。それを条件交渉で長引かせあまり話を聞いていなかったのはマスターの責任かと」

「うるさいぞ、茶々丸。あれはじじいが私の正当な要求を蹴るからいかなのだ」

呪いからの解放のためにネギの血を所望した。ネギとの戦いには勝利したため本来では手に入るべきもの、停電の回復という別の要素によって叶うことのなかった望み。結局、その条件の交渉で時間が長引き、最後に学園長が妥協したのは両面宿儺復活後。そこから準備に取り掛かったため、時間が掛ったのだった。そして準備により両面宿儺復活後の様子を観察していなかった。

「そうか。長谷川サンは無事だったのか」

「私の見立てでは味方とは思えんがな。気に止むな、超。あの状況であれば私でもそうする」

千雨を見捨てこのかを抱えて逃げたことを気に病んでいる超を真名は慰める。真名の認識ではアリーが敵味方どちらかはわからなかった。おそらく味方だろうと思いつつも、勘が異なると述べていた。であれば、早々に千雨の捜索を行わなくてはならないのだが、味方は満身創痍。元気なのはエヴァと茶々丸のみである。その二人とてアリーに逃げられるという失態を演じていた。数キロに渡る探知魔法や目印を付けていたわけではなく、味方である事を願うのみだった。

*

湖を離れたアリーと千雨は旅館へと足を運んでいた。千雨の荷物を回収するためだった。部屋に戻り、詠春が用意していた身代わりの符を消し、千雨は荷物を整え部屋を出た。途中、委員長である同部屋のあやかが起きたものの、所要が出来たため急ぎ帰る由だけ言い魔法で眠らせた。

「おい、さっさと行くぞ」

ロビーに降りてきた千雨はそうアリーに声を掛ける。しかし、アリーの眼は千雨から少しずれ、その背後を見ていた。訝しんでいた千雨はそれに気付き、振り返る。

「うん……………て、ザジか。脅かすなよ。さっさと寝てろよ」

「……………」

「何言ってるんだか……………」

いつも通り千雨にはザジが理解できないでいた。驚きつつも、さっ

さとあやかのように眠らせなければと部屋まで帰らせる面倒に頭を痛める。しかし、その思考はアリーからの声に打ち消された。

「残念ながら千雨は僕のものだよ。わかるだろ？」

「……………」

「フッフ、納得済みさ。僕は騙してはいない」

「……………」

「って、てめえらどうして会話が成立してんだよ」

初めて見るザジの会話と思われる姿。その姿に千雨は驚く。といっても千雨はあまり教室にいないため知らなかったが、ザジと会話できる人物はクラスに何人もいる。

「ザジの方が詳しいだろ？僕と千雨の間で成立している以上、君が口を出すべきではないと思うのだけど？」

「……………」

ザジは手を交差させ、両手の爪を伸ばす。明らかにそれは武器であり話のわからない千雨からしても二人の間で決裂したことが見て取れた。

「おい、どういふことなんだよ？」

「ああ、ザジが千雨を取り返すために僕を倒すそうだ」

「待て待て」

千雨は頭を押さえ考える。爪を伸ばすなんて出来る以上、ザジもこちら側の人間なのだろうと。千雨は溜息を吐きながらどうすればいいのかと悩む。そして、悩みながら頭の手を首へと降ろした時、その手に当たるモノの感触に思い出す。

アリーによつて付けられた首輪。アリーの奴隷であるという印。一つの願いを叶える代わりにアリーの奴隷となるという法外とも取れる取引。その成立を意味していた。性格最悪と千雨が烙印を押すアリー。その奴隷になるという事を千雨は死よりも嫌っていたつもりだった。だから、千雨としては両面宿儺と対峙した時点でも助けを呼ぶつもりはなかったのだ。けれども、その危機に瀕し、取引に応じた。命より大切なものはないと。

そして、詠春の姿に自身を重ねた。身を捨てても、と命が危ないにもかかわらずやってきた詠春に、アリーのための人身御供とも取れる自身を重ねたのだ。アリーが両面宿儺を倒したことで詠春始め何人かを助けることが出来たのなら、千雨としてはそれで満足だと思えたのだ。

「あゝ、ザジいいんだ。ほつといてくれないか」
「……………」

ザジの答えは聞けなかったものの、疑問を覚えている事だけは千雨でもわかった。助かる可能性があるのにそのまま奴隷に身を落とすうというのだ。ザジが疑問に思うのも無理は無いと千雨は説明を続けた。

「これは私とコイツの関係だ。だから、ザジが口出すことじゃねえんだ。確かにふざけた取引だと思うし、納得し切れねえところもあるけど、私はそれにサインをしたんだ」

「……………」
「ま、嫌になつた時は自力で逃げ出して見せるからその時は助けてくれ。だけど今、私はこの取引を履行したいんだ。ケジメだからよ」
「……………」

コクリと頷いて見せ、戦闘体勢を解いたザジに千雨はにっこりと笑いかける。ザジも笑い返す。その笑顔に千雨は驚きつつも別れを告げた。

*

「で、これからどこに行くんだ？」

「そうね。……千雨が決めていいわよ。ただし、麻帆良以外ね」

「どうしてだよ？」

「飽きたから」

「は？」

「あと、このネコ耳を装着するようにね」

「嫌に決まってるんだろ。それにこの首輪だって目立つんだから外させろよ」

「ダメに決まってるでしょ。こう……なんというかそっちの方が千

雨の魅力を際立たせるといっか」

「うん？待てよ。首輪って契約を強制させるためとか逃亡防止とかじゃないのかよ？」

「僕の趣味ね。その背徳感がたまらなくいいからに決まって……
ってダメよ、はずしちゃー！！」

「普通に外れるじゃねえか。しかも、メーカー名書いてあるし既成品かよ。魔法関係の道具じゃねえのかよ！！」

「魔法具のセンスって最悪だから、こういうのは日本製の方が僕の趣味に合うのよ」

「って、そーいや。てめえ働いているのか？私を養う甲斐性はあるんだろっな？」

「お金？大丈夫。湯水のごとくあるわよ。いざとなれば僕が適当に作ったもの売ればいくらでも手に入るし。尊敬したでしよ。さあ、

御主人さまと呼びなさい」

「御主じ………って、呼ぶかよ。そんな恥ずかしい」

外伝 長谷川千雨の×回 おわり

外伝 長谷川千雨の× 回？（後書き）

アリーにとってにはループの一つ。既にゲームと化していた中で、千雨にちよつと魔法を教えたらどうなるかを眺める回でした。

けれども、二年間教えている間に千雨を気に入って、千雨を奴隷に旅立つことを決意。取引を拒否されたところで、足して二で割ることに。

つまり、眺めながら、飽きれば千雨を回収して旅に持ってところす。

これ以降は、

エヴァはネギの血を吸っても解呪できず学園に留まりネギの修行をネギはアリーの手掛かりについて教えられず、原作通りエヴァの修行を

詠春は学園長・校長とアリーの手掛かりから生きていることとその容姿を知り、搜索に力を入れる

超は悩みつつも千雨の居ないネギパーティーを打ち倒し魔法バレの世界を築く

そんな感じですよ。

二度目に為りますが、こんな妄想を具現化しただけの話をお読みいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1012s/>

あるループの話。

2011年4月21日20時16分発行